

私本太平記

風花帖

吉川英治

青空文庫

野分のあと

敗者の当然ながら、直義^{ただよし}の三河落ちはみじめであつた。

淵辺伊賀守の斬り死になどもかえりみてはいられず——敵に追われどおしで、とくに手越河原では残りすくない将士をさらにたくさん失い、今川、名児耶^{なごや}・細川、斯波^{しば}など一族子弟の討死も幾人かしれなかつた。

ついに、ここでは直義も進退きわまつたとみてか、

「腹搔き切つて、左兵衛^{さひようえ}ノ督^{かみ}（兄尊氏）どのへお詫びせん」といったのを、

「何の、ここはお討死のつぼにあらず。いかなる恥をしの中でも、生きてこそ」

と、今川範国^{のりくに}のいさめに思いとまつて、苦闘に苦闘をつづけ、やっと川を渡りえたとつたえられている。だがこの段はさて、どんなものだろうか。

直義の性格として、めつたに斬り死にだの自害だのとは言いだしはしまい。もし事実なら、おそらくまわりの将士にさいごの決意を奮わすための指揮者の血相をみせたまでのも

のではなかったか。

なぜなれば、彼には、彼の身ひとつ以上な重任が考えられていたはずである。——鎌倉から救出して連れていた成良親王・みだい所の登子・またとくに若御料（尊氏の一子・千寿王）らの足弱をおいて——そうした短気はおこしえないところであつた。

また、べつに淵辺をやつて、このどさくさ紛れに、大塔ノ宮を暗殺せしめたなどの、直義がとつた処置をみても、惨敗の中でこそあれ、彼はなかなか狼狽などはしていない。次の段階——将来というものにたいして、兄の尊氏以上にも、

「いっは」

と、はや今日の鎌倉放抛を、大望第二期への峠として、独断、思いきつた手段に出たこととわかる。

そして要するに、彼の胸にあつたのは、長いあいだのもどかしさを、宮弑逆の一事にかなぐり捨て、つねに政治的に、またつねにじれったい、兄の態度をして、いやおうなしに明確な反朝廷へとここで引きずりこんでしまおうとする彼一流の強引な腹だつたにちがいない。

とまれ、手越河原の難はからくも脱しえたが、矢矧までまだ四十里ほどはあつた。——

が幸いにも、ところの地頭、入江ノ左衛門 春倫はるともの一隊が味方にはせ加わり、どうやら月の末、三河国の矢矧についた。

ここは郷党の地だ。即、足利方の勢力範囲といっている。直義は、みだい所の登子の身をひとまず一色村へあずけ、また成良親王は、そのまま兵をそえて都へお送りし奉った。そしてひたすら兄尊氏の下向を待ちつつ、また一面、奪回された鎌倉を、さらに再度奪回するの策やら準備におこたりなかった。

一方、都の空では。

つとに敗軍の報がひっきりなしに朝廷へも六波羅へもはいつていた。

まだ、直義の鎌倉放抛とまでは聞えないうちからである。尊氏は、

「あぶないもの」

と、はやくも形勢を察し、みずから赴いつて、直義を扶たすけたい旨を、再三、朝廷へ奏請していた。しかるに朝廷では、これにたいして、断じておゆるしを降くださなかった。

もつとも、尊氏が朝廷へ願ひ出ていたのは、ただたんに、

「こと火急。鎌倉は無勢。みずから馳はせくだつて弟直義をたすけねば」

というだけのものではなかった。

同時に、このさい、
征夷大將軍せいゐだいしやう総追捕使そうついふし
の印綬いんじゆを自分にたまわりたいと、あわせて、請こうていたのである。だが、

「もつてのほかな！」

とする廷臣の強硬な反論のあらうことぐらい、彼が想見していないはずもない。知りつつ持ちだした奏請なのだ。尊氏も引くいろではなかった。

つまるところ、窮極は天皇の御採否一つにかかる。おそらく叡慮をなやまされたことであらう。

征夷大將軍

は武家最上の任である。それを尊氏にゆるすのは、かつての鎌倉將軍家の格式を彼に与え、幕府再建をみとめることにほかならない。

一日一日、日はすぎた。

朝廷はゆるさず、六波羅はうごかず、ただ東の、敗報ばかりが、矢つぎ早であつた。するうちに、鎌倉の放抛、直義の敗走、つづいて大塔ノ宮がその幽所で何者かに殺されたなどの取沙汰も聞えて、都じゆうは容易ならぬ風騷ふうそうの中におかれた。

そうした八月一日。

朝廷は発表した。

鎌倉をのがれ出た成良親王しげながをして「征夷大將軍トスル」という補任の令である。――
これで尊氏もあきらめよう。そしてまた、尊氏の野望をも、これをもって塞ふさごうという窮
余の封じ手だったのはいうまでもない。

「殿は」

高こうノ師直もろなおはいま、どこからか、馬で六波羅へ飛んで帰って来たばかりである。

例ひさしの廂まノ間で、一ト汗拭いて、やがてのこと、薔薇園しょうびえんの書院のうちに、ぬかずいてい
た。

「いや、その儀は、いましがた、ほかの筋から耳に入っておるよ。かさねて、そちから聞
くにもおよばん」

尊氏は言った。いつもの尊氏とかわりもない。

いささか拍子抜けのかたちである。師直は、また出る顔の汗を懷紙でそつと叩きながら、
それとは離れて、とつさに言った。

「いよいよ、お腹の決めどきでございますな。朝廷がわのご態度はさだまりまいたで」

「いまさら何を」

尊氏はうすら笑つて。

「そちには、用が多いぞ。いつでも廂ノ間へひかえておるようにいたせ。かかる折、執事のそちがどこへ行つておつた」

「てまえならではなるまいかと存じ、佐女牛^{さめうし}まで一ト鞭^{むち}あてて行てまいりました」

「道誉の許か」

「さようで」

「よく気がついた。気がかりはあの男のうごきにある。いたか」

「おりませぬ」

「参内か」

「でもございませぬ。はや佐女牛は無人同様で、昨夜、国元の伊吹へひきあげたと、留守の者が言いおりまいた」

「奴。さすがだな」

「そして、この一書を、足利殿へと、あとの家臣に託して行つたよしにござりまする」
文面を一読、尊氏は苦笑をみせ、それなりで黙つていた。

「殿」

と、師直は膝をすすめ、

「道誉が何を書き残しておりますので」

「見るがよい。——このさい二心なし、と道誉がわざわざこれに証判しておる。そして、わしの東国出勢^{しゅつぜい}を、途中の伊吹にてお待ちせんとも書いておるのだ」

「はアて？」

師直はうめいた。誇張したあきれ顔をその下に作って。

「まだ、ご当家の出勢は布令^{ふれい}てもいず、朝廷もまた例の、殿がお願いの件を、おきき入れはなく。……いやその奏請^{そうせい}は蹴られて、征夷大將軍の任命は、成良親王へご決定と、公布がみられたばかりなのに」

「道誉は早耳だ。すでにその内定を、きのうのうち、知ったのだろう」

「それにしても、殿のご意中もようたださず、伊吹へ帰って、ご軍勢の通過を待つなどという先廻りは」

「よくいえば、機を見るに敏^{びん}なやつ。悪くいえば抜け目ない横着者だ。が、よかれあしかれ、彼が二心なしといってきたのは、大きな幸せ。……さもなければ、尊氏はここで這奴^{しゃつ}

にのど首をしめられねばならなかった。たとえばどう膝を屈しても、道誉の機嫌をとつて味方に迎えねば、うごきのつかぬところであつたよ」

「ではやはり？」

「師直。きょう中にあらゆる準備をぬかりなくすましておけ」

「ご発足は」

「明朝、あかつき」

「そして、朝廷へは」

「そのままでよい。お届けにはおよばん。再三、お願い出ではしてあるのだ。……のんべんくらりと、御命ごよめいの降下を待っていたら、東国の様相はそのあいだに一変してしまうだろう。さもあらば、とり返しはつかぬ」

事実、尊氏はいま刻々にそれが案じられていた。

天下の武士あらましは、公家政治に失望して王政ならぬべつな“何か”の形態を統一のうえに欲している。——北条残党ののろしが、東国の野でたちまち巨大な火勢となつたのも、現状に不平な枯れ草が土壌いたる所にあるからだ。

これは、尊氏として、坐視できない。武士の不平は、彼にすれば、彼のいあく大望の理

想楼閣をきずく良材なのだ。味方なのだ。その素地したじを、北条再建軍にうばわれては、彼の立脚する所はなくなる。

かつは、朝廷としても、ここまできた北条討滅の意義は霧消してしまふ。——だからたとえ朝命をまたず無断東征に赴おもむいても、それは天下の御為ともいえるのではなからうか。尊氏は、しいて自分の行為に、そう理由づける。

直義ただよしとちがい、彼には暴を暴と知つてはできない思慮しよがあつた。朝廷度外などの不逞あへは敢てなしないのだ。あくまで彼のなかには朝廷への崇敬があり、上への越権は氣にかるらしい。

にもかかわらず、彼は師直へ、無断離京の準備を命じた。ひとつには、望んでいた征夷大將軍の補任が外はずれた業腹ごうはらもあつたが、なによりは弟直義を見殺しにはできないとする情があつた。分別顔に似ず、情には奔はしるほうなのである。

明けて、八月二日は、空もようまでが、ただならなかつた。颱風期たいふうきである。どこか遠国で大荒れをしているのだろう。近畿きんいたたいは強風だつた。都くもの朝も雲脚あしの迅い明滅をしきりにして、加茂川の戦そよぎがそのまま大内裏の木々をも轟々ごうごうとゆすつていた。

「あれ、御簾が」

「蒔が」

と、殿上でも、舎人や蔵人たちが風にもてあそばれ、てんてこ舞いな姿だった。雨のないのがまだ見つけもので、木の葉まじり、大屋根の檜皮までが空に黒いチリのつむじを描きぬいている。

こんなところへの頻々な取沙汰だった。

「朝まだき、暗いうちに、足利の宰相（参議）をはじめ、六波羅じゅうの勢は、東へ立った」

「はや六波羅には、武者らしきものはひとりもいぬと申す」

「総勢千七、八百騎とか」

「いやいや、それが大津越えにかかる頃は、尊氏を慕うてあとより追っかけ加わる勢もおびただしく、いつか三千余騎にもなっていたという」

「いずれにせよ、尊氏は、八座の宰相の身にありながら、君恩もわすれ、朝命も待たいで、無断、東下をあえてしたことは確かとみゆる」

「不忠不逞な臣」

「断乎たる御処分な降されねばあいなるまい」

公卿口の姦しき。殿上いずこの間でも廊でも紛々たる騒めきである。

公卿ばかりでない。新田、名和、結城などの武臣も、ひつきりなしの参内だった。——
わけて千種忠顕は早々に出仕して、上卿の面々とともに中殿の御座へまかり出てい
た。

「皇威にかかります。勅使を立て、尊氏の意をただすべきでございましょう。もちろん、
尊氏は理くつをならべ、朝命に畏みますまい。そのさいは、ぜひもございせん」

忠顕は言った。

——義貞をさし向けて討ち取るべきだという意見である。

すでに直義は東国でやぶれた敗残の将、尊氏は六波羅をすてて途中にある無拠地の旅軍、
これを追って討つのは容易だともいうのだった。

「だがの」

ここは待たれよ、とする上卿たちの声もつよい。彼の無断東下が、さまで不逞不忠な罪
といえるだろうか。朝命を待たず戦争におよんだ例は、古来、たびたびある。——後三年
ノ役の源義家、前九年のさいの頼義、みなそうだった。——いつ降るかわからない朝命を

待つていたら、戦機、とり返しがつかぬ大事にたちいたるからである。

尊氏のこんどのばあい。

尊氏からいわせれば、そうも主張できようか。武士の間には、「軍中將軍ノ令ヲ聞クモ、天子ノ詔ハ聞カズ」ということばすら信ぜられているものを――と、上卿の老公卿は危ぶみ、また、名分の稀薄を指摘するのだった。

こんな論議のうち、いつか午^{ひる}すぎてもいたのに、

「在京の武門、あまたな武士ども、足利宰相のあとを慕^{した}い、なおぞくぞくと都を離れ出て行きます」

と、刻々その動揺ぶりは宮廷内へも聞えてくる。

すでにその頃、尊氏は瀬田大橋もこえ、彼の東下の軍勢は、野分の爪^{のわけづめ}あとのひどい稲田を途中に見つつ近江路を急いでいた。

「えらい風」

と、尊氏はつぶやいた。

従う三千余騎もみな風の中である。歩兵はヨレヨレに縋^よれてあるいた。

「吉良。追い風だな」

「は。西風で」

「舟にも似て、風を負って行くゆえ、駒も軽い」

「得手えてほに帆とやら、お門出かどでは上々吉です。が、野分のあとを見てくると、東へ行くほど、

荒れがひどいようですが」

「途中、崖がけなだれや出水のさまたげに会うかもしれない。……しかし従う面々がこの意気なら何ほどのことでもない」

尊氏が「意気」と言つたには、ふくみが聞える。

吉良貞義は、ふと他の面々を見まわした。

高ノ師直、桃井直常、一色右馬介、引田妙源らはべつとし——自分をはじめ、仁木、畠山、斯波しば、石堂、荒川などの一族輩はみな例外なしに、尊氏が弟直義を案じる思いと変わらぬものを胸に持っていた。

なぜならば、その誰もが、兄や弟や、我が子らを、東国の空にいていたからで、生きているやら？

はや死者のかずか

と、口にこそ出さないが、急へ赴おもむく悲壮ないろが、しぜん、たれの眉にもあつたのだ。

行く行く兵は増すばかりで、翌々日、近江番場へかかったとき、引田妙源は尊氏へ

「お供の軍勢はもう四千をかぞえまする」

と、告げていた。

在京の武門のほぼ三分の一は尊氏を慕つて従いて来たし、土地土地の無主無名のやから

も、腹^{はら}当^{あて}一つに柄^{つか}もほつれた腰刀や、古長巻など引つかかえて、十人二十人の徒党で

「——足利の宰相が御東下の端に」と、陣へ投じて来るのであった。もとより深い頼みにはならぬ鳥^う合^{ごう}だが、ばかにならない数にはなる。

やがて、不破ノ関は近い。柏^{かしわ}原^{はら}ノ宿場だ。ここには約束の佐々木道誉が、約をたが

えず、自軍を立て並べて待つていた。

尊氏の姿を見ると、道誉は、宿場の一陣屋から立ち出て来た。そしていつもの倨^{きよ}傲^{ごう}な

彼とは別人のように、腰ひくく、

「御^ご着^{ちやく}。お待ち申しあげておりました」

と、臣礼をとつて、

「軍旅のお疲れもやと、あれにご休息の用意をさせおきまいてござりまする。……いかがでしょう。しばしお憩^いいあつては」

と、誘いかけた。

「いや」

と尊氏は、鞍あんじょう上じょうのまま。

「知つての通りだ。直義の安否も気づかわれる矢さき、このまま行こう。御辺もすぐつづいてまいらしい」

「もとより伊吹の手兵一千、挙げて参陣の心ぐみで、これにひかえておりましたなれど、寸時、彼方の陣屋の内で、このさい会うてお上げなされてはいかなものと思考しますが」

「会うてやれと？ 誰に」

「ご一子、不知哉丸いさやまるさまに」

「……………」

「また、藤夜叉どのとも。……いやその藤どのは、名をかえて、いまでは越前えちぜん前まえと申しあげ、以後ずつとお変りなく、伊吹の城に、今日を待つておられました。ひと目会うておあげなされませぬか」

尊氏はふと胸をさいなまれた。

なろうなら目をふさいで過ぎてしまいたかつたものを——その罪業ざいごうの形見みたいな者

たちへ——^{にが}苦い想いを余儀なくされていたからだった。

道誉の言によれば。

藤夜叉は、越前ノ前と名をかえて不知哉丸とともにつつがなく伊吹の城にいるという。あれいらい三年になる。不知哉丸もはや十三か。

その母子をわすれているどころか尊氏は自己のおかした罪業のつぐないをいつかは果たさねばならぬものとして日頃にも悩んでいた。けれど実の子や妻とも一つにいられぬほどの時局だった。大望の達成までは、家庭や身の犠牲はやむをえないとあえて顧慮から忘れようとしていたのである。彼はわざと非情を顔に作って道誉へ言った。

「いや、御辺の親切気はかたじけないが、この日において、申さば、つまらぬもてなしというものよ。さし措^おいてもらいたい」

「では、ご対面は」

「いたすまい」

「ふたりは、がっかりするでしょう。ここを御通過ときいて、ひそかにお会いがかなうかと、愉しんでいたふうですから」

「いまはそんな時ではない。いかに先をいそぐ身かは、御辺がよくわかっているはず」と、

言い捨てた。そして「——妙源いるか。引田妙源」

と、ほかを見て呼び、軍の編成について早口にいつけた。

「ここから加わる佐々木の伊吹兵一千は、二の備えに組み入れる。——道誉。すぐ行くぞ。二の陣について来い」

軍命として言つた彼のことばは、個人を超えたひびきで、もうそれに、私事をさしはさむ余地などなかった。従来^の佐々木道誉も、麾下^{きか}の一部将としてしか扱つていず、またそれ以上には眼の中においてもいない尊氏なのだった。

「はっ」

と、道誉は唯々^いとして去つて、中軍から次の隊伍に加わつた。その編入にやや手間どつたが行軍はすぐつづけられ、前隊はもう不破ノ関を通過していた。

その間^{かん} おそらくは不知哉丸^{いさやまる}と越前ノ前は、柏原の陣屋のほとりか、寺院の門の蔭にでもいて、よそながら尊氏の通過を見ていたかもしれなかった。しかし尊氏の眸にはいかなかった。またその眸は、それをさがしていたような風でもない。

美濃路——

尾張平野

道をひがしするほど、過ぐる日の颱風が、東国寄りの地方であつたことがわかる。

行軍は、出水のあとや、まだ水カサのひかない川の渡河になやんだ。が、ようやくのこ
と、京都発足らしい七日目の八月八日、三河国に着いた。

「お見えか」

待ちかねていた直義ただよしは、矢矧やはぎの陣所から八橋やつはしまで出て、兄尊氏の全軍を迎えた。

相互、無量な感であつたろう。「梅松論」がいう——当夜、矢矧二御着ヤハギゴチャクアツテ、京都鎌

倉ノ両大将御対面、久々ナル御物語り、尽クトモ見エズ——とある一条の短夜みじかよは、こう
して、あわただしいまにすぐ白む。

そして翌九日。尊氏、直義の兄弟軍は、もうそこを発して、ただちに鎌倉へさしていた。

鎌倉を奪とりかえした北条遺臣の寄合軍は、統一上、

御先代の軍

と、みずからを称となえていた。

その先代軍は、

「必定、敗北した直義の次に来るものは尊氏！」

と見、うらみかさなる尊氏、目にものみせんと、遠江からひがしの要所要所に陣地を構築して、備えには、おさおさ怠りなかつたのである。

だが、先代軍の大將、名越式部大輔だゆうがまず、橋本（浜名湖附近）の序戦にやぶれた。つづいてまた敗れ、その総なだれを初めとして、

佐夜の中山合戦

駿河の高橋繩手（興津附近）

箱根越の山いくさ

相模川渡河戦

片瀬、七里ヶ浜

鎌倉口

と、敗走に敗走をかさねた。足利方は、要害七カ所七度のたたかいても、ついで負け色をみせず、行くところで勝ち、十九日、尊氏の馬は、もう鎌倉の内へ突き入っていたのである。

連戦わずか十日だった。この迅き強さにみても、このときの足利勢が、いかに気鋭新鮮な、いわゆる風雲児の下に引率された軍であつたかが察しられる。

道誉でさえも。

といつてしまうと、彼は弱い凡将のようだが、彼の天分は別な面にあつて実戦場ではむしろ狡将と呼ぶべき方の者だろう。その道誉でさえも、このときばかりは必死な目にあつて働いた。いや働かされたといつてよい。

それは、相模川の合戦の日であつた。

敵は、遠江から退いた名越式部の死にも狂いな兵を中心に、伊豆の伊東祐持や、三浦、諏訪などの新手を加え、頑強にふせぎ戦つて一步もひかない。

このとき、尊氏が、

「ここはよい。ここはよいから上野（太郎頼勝）の隊と、仁木（三郎太義照）の隊は、川の上を乗り渡せ。また、佐々木（道誉）の隊は下流を渡つて、無二無三、対岸の敵の腹背に出ろ」

と、軍令した。

これはきつい令である。決死隊にほかならない。

道誉は心で、ほかに足利譜代の将も多いものをと、

「ちッ」

と、思ったがぜひもなかった。馬うまい筏かだを組んで、敢かん然ぜんたる渡河戦の先陣を切った。もとより河中では矢ぶすまを浴び、対岸へ斬りこんでからも、たくさんな犠牲を出したのはいうまでもない。

従軍はしても、彼は自分が子飼いの伊吹兵は、これを極力大事にして、武功と取り換える消耗はつねに巧く逃げている。

「……尊氏め、それを知って、おれを今日の難場に使ったな」とは思ったが、しかし彼の上には勝かち鬨どきが沸いていた。悪感情もたちまちそれに吹き消されていた。

こうして彼は、今川頼国と並んで、海道下りの二大将となり、鎌倉口まで先陣をつづけたが、しかしその道誉には、上野と仁木の二部隊が付いていた。軍監として、彼を督戦していたのである。

とまれ、鎌倉はまた、足利方の下に回かえった。

先代軍の脆もろさは案外というしかない。北条時行以下、各地へ四散し、ふたたび元の残党境界の陽かげにひそんだ。この先代軍が鎌倉を占領していたのはわずか二十日間に過ぎなかったもので、世上これを「二十日先代ノ乱」といった。

あずまげしき
東景色

これで、鎌倉の地は、高時いらい、わずかな年月に、四たび主をかえたことになる。

よしさだ
義貞

ただよし
直義

先代軍の北条時行

そして、今からはまた、尊氏が事実上の「鎌倉殿」たる座にすわった。

さきに直義がいた二階堂御所は手ぜまなので、さつそく、若宮小路に新邸が造営された。といつても全体の落成ではない。とりあえず一部を普請し、あとは昼夜兼行の鑿や手斧の音だった。

人々はそこを、いつか、

大御所

と呼んだり、將軍御所といったりした。そして直義の二階堂の営はたんに「下御所」といいならわした。「鎌倉大日記」に——尊氏ノ鎌倉二入ルヤ、自ラ征夷大將軍ト称ス——などとあるのは事実でないし、世間から観た彼でもない。

世上ではこんどのいきさつを知っている。

なるほど尊氏は將軍宣下せんげを求めていたが、朝廷はそれを拒否して、他の宮へ征夷大將軍を与えてしまった。のみならず、朝議はその後、おかしな叙任じょにんを尊氏へ贈っていた。

尊氏が、無斷、都を発したあと朝議紛々ふんぶんの結果ではあろうが、追っかけに、彼が矢矧やはぎについた日の頃、

征東將軍二補ホス

との沙汰をとどけていたのである。征夷大將軍でないべつな官称だ。これなら尊氏が幕府を再建するものとはならない。しかも似ている。という姑息な慰撫であつたのだ。尊氏は笑つておうけしたが、直義はあとで、なぜ御返上しなかつたかと、ひどく腹を立てたことだつた。

だから、似て非なる征東將軍でも、將軍御所にはちがいない。また大御所と呼ぶのも不当ではなかつた。けれど尊氏はそんな実のない敬称によるこんでもいず、また無頓着なほうでもあつた。そしてこのさいは、諸將の功にむくいる行賞などの方にむしろ興味があつたらしい。彼は、尻尾を振つてよろこぶ者を見るのが第一の好きらしく、余りに氣前がよすぎるほどだつた。それが過ぎて、すでに朝廷で没収していた旧北条遺領や、新田義貞が

受領した土地までを、麾下の将につい頒けてやってしまったほどである。直義をよく叱るが、やり過ぎは、彼にもある。

それと彼は、降伏者には寛大だった。——直義はきびしい。峻烈に斬る者は斬る。——だが尊氏の耳にはいると、いつも彼がなだめる方にまわっていた。たいがいな旧怨も忘れ顔で助けてしまう。先代軍の余類からも少なからぬ降人があつたなどは、しぜんそんな風評が武士間にあつたからにちがひなかつた。

こうしたうちに。十月。

都からは、ゆゆしい勅使の下向と聞えてきた。やがて、詔を奉じてきた御使は、中院ノ源中将具光で、こういう朝命の降しであつた。

「東国の逆乱もすみやかな静謐を見、相共によるこばしい。さつそく将士の軍功の施与は、綸旨の下に、朝廷で宛て行うであろう。されば尊氏には、一日も早く帰洛し、六波羅にもどつて、逐一の報告を親しく上聞に達しおわれよ」

時局も時局である。しかも、勅の旨は、

尊氏みずから、すみやかに、上洛あるべし

という厳命だ。

勅使中院ノ具光ともみつは、おごそかに尊氏へ伝達してから、個人的なくつろぎに返つて、
「いやなに宰相さいしやう。即答はごむりである。何かと周囲むずかしい御多端も拝察に難くない」

と、言い足した。そしてまたいうには、一族間の御協議などもおありであろうゆえ、両三日のことなら逗留してお待ち申すもよい。とにかく、明確なご返辞をえて帰洛したい、と釘を打つのだつた。

「こころえてござりまする」

尊氏は、旨を拝した。

それなり沈黙におちている。——熟慮のうえでともいわず、即答したことでもない。

中院ノ具光がじつと観るところ、なにさま、尊氏の心中は困惑そのもののようにうかがわれる。くるしげな彼の立場と腹の中が鏡にかけてみるようにわかる気がするのであった。ややあつて、尊氏は、こころもち胸をただした。

さしうつ向いていたうちに、その苦渋を顔から除とつていたのか、はしなく具光の眼と見あつた眸は、細ほツそりと笑えみを描き、頬の薄らあばたまでがこの人特有な茫ぼうとした愛嬌をたたえて、何の屈託くつたく顔でもなかった。

「いや両三日が間は、旅のおつかれを休め、まためつたには東国への御下向もありますまいから、鎌倉あたりの御見物もなされませい。……それにせよ、尊氏が返答如何にと、重き御使^{みつかい}を胸につかえておられたのでは、心から東景色^{あずまげしき}もお楽しみのお眼には入るまい。その儀はどうぞ御安堵^{ごあんぶ}あつて」

「では」

と、具光は意外そうに。

「お召には、否やなく、ご承諾と仰せられるか」

「勅。なんで否やがありません。さきごろ、みゆるしも待たず、急遽、六波羅を出てまいりましたのも、もしその果敢を取らなかつたら、今日の勝利もなく、尊氏は弟直義を失い、都は北条遺臣軍の包囲を見、天下の再乱、君のおん大事は必至と、憂えられた以外、何の私心でもございません」

「ごもつともじゃ。さればその儀については、君もさらさら、お咎めではおわしませぬ。そればかりか、其許^{そこ}の功を嘉せ^{よみ}られ、征東將軍の称を贈つて、宰相の心をなだめようとさえしておいであそばす」

「もつたないことでした。不肖尊氏にたいする君の御優遇には、いつも心のそこからあ

りがたいとおもっております。乱麻らんまの時代、権謀の多い君臣の内外。時には、叡慮にもそむき、また時には、お氣にくわぬ自恣じしもあえて振舞う尊氏にはござりますが、正直申せば、僭上ながら自分は当今のみかどを、比類なき英君なりとあがめておる。そして主上もこの尊氏をかくべつお目かけて下されいるものと、鴻恩こうおん、忘れたことはありませんぬ」

「ううむ、おことばのまま、ようおつたえ申しあげよう。いかばかりおよろこびか」

「されば、御使みつかいなくとも、夙つとにわれから上洛すべきでしたが、戦後なお鎌倉は乱離らんりの状です。なにとぞ、ここ数日のご猶予をばお願い申しあげまする」

勅使の中院ノ具ともみつ光は、

「これで安心いたしました」

と、ひとまず宛てがわれた饗応屋敷へ引きとつた。そして尊氏からは、
いつ上洛するか

の日取りを、数日中に答えることになったのだった。そのあいだの饗応役は、高ノ師直。
これは適任であつたろう。

がしかし。勅使下向のその日から、どことはなく全足利党は殺氣立っていた。朝廷から何をいつて来たのか。その難題とは何か。その饗応屋敷をめぐるって険悪な臆測をさまざ

まにし、あたかも敵国の軍使でも迎えたかのような反抗気分さえあるのだった。

「万一でもあつては」

と、尊氏は上杉憲房のりふさをして、勅使の宿所から一町四方を警固させた。それほどな動揺の中であつた。

「あとはたのむぞ」

と、尊氏は今、大御所の広間に居ながれた一同へ向つて、

「ぜひなく自分は、勅を畏かしこんで早々そうそうに上洛いたす。君もお待ちかねとの勅使のおことば。

何はにおいても、罷まからねば相なるまい」

と、言つていた。どうしようと諮はかる評議ではない。決意を告げ渡していたのである。

「……………」

弟の直義。

以下、細川和氏、仁木、今川、一色、畠山、斯波しばなどの重臣から、そして佐々木道誉までが、たれひとり尊氏の言をそのまま胸にうけ容れたらしい顔つきでない。沼のような沈黙がつづくだけだった。こうなると直義以外には一族の気もちを率直に口に出せる者はなかった。

「宰相さいしやう」

と、彼も兄弟としての馴れなどどこにも示さず、重々おもおもしく、その頭かしらを下げて。

「仰せではありますが、このさいの御上洛などは、もつてのほかと存じられます。何とでも辞を構えて、ここはお断り申し上げておかれますように。……一同もひとしく同じ憂いに相違ごございませぬ。いや、問わずもがな。揃つて、お見合せのほどを、こうお願いつまつツておりまする」

すると尊氏は、

「いや」

と、刎ね返すように、きつぱり言つた。

「そうはまいらん。ほかならぬ勅のお召めし、またも違勅をかさねては畏れ多いおそ」

「ですが」

「ならんだ、そこが」

「そこがと仰せられますが、しかし、時にもよれ、勅にもよること」

「直義」

「は」

「一同へも、かさねていう。すでに拝諾の旨は、勅使へお答え申しあげてしまったのだ。

——時も時なる危うさは、尊氏とて、知らぬはずがあるものか。上洛なせば、堂上こぞつて尊氏を指弾し、身の申し開き如何を問わず、万々の御譴責はあるだろう。……が、わしは天皇の御寵恩にそむき奉ることはできぬ。このまごころをもつて咫尺にお訴え申しあげてみるつもりなのだ。おそらくは君もおわかりくださることと思う。……な、直義。また一同もその結果をおとなしく待て。かまえて妄動しては相ならんぞ」

「では、どうありましても」

「む。上洛は変更し難い」

「いや私どもは、何としても、お止めせいではいられません。断じてお止めいたしまする！」

「いうな、直義」

尊氏は叱った。

だが。直義が黙ると、仁木、今川、細川、みな口を揃えて、

「何とかお考え直しを」

と、上洛の危険を説き、尊氏の決意を諫めてやまなかった。

佐々木道誉も、おなじ見解で、

「このさい、もしご上洛あらば、必ず義貞の要撃をうけて、天皇への御拝顔をとげる以前に、千種忠^{ただあき}顕^{あき}らの罊^{わな}におちいるものと、お覚悟あらねばなりませんまい。なぜなれば」

と、ここで彼は知るかぎりな公卿間の内情をかたった。在京中には、千種や新田とも、つきあいよくつきあっていた道誉である。そのことばには、耳をかしていいものがある。

すでに、尊氏要撃^{くわだ}の企ては、大塔ノ宮いらいの根深い計であり、今とて変更されているはずはない。むしろ、宮の遺臣やその勢力は、義貞の下に編入され、打倒尊氏の計画は、義貞を中心に一ばい強大になっているだろう、と道誉はいう。

そのほか、幾多の悪条件をかぞえて、極力、道誉も諫^{かんし}止した。けれど、尊氏はいぜん、うなずく風もなかった。——ただ一ト言、考えてみる、といっただけである。そしてかえって、留守中のさしずなどして一同を退がらせた。

「なにとぞ、ご賢慮を」

ぜひなく、一同は退出まぎわの一言に一縷^{いちる}をつないで退きさがったが、しかしこれで安らげるはずもない。その夜、またあくる日と、この面々は直義^{しよごしよ}の下御所に寄合^{よあ}って、どうしたら朝廷の難題をのがれうるか、また、尊氏を思い止まらすことができるか、直義を

中心に、鳩首きゅうしゅ、談合の様子だった。

その果てとみえる。

直義はただひとりで、一夜、下御所から兄の大御所をおそくに訪ねた。

「はやおやすみの時刻、あすにゆずろうかと思いましたが」

「いやまだ寝るにはちと早いから頼春（細川）を相手に碁ごでも打とうかといっていたところだ。そちが来たのなら酒でも酌くもうか」

「いえ、ちとおはなしもございますから」

「なんなの」

「そのご、何かよいお考え直しがおつきでございましょうか。直義ただよしもそのみが苦慮くろされ、一同もひたすらお案じ申しあげている次第ですが」

「上洛の件か」

「はい」

「あれなりだ」

「あれなりとは」

「鎌倉の留守の方がむしろ心配だな。ご勅使への返答も迫っておるが、出発の日取りだけ

がつい決めかねておる」

「兄上」

「なんだ」

「ではまだお迷い中なので」

「迷ってはいない。一同の案じるところもよくわかっているが、勅命、畏^{かしこ}んで行くしかない。上洛ときめているだけだ」

「ばかな！」

直義はついに張りつめている胸のものを破つて、兄の、まともに瞠^{みは}った眸へ向つて、挑^{いど}みかかった。

「勅が何ですつ、勅が。勅とあれば兄^{あにじや}者には、そんなにもありがたいのか。そむけないものなのか。兄者は近頃、どうかしてしまっている！」

尊氏は、屹^{きつ}と、きつい厳^{きび}しい顔をしてみせた。

「……………」

ものはいわず、それはただ兄の顔になりきっている。

これにぶつされると、直義は幼少からの習性に抑^{よくし}止されている平常の屈従感から、別な

“弟の反抗”が抑えようなくむかつくとクビをもたげてくる。

直義にはつねに、公おおやけの兄なる人と、私の兄とが意識無意識にくべつされていた。——今夜この室にはたれもない。——直義の感情は丸裸なものになれと内からささやかれている呼吸いきづかいなのである。兄弟ふたりにして一人にひとしい骨肉感が濃厚に彼の血のうちで何をいおうと恐れはないような勇を想起させていた。

がしかし、一瞬だけの反逆だった。いつまで、ものもいわぬ兄の眼に、直義はつい気を崩した。そして位くらゐ負けみたいな卑屈にすぐ妥協しかかる自分を腹だたく厭いといながらも、「兄者あにじや。……思い出してください。直義は鏝ばん阿寺あじの置文おきふみを今とて夢にも忘れてはおりません。兄者には、いつかあれを、お忘れではないのですか」

と、ことばを直した。自分の激血と兄の反射とをなだめ合うつもりで強しいて低く静かに言つたのだった。

「おたがい、いつか年をとりました。都の風にも吹かれ、一門三十二党それぞれに家運を伸ばし、わけて兄者は、正三位左兵衛さひようえノ督かみに叙じよされ、八座の宰さい相しやう（参議）の御一人にも挙げられ、殿上人てんじやうびとの列にも列せられてみると、置文のお誓いなど、自然お心からうすらいでしまうのは、人情自然かともぞんじますが、しかしそれでは一体なんのために」

「直義、直義……」

「いやもすこしいわせてください。そんな小さい望みのために。そ、そんな小^{しょうせい}成に安んじるくらいなら何も」

「過ぎるぞ、口が」

「いいや、先祖家時公の置文などを御一門に誓わせたり、またこれまで、あらゆる恥に耐え、多くの者を奮い死なせ、その秘事のため、私はいまにいたるも妻を持たず、兄者は妻子はあるも妻子と一つに居ることもないなどの苦勞は何もすることはなかったはずです」

「だまらんかつ、ばか」

ついに、苦しいものは、彼よりは尊氏を耐え難くして来た。尊氏もとうとう公には吐^おか^{おやけ}ない語気で弟を呶鳴った。

「直義。きさまこそ少しどうかしておるぞ。それしきのこと、きさまから聞くまでのことはない。ちと、あたまを冷やせ」

「どちらが」

「なにっ」

「われらの大望はまだ中途でしょうが。だのに、はや公卿なみの優遇ぐらいで骨抜きにさ

れ、勅とあれば理非なくありがたがる兄者なのでは情けない。直義は一同に代り、その晏^あ如^{んじょ}を醒^さまさいでななりません」

「だまれ。青臭い広言をば」

「お叱りは何とうけてもいい。かくなる上はだ。——兄者っ」

「なんだ、その眼^{まな}ざしは」

「僭上ですが、今日、勅使の方へは、尊氏事上洛つかまつらずと、兄者に代って、いや足利三十二党を代表して、直義からお断り申しておきました。勅使は明早々に、帰洛のはずです。もう御断念のほかはございますまい」

「な、なに」

尊氏はせきこんだ。あきれ返った態^{てい}でもある。穴のあくほど直義の顔をみて。

「き、きさまは、この兄をさしおいて、直^{じき}々々、勅使へさような無礼をお答えなどして、わしを窮地へおとす所存なのか」

「なんで。ばかな！」

直義は言い放した。もう腹をすえた眉なのだ。

位置を変えて、弟が逆に兄へ食ツてかかるときの盲目的な顔を見ては、その暴言の底の

ものに、尊氏もはつと怯^{ひる}まずにいらなかった。その常軌のワクにしばらくられている兄へ、弟はなおさら果敢だった。

「そこがあなたの頭がどうかしている所だ。兄^{あにじや}者を待つ窮地とは京都のことではない。そんな危地へわれらの棟^{とうりよう}梁^{りやう}をやつてはならん。断じて、上洛は阻止すべきだと、一族どもは寄り寄り憂^よえているのですぞ。その憂^{うれ}いを負つて、私は勅使にきっぱりとお断りを呈したまでだ。それが何で兄者を陥^{おとし}すことか！」

「ああ、きさまもまだ依然むかしのまな青侍だったか。浅慮^{あさはかもの}者めがッ。これでまず九^き仞^{ゆうじん}の功^{こう}も一簣^{いつぎ}に欠いてしもうたわ。思えば、きさまの如き無謀小才^{こさい}なやつを大望の片腕^{うで}とたのんだなどがすでに尊氏のあやまりだった。返す返すも残念な」

尊氏は一步自分を内省に退いている。ここで弟と争つたら全足利党は真二つに割れる。必死にことばを抑えている風なのだ。が、直義にはそれも弟への押^{おし}揜^ゆに聞えた。

「これやおかしい。すべてを直義の小才や無謀のせいになさるが、兄者はどうだ！ その兄者はもう公卿風の毒に魅^させられて、苦難の大業よりは、いまの栄位に小さく安んじていたいのだろう。大望^{たいぼう}に魁^{さきがけ}て死んだやからこそ不惑^{ふふん}なものだ。幾多の将士の白骨は浮かばれもしまい」

「ちと、おちつけ、直義^{ただよし}」

「この私が」

「よく聞け。そもそも、われらの望みとは、そんな易々^いたる道ではあるまい。第一この国では、逆賊朝敵とよばれたら大事を成すなど全く望めぬ不利となる。またあくまで朝廷は朝廷としてあがめおくのが尊氏の本心でもあるのだ。そこがきさまらには分つておらぬ」「分りません！ てんで分りませぬ！ どうして朝廷をそう恐がるのか」

「ちがう。尊氏の意はちがう。どうなろうと、天皇はやはり至上の上にあがめおきたい。この国の美だ、また要^{かなめ}だ。もしそれをなくしたら、さなきだに俺^{らんま}が俺^{らんま}の天下は、のべつ乱麻^{らんま}乱世のくりかえしだろ。それを恐れる」

「それなればだ、なぜ大望などいだいたのか。初めから矛盾でしょうが」

「いや矛盾でない。頼朝公はそれを成しとげた。いやもつとよい武家統治も不可能ではない」

「ちッ、それで兄者の夢は夢とわかった。幕府を廃し、武家を政治から無力にし、すべてを天皇の下^{もと}に帰^きすというのが後醍醐の一貫した御方針。いや王政としてじっさいにもう布^しかれてゐる。それをその朝廷も崇^{あが}め、また武家統治の再興も見ようなどとは、元々出来な

い相談だ。矛盾も矛盾、いやはや、ばかげきつている！」

「直義。いかにとはいえ、下種げすの喧嘩ではなからうぞ。雑言はやめい！」

「やめます！　　いう気力もありはせぬ。痴人の夢には、もう、がっかりだ」

「そちは大望を矛盾といったが、朝廷を上あがに崇めることと、武家政治をもつこととは、矛盾しない」

「もうお説論せつゆはたくさんだ。頼朝公の時代とは時がちがう。あのころは後醍醐の御代でもなし、朝廷でも、王政一新などを世に布しいてはいなかった」

「だからこそ、尊氏はひたすら機を待つに如しくなしとしていた。自然、御心みこころが、人心の望まぬ王政の非をさとられる日を、気長に待つ腹でおった。しかるに、きさまと来ては、短慮だけの者でしかなく、事々に先ばしッて大望の道を邪よこしまげ、そののみか、この兄を叛逆者の名に追いこみ、大事の達成を、われから進んで打ち壊している」

「はて。いつ私が足利党のめざす希望をさまたげたらう。また、ぶち壊したと仰うつしやるのか。いくら兄者でも聞き捨てならん。これまで戦場の犠牲にえとしてきた多くの白骨に對してもだ。兄者ッ、自分の卑劣を弟の私にかぶせて、それでお氣がすむのか」

「ではいうが。直義。きさまはまだこの兄にさらと打明けぬな」

「何をです」

「大塔ノ宮弑^{しいぎやく}逆^{さか}の不逞をあえて犯したことだ」

「いやお耳には入れてある」

「それは一片の報告にすぎまい。部下の淵辺とかをやつて、このたびのどさくさ紛れに、殺せといいつけたのは、ほかならぬきさまではないか。下手人は汝直義^{なんじ}なのだ。それをば今日まで、あからさまに、そうとは告げず、ただ鎌倉放抛のさい、何者とも知れぬ者の兇行であつたかのごとくぼかしておる」

「おお、ご存知ならいつてしまおう。いかにも私が命じてやらせた。直義こそは下手人と世上から指さされても私はいい！」

「たわけめ。何でさような暴をむざとしたか。非情、無思慮、それで一軍の将といえるか。言語道断、いつかは、きさまを罰しずにはおかぬぞ」

「これは異^いなお叱りだ。私心私怨のように仰つしやる。だが直義^{ただよし}の心は、未来恐るべきあの宮はかかるさいにこそ除いてしまえ。きつと兄者も腹の中ではよろこぶに違いない。そう考えていたしたものを」

「だまれ。かりそめにも至尊^{しそん}の御子^{みこ}。しかも陪臣ずれの無慈悲な刃で殺し奉る法があろう

か」

「では、女奏によそうの讒ざんを用いて、宮を初雪見参の夜に、陥おとしれたのは誰ですか。兄者、あなたの計ではないか」

「……………」

「それだ。そのように、あなたのすること、いうことは、すべて矛盾だらけなのだ。尻尾と頭とが一つでない。道誉ぬえを鶴うわてというが、兄者こそ上手うわてをこす大鶴おおぬえだわ！」

「こやつ、止めぬな、悪口を」

「いうまいとしても、こよいばかりは直義も」

と、直義は眼のうちのものを煮えたぎらせた。ふと幼少の頃そっくりな顔にみえる。せつな、尊氏はいきなりその弟の頬をピシッと烈しく一つ撲はりつけていた。

「いえッ。いくらでも申してみよ」

「打ちましたな、兄者！」

尊氏にもままかつとなる性情がなくはない。

そこもまた、直義からいわせれば、〃矛盾の人〃であるのだろう。けれどそれを外に出したせつなに彼は後悔する。いまもそうであつた。弟を打つには打ツたが、とたんに胸は

凝縮^{ぎようしゆく}の痛みをしていた。そしてもう半分は理性の自己にもどりながらも、

「才打った。まだいうなら、いくらでも打つぞ」

と、怒^{いか}った眼だけはそらさなかった。

「……………」

直義は蒼白な顔に鬢^{びん}の毛を垂れていた。とつさに、あらい感情を吐きそこねて、かえつて、打たれた自分を憐^{あわ}れむようにしゅんと色を沈めている。そして、静かに、曲^まがった烏^え帽子^{ぼし}の緒^おをむすび直すあいだに、薄い自嘲と度胸をすえた太^{ふて}々^{ぶて}しさを、どこやらにたたえていた。

「兄上——」兄者とはいわなかった。「ついまたあまえて、言いたい放題を吐きすぎました。ご折檻^{せつかん}は身にこたえる。お気のすむまで打ってください」

救われたように尊氏もすぐ顔を解^{ほぐ}した。

「いやおれも大人気ないわ。そちと二人だけでいると、とかくわがまま同士になりやすい。そのくせ兄のおれの中には亡父のおもかげや先祖の遺言などが常住無意識に住んでいる。それを直義にまで水臭くされるとこれまた淋しい。そこらが尊氏の矛盾だろうよ。だがどう争ったところで、しよせん二人は兄弟なのだ。かんべんしろ、弟」

こういわれると直義は口ほどもなかった。ほろツと涙をこぼした。

尊氏はそのとき、その眸をじろつと斜め後ろへやった。近侍の細川頼春だろう。主君同士ふたりの争いを心配して、廊のそとにかがまつていたらしいが、すうと退がって行つた気配である。尊氏はすぐ言つた。

「な、直義。とかく口論してみても始まらぬ。大塔ノ宮弑しいぎやく逆の一事も、勅答の一条も、はや、やつてしまつた後のまつりだ。いまさらどうなるものではない。またそちの悪意でもなく、みなこの尊氏を思つてしてくれたことではある。このうえはあとの思案だ。が、その思案には」

と、尊氏は襟もとに顔を埋めて、

「……いささか、わしも途方にくれる。さてどうしたものか」
と、つぶやいた。

「いやその儀なら」と、直義は初めからの覚悟のていで「——すべての悪名は私が着ます。いかなる難関にも身を以てあたる所存ではおります。がただ一つ、兄上の胸底には、いまなお、鏝ばんなじ阿寺おきふみの置文が、お忘れなくあるのかないのか、それだけが」

「気がかりか」

「気がかりです」

「はははは」尊氏は、初めて笑い出して。「見損うな。殿上の衣冠などは、雛人形ひなにんぎょうでも着る。また、すでに白骨となった者、生ける一門の族党やから、ましてそちまでを、裏切つていものか。尊氏はそちたちが観ているよりは、ずんと欲望の深い悪党なのだ。わしが仕尽くす業ごうはこんなことでは終るまい。頼朝公ですら、さしも死しにぎわ際はよくなかった。この尊氏もそれには似るかもしれん。……それでの、そろそろ後生ごしょうを心がけたい。ここでしばらく仏門に入りたいのだ」

「えつ、仏門に？」

本気かと、直義は疑った。

だが、あいまい模糊もこな尊氏の顔はまた笑っていた。

「いや謹慎のためにだよ。近日中にわしはこの將軍邸を捨てて、寺へ移る。身はそのまな俗尊氏だかの」

「どうして急にさような思い立ちを」

「なんといたせ、大塔ノ宮を殺めあやまいらせたことは申しわけない。下手人淵辺ふちべには科とがもない。当然そちの犯した逆罪だが、この尊氏も同罪たるはまぬがれ難い。かたがた、上洛も

拒否し、違勅をかさねたうえは、寺へでも籠こもつて心からな詫びを、朝廷及び世上へ、かたちで示すしかみちはなからう」

「では、しばし仮の？」

「そうではない。また兄の矛盾よと笑うだろうが、本心、宮の御菩提ごぼだいも弔とむらう気だ。むごたらしいご最期をお遂げさせた。尊氏の強敵たるには違いないが、もはや無力なお人なりしを、さまでにはせんでもよかった。いや、直義、またそちを責めるわけではないぞ。いわば後生ごしやうの怖れか。ふと夢枕に宮のすさまじい顔を見た夜もあった。ともあれ、わしは寺へ移る」

「あとは」

「そちがやれ」

「軍も諸政も」

「一切ここはそちに委す」

「かまいませんぬか」

「ただしわしが今夜言つてきかせたことだけは以後踏みはずすな。八幡はちまん、尊氏がこよいの言に偽りは持たぬ。何事もその辺を考えてやってくれい」

「ですが、朝廷の御目標と、わが足利家の大望とは、まったく相容れぬ逆です。出来るでしょうか、その両立が」

「できる」

「むずかしい」

「もとよりやさしくはない。百難もあろう」

「ですが、朝敵となるのをひたすら怖れてばかりいた日には、大事を成すなど思いもやらぬ難事ではありませんか。いくら委すと仰せ下されても」

「時運はたえまなく動いているのだ。そうこだわるな。眼前の事態にのみ固着した頭脳あたたまでは手も足も出せはせぬ。——やがて勅使も帰洛のうえには、何かの変も生じて来よう。打つ手も自然出てくるものだ。尊氏もここしばらくは静観しよう」

やがて、両三日後に、はやこのことは実現された。

尊氏は、細川頼春、一色右馬介らの近習小姓わずか七、八名を身につけただけで、突然、
蟄居ちつきよする

の旨を内外に触れ、浄光明寺じようこうみょうじのうち深くに籠こもつてしまったのだった。

いきさつは直義とおもなる者しか知るところでない。一門の族党は大きな驚愕に打たれ

た。しごく単純な武者ばらでもある。彼らは主君の謹慎のすがたをそのまま信じた。理由なく傷んだり何かへ憤慨したりした。そして一時的ではあるが、鎌倉は冴えない景色のうちにあつた。

勅使、中院ノ具光^{ともみつ}は、すでに帰洛の途にあつたが、これらのことも海道では早耳に入っていたにちがいない。

彼の見た「東景色」はそのまま朝廷へ復命された。——尊氏勅ヲ奉ゼズ——は、なかば予期されていたものの、いよいよ事実化されると、あらためて衝動は大きかった。朝敵尊氏ということばは、宮中公然な声になった。

義貞・駁^{はく}す

連日の公卿僉議^{くげせんぎ}である。そのふんい気といい宮廷内の緊張は、かつてのどんな時局にも例をみないほどだった。

「もはや僉議の要はない！」

この声は最もつよい。また多い。

彼ら若公卿はいう。

「尊氏の反逆は、すでに歴然といえる。それなのに再度の勅を奉じさせて、法勝寺の慧鎮^{えちん}上人をさし下^{くだ}してみたらなどという儀は、あまりにも手ぬるすぎて、彼を増長せしめるばかりか、賊に軍備をかためさせる余日^{よじつ}を与えるだけでしかない」

「かつは御威光にかかわろう。朝廷に人なく軍威なきにも似る」

「それはすぐ在京武者に弱味をおもわせ、いたずらに去^{きよしゆう}就^{しゆう}を迷わせる悪結果をよぶ」

「すでに、足利の叛旗とみるや、諸家の武門を脱走して、ぞくぞく、鎌倉さして行く兵も少なくないとか」

「いや、それは憂えるほどなことでもない。事態の急に、京から鎌倉へと、身の処置をきめて行くのもある代りに、また都に祇候^{しこう}の主筋や縁故^{えんこ}を持つ輩^{やから}は、これまたぞくぞく、東国から京へと急ぎ、海道はそのため、西ゆく者、東する者、櫛^{くし}の齒を挽^ひくが如しじやと、いわれておる」

「いずれにせよ、もはや右顧左眄^{うこさへん}しているときではない。朝敵尊氏を討つに、なんのおためらいなのか」

「新田義貞に、逆賊討伐の朝命をさすけ、あるかぎりな王軍を催して、いまのうちに、禍^か

根を断ちおかねば、百年の後、悔いてもおよばぬ」

「それこそは、さきの大塔ノ宮護良親王の御遺志でもあった。いまにして宮の御先見がおもいあたる」

僉議の席では、しばしば宮の御名が人々の口に出た。

しかし、宮の御受難とは、ひろく知られていても、その死期のありさまなどは、まだとんと確かなことはわかっていない。——もつともひそかには、先代軍か足利勢の兇刃のもとに？ という臆測もおこなわれていなくはなかったが、見た者はなし、確証もないことだった。——ただいえることは「これも尊氏が女奏の讒に始まったことだ」という恨みだけなのである。

この恨みは当然、大塔ノ宮遺臣のあいだに強かった。かねがね屈強な侍や多くの兵を内に蓄えていた宮家でもある。——この者どもは扶持にも離れかけたが、しかし浮浪にまではならず、そのほとんどが新田義貞の麾下にかかえられた。近ごろとみに義貞の二条烏丸屋敷の周辺が喧騒にみち、尊氏罵倒の気概りんりんたるものがあるのも、ひとつはこれによるといってよい。

異様な充血はしかしここだけの現象ではなかった。

千種忠顕ただあきの邸なども近來は、半公卿半武將ともいえる陣装を構えており、つねに義貞をはじめ、目ぼしい武門との連絡を、緊密にもつていた。——無二の味方とばかりおもつていた佐々木道誉が、尊氏へ奔はしつてしまつたなどのことが——彼をしてこのさいの警戒心をいちばい強めさせていたにはちがいない。

その忠顕は、外では義貞とむすび、公卿僉議せんぎでは、たれよりつよい主戦論をとつていた。そして後醍醐へもしばしば直奏じきそうの下に迫るなどの熱中のしかたであつた。

この日ごろのお悩みは龍顔りゆうがんのうえにもうすぐろい隈くまとなつて、さしもお身の細りすらうかがわれる後醍醐だつた。

いつの公卿僉議にも、

「……まずは」

とのみで入御にゆうぎよ。また、

「考えておく」

とばかりで御裁可はない。

いわんや、千種忠顕が直々じきじきの奏上などに、ご意志を左右されるはずもなく、

「ま、さは逸^{はや}るな。息^{いき}りたつな。坊門ノ清忠ら一部の意見にも耳をかせ」

と、抑えてしまう。

要するに、僉議^{せんぎ}の決まらぬ原因は、ほかならぬ帝のお心にあつたのだ。——そして暗に清忠の説を支持しておられるやのふしがあるのも、あるいは帝のおむねを彼にいわせているものなのかもしれない。かつた。

その左大臣坊門ノ宰相清忠ひとりとは、ほかの激越な即戦主義者とは大いにちがつて、

「尊氏にも功はある」

と、言い、

「その功もたちまち措^おいて、ただ罪のみをあらだてるのは如何^{いか}かとおもう。——たとえば元弘^{げんこう}の六波羅探題攻めのさい、彼の反^{かえ}り忠^{ちゆう}がなかったら、あのせつ天皇御帰還は仰げぬことであつたかもしれぬ。——また高時の滅亡をはやめたのも、ひとえに義貞の善戦によるとはいえ、もし足利千寿王が一軍の参陣なくんば、これまたどうであつたろうか。——そのほか戦後の混乱時に、よく闕下^{けつか}の治安を維持したなども、尊氏の功は少なしとせぬ。……さればこそ。おん諱名^{いみな}の『尊^{たか}』の一字をさえ賜うたほどなご嘉賞ではなかったか。さるを……手のひら返すごとく、逆賊とよび、王軍をくだして討たんなどは、それこそ朝

廷の不見識、朝令暮改のたのみなさを、われから世へあかす愚でなくてなんであろう。よろしくここは人心をなだめ、いくたびなりと尊氏の存意をただして、事を政治による解決へ見いだしてゆく工夫こそ、われら朝臣の務めと申すべきではなからうか」というのであった。

これが衆論にうけつけられなかったのは、前述のとおりである。けれど後醍醐の顧慮のうちには、ほぼこれと同じなものが、たゆたっていた。

元来、この君としては、尊氏なる人間を、根からお嫌いではないのである。いや人間的には彼の一種魅力めいたものに引かれてさえおいでになる。君臣とかきさえなければ一壺酒を中において膝ぐみで議論してみたい男ですらあるくらいな思召しなのだ。かつは彼には実力がある。その実力にも御意はつねに、あの薄らあばたの一壮者を、御無視できない。

断

のお迷いはかくてつづくばかりだった。このさいにおける英断には、玄以に学んだ儒学も、大燈、夢窓の両禅師からうけた禅の丹心も、その活機を見つけるところもない幾十日の昼の御座、夜ノ御殿のおん悩みらしかった。——そして来るべきものはひたひた

と月日がついに帝をも浸^{ひた}してきた。突如、即戦派には有力な材料が、諸国から帝のおん目の前につきつけられた。

それは何かといえど。鎌倉から発した檄^{げき}——すなわち足利家による——諸国への軍勢催促状なのだった。

「かかる物が国元へまいりました由。朝^{ちよう}へ二心なきおちかいに、内覧に入れたてまつりまする」

と、在京武門の国々から届け出てきたその数は、何十通にもおよんでいた。

尊氏の逆心を証拠だてるにはこれ究^{くつきよう}竟なものである。ひと束^{たば}にして僉議^{せんぎ}の席へもちだされた。

帝も御覧あるに。

新田右衛門佐義貞^{ウエモンノスケ}

誅^{チュウバツ}伐セズンバ有ル可カラズ

一族相催シ

急ギ馳^{ハサン}セ参ジラレヨ

と、すべて同文で、また、はなはだ簡である。そして日付けもみな一様に、

十一月二日

の発になっている。

だが、署名は尊氏ではなく、左馬頭さまのかみとあり、すなわち弟直義ただよしの花押かきはんだった。

内覧ののち、僉議の公卿一統へ廻覧された。色めきたつ小声小声の下にすべての者がやがて見終る。

「みられたか」

洞院とういんノ実世さねよが言つた。

千種忠顕、二条為冬など、声をそろえて。

「この檄げきに見るも、王軍のお手まわしはもうおそいほどだ。名を、義貞誅伐にかり、賊はすでに、全国から起たたんとしておる」

「檄げきの名分を、君側クニソクノ奸ヲカン除クノゾク、というところへ持つてゆくのは、いつのばあいでも、むほん人が世のていをつくろう口実ときまつている。はや一日とて、猶予あるべきではない」

「しかも、尊氏の狡さずるよ」

という者もあった。

「櫓の上に、わが名はあらわさず、弟直義の名を唱う^{うた}なども、這奴^{しゃつ}の隠れ蓑^{みの}！ 見すかさるわ」

このとき、坊門ノ清忠はなお、いつもの騒がない語調で、

「いやいや悪^あしゅうとれば物事はいかようにも悪しゅうとれる。つたえ聞くに、尊氏は先の月、違勅^{おそ}の畏れをいつて諸政を弟の直義に託し、身は謹慎^{ひよう}を表^{ひょう}するため、浄光明寺に入つたままふかくつつしんでいると申す。——そして以後は、元弘^{げんこう}における戦死者の霊をなぐさめんがため、高時の旧館のあとに、円頓^{えんとん}宝戒寺^{ほうかいじ}の建^{こん}立^{りゆう}をするなど、ひたすら恭順の意を表しているとあるが」

「それよ、そこが尊氏の食えぬところとお気がつかぬか。——つたえ聞くとところなら、這^し奴^{やつ}は一族の斯波^{しば}家長なるものを、私に、奥州管領となし、ひそかに奥州へ下向せしめたと聞いておる。——これなども、事をあぐる日、奥州東北の地を、同時にわが麾下^{きか}に取り込まんとする謀意でなくてなんであろうぞ」

清忠は一言もなかった。

そのうえにも、また、ちょうどこのころ。大塔ノ宮の侍女^{かしずき}南ノ御方が、宮のおかたみなどをたずさえて、病後のやつれもまだ癒^いえぬ身でやつと都へたどりついてきた。——果

然、これによつて、宮の死は、足利家の一武士の兇刃によつてなされたことが明白になつた。――後醍醐もこれのみは、よもやとしておられただけに、南ノ方からつぶさな当夜の惨状をおききとりあるや、さすが御父子である。逆鱗げきりんすさまじい御みけしきだた。朝敵、それ以上にも増す尊氏兄弟へのお憎しみが、どつとお胸むねの堰せきを切つた。

朝廷が尊氏討伐を決定してこれを公卿せんぎ會議せんに宣したのは、十一月に入つてからのことはちがいないが、その幾日頃であつたろうか。

「公卿補任」をみるに、

在、陸奥ザイノ府

陸奥守北畠アキイヘ顯家

十一月十二日

鎮守府將軍トナ為ル

とあるに徴ちようしても、この日すでに東征の用意があつたのはあきらかだ。

これはいうまでもなく東海東山両道から兵をすすめるのみでなく、北の奥羽からも官軍を攻めのぼらせて鎌倉きやうげきを挟撃させようとの兵略にほかならなかつた。しかし鎮守府將

軍の官位はさきに尊氏へさずけられていたのだから、いまそれを褫奪ちだつして、顕家へ与えられたことにもなる。

ところが、「神皇正統記」にもみえる通り、ここに、

十一月十日あまりにや

謀叛のよし聞えける尊氏

かへつて

義貞追討の請こひを

闕下けつかに奏し奉る

と、ある一ト波瀾が起き、これが問題の、尊氏が細川和氏を使者として、朝廷へさし出した「義貞彈劾だんがいしやう状」であつたのだろう。さらに「元弘日記裏書」によれば、

尊氏ノ奏状到来タウライ

十一月十八日

との明記もあり。——いずれにせよ、すでに官軍発向の準備や任命などに、朝廷の内外ともに沸くばかりな空気のところへ、この奏状がとどいたことはたしかであつた。

ところで、その上書なる物だが。そのなかで尊氏はこう訴えているのである。

義貞と自分との、年来にわたる確執^{かくしつ}を述べ、つまるところ、このようなはめになったのも、ひとえに佞臣^{ねいしん}の讒口^{ざんこう}によるもので、その張本は義貞であるとし、

「――願わくば、乱将義貞誅伐^{ちゆうばつ}の勅許^{ちくきょ}をたまわりたい。つくすべき忠も、荼毒^{とどく}の輩^{わい}が君の側^{かたわ}らにはびこつていたのでは捧げようもない。君側の奸^{かん}を一掃^{いさう}してのうえでなら、微臣^{わいちん}たりとも海内^{かい内}静謐^{せいひつ}のためどんな御奉公^{ぎほうこう}も決してという者ではない。どうかご推量^{きようりやう}を仰ぎたい。恐惶^{きようかう}謹言^{きんげん}」

と、結んでいるのだ。

内覧のあと。

上卿^{しやうせい}のおもなる者もこれを見た日のことである。千種忠顕^{せんしゆちゆけん}は参内の帰途、新田義貞^{しんたけいせい}の烏丸^{からすま}屋敷^{やしき}をたずねていた。そして云々^{しかじか}と、わけを語り、弾劾^{だんかく}文^{ぶん}の写しを彼にみせたのだ。つた。

「……………」

義貞は読んでゆくなかばのうちに、もうありありと感情に燃やされた色で耳のあたりまで紅^{あか}くしていた。

「心外な」

と、一ト言いつて。

「……千種どの。これに黙つていては、佞臣ねいしん乱賊の汚名を義貞が自認しているものになる。義貞も一文を駁ばくして内覧に供えたい。そのような前例はどうであらうか」

「なんの、前例の顧慮などいるものか。すでに御辺は、王軍の大将として、ご内定もみておるのだ。——尊氏の奏状など、その一行の文も、おとりあげにはなっておらんが、それにせよ、ご潔白を立てる要はある」

その夜、義貞は灯をかきたてて、痛烈な反駁の一文を草そうし、あくる日ただちに上覧にいられた。

義貞の上奏文は、じつに激越な文辞であつた。自分に対する尊氏の弾劾状を、完膚かんぷなきまでにたたいて「尊氏兄弟こそは、大逆無道な人非人である」ときめつけ、箇条書きに、尊氏の「八逆の罪」なるものをそれにあげている。

一つ 臣義貞が上野こうずけの旗上ゲは五月八日であり、尊氏が官方へ返り忠して六波羅攻めに出したのは同月七日だった。相距ること八百余里。何で一日のまに連絡がとれよう。それを尊氏は、あたかも自分の令で新田を起たせたかのように誣奏ふそうしている。これ罪の一つ。

一つ 尊氏みずからはじつさいには元弘の鎌倉攻略に参加しておらず、幼弱な千寿王に少数の兵をつけて、新田の陣借じんかりをしていただけのものにすぎない。しかるにそれも足利の功として誇っている。これ世上を欺瞞ぎまんし上を偽る。罪の二。

一つ 尊氏の六波羅にあるや、みだりにみずから奉行を称え、上のみゆるしもなき御教書ぎようしよを発し、親王の卒そつをとらえて、これを斬刑ざんけいするなど、身、司直にもあらざるに法を執とり行う。これ罪の三。

一つ 東国にあつては、ひそかに禁府を開き、公の物をもって、私の恩を売り、征夷大將軍の位名いみようを偽称す。その罪の四。

一つ 軍功の施与せよは朝廷直々じきじきの令に待つべきを、北条時行を追つて府に入るや、僭上にも身勝手に諸所公領の地を割さいて、これを餓狼がろうの将士に分つ。罪の五たり。

一つ さきには讒構ざんこうをもうけて、巧みに、兵部卿ノ親王ひようぶきよう（大塔ノ宮）を流離りゅうりに陥す。その罪の六。

一つ 親王の御罰ぎよばつは、ひとえに宮の驕りおごをこらす聖衷せいちゆうに存するを、私怨しえんをふくんで、これを囹圄れいごに幽ゆうす。罪の七。

一つ 混乱じように乗じて、部下の兇兵しそうを使喚し、宮に害刃を加えたてまつる。天人ともに

憎むところ。その罪の八。

以上のあとに、

伏して請ふ

乾臨明照のもと

尊氏直義以下

逆党の誅命あらん事を

畏みて 奏し仰ぐ

義貞 誠惶誠恐謹言

とした長文だった。

尊氏の言いぶん。

義貞の言いぶん。

いずれが是か非などは、もはや問題の時期ではない。またたれがみても、尊氏のそれは、義貞との確執を口実に、鉾をかえて挑発している詭弁のものようだし、義貞がかぞえあげた尊氏の八逆のほうか、はるかにその論拠にも力があつた。しいて歪曲している点もなくはないが、不倶戴天の仇敵をやっつけた筆誅の余勢である。多少の誇張はしかた

があるまい。

しかも、彼の昨今は、

「待ちに待ったる日が来た！」

と心を奮ツている風だった。得意さだった。

その義貞への朝命は、十八日に降り、十九日には、はや京中出陣ぶれの勢揃いがおこなわれていた。——早朝に、彼は曠れの大よろいを着かぎって、いそいそと参内に向った。朝敵征伐の節度（出征の祝い）を賜わるためにである。義貞はかがやく栄光の中に自分を見ていた。

朝敵追討大將軍の首途

それには当然、朝廷でもなみならぬ期待のもとに、ずいぶん、古式に則つてその鼓舞をさかんならしめたものらしい。

王軍をうごかす。

それじたいが、朝廷の浮沈もここに賭けたことになる。やぶれば朝廷たりとも、争覇の敵の驕りに屈する覚悟のもとでなければならぬ。

その大任を負つて、新田右衛門佐義貞はいま、身のしまるおもいで、南殿の下にぬか

ずいた。——すこしさがって、弟の脇屋義助、式部義治よしはる、堀口美濃などの身内が、これまた、ひとかたまりに平伏している。

御庭みにわの階下には、内弁、外弁げべん、八座、八省の公卿百官がしゅくと整列しており、その視線はすべて、義貞ひとつに自然そそがれたままだった。——日ごろにも見てはいるが——わけて今日はその人物にたのみをかけて、

この人に榮はえあれ

と祈りをこめた衆目だった。

義貞はそれを感じる。武門最上な本懐とを感じる。彼はすでにかつての旗上げの日、郷土うぶすながみの産土神うぶすながみに願文がんもんをささげて、

——古ヨリ源平両家、朝二仕イニシヘヘテ、平氏世ヲ乱ストキハ、源氏コレヲ鎮メ、源氏世ヲ侵ス日ハ、平家コレヲ治ムヲカ
ヲサ

と、告白していた。彼にもこの下心はあつたのだ。いまや平氏の北条はない。足利が取って代ろうとしている。しかし自分も源氏の嫡流だ。有資格者である。八逆の賊尊氏を逐って、自分が覇武の権を取って代るに、世上の誰もふしぎとはしまい。

しかも優渥ゆうあくなるみことのりと大將軍の印綬いんじゅを賜わってそれに向うのだ。義貞はすで

に尊氏を呑んでいた。やがて下された祝酒の一ト口にさえ、それは色になって彼のおもてをほの紅くした。

朝廷では、万一このたびの東征にやぶれでもしたら、建武新政の緒しよも根本からくつがえるものと、さまざま古例の吉凶なども案じて、治承四年、頼朝追ついばつ罰のさいに、三位これ惟盛りをつかわされたさいの仕しきたりは不吉であつた、よろしくこんどは天てん慶承平の例に倣ならうべきであるというところから、特に、義貞へは節刀せつとうを賜わり、やがて、三たびの万歳の唱えとなのうちに、華々はなばなと、彼のすがたは大内を退出してきた。

そして衛府の門を出ると、なに思つたか、

「高倉へ」

と、軍兵をうながして、彼の馬はどうとうと先をきつて二条高倉ノ辻へ馳はせむかつていた。そこで馬を止め、

「やよ船田ノ入道、朝敵退治の都立ちには古例がある。知っているか。古式いたせ」と、一つの門を指さして、命令した。

そこは今は人もなき、旧足利直義ただよしの空館あきやかたなのである。——船田ノ入道は、その前に兵をそろえて、三たび関ときの声をあげさせ、また、三すじの鐙かぶらや矢を邸内へ射込んだのち、

中門の柱を切つておとした。

するとこの関とぎの声にあわせて、三条河原の空でも、わああつと、武者の諸声もろこえがわきあがつていた。

上將軍の陣であつた。

大將軍義貞のほかに、後醍醐の一ノ宮、中務尊良親王なかつかさたかながが、上將に任せられ、この日ともに都を立つこととはなつていた。

まもなく、義貞の軍は、尊良親王たかながの騎馬一群をまん中に迎え入れて、その長蛇ちようだのながれは、順次、三条口からえんえんと東していた。

このさい、親王の中書軍ちゆうしよぐんがささげていた日月の錦の旗が、とつぜん突風に狂い、竿頭かんとうから地に落ちたので、人々みな、

「あな忌いまわし」

と、不吉感に吹かれたなどと古典太平記にはあるが、作為であらう。ほんととは思われない。

また兵力なども、

その数六万七千余騎

前陣すでに

尾張の熱田に着きけるに

後陣はまだ大津相坂あふさかの関

四ノ宮河原にささへたり

などであるのも大ゲサに過ぎたものだ。もちろん、物見、伝駈などの小隊は、先へ先へと、先行してはいたろうが、それにしてももの感がある。

じっさいの兵数は、中書軍をあわせても、二万がらみではなかったか。

親王の軍を、中書軍とよんだのは、親王が「中なかつ務かぎ卿きやう」であつたからで、ナカツカ

サの御子を唐名では「中書王」という。それからの敬称である。

しかし軍の中堅は、ほとんどが宗徒むねとの新田一族で——脇屋義助、義治よしはるをはじめ、堀口、

綿打、里見、烏山、細屋、大井田、大島、籠守沢こもりざわ、額田ぬかだ、世良田、羽川、一の井などの

諸将いずれも越後から坂東上野ばんとうこうずけの出生者だつた。

これになお、他家の大小名がある。勅にこたえて、一議なく官軍側に拠よつた在京中の諸国の武門で、それには、

千葉ノ介貞胤さだたね

宇都宮公綱 きんつな

菊池肥後守武重

大友左近将監

塩冶の判官高貞 えんや

熱田ノ大宮司、薩摩守義遠などの百数十家、所領の分布からみても全国にわたっていた。まさに王師おうしとよぶにふさわしい。

なおこのほかに。

同日から三日おくれの都立ちで、尾張黒田から東山道をとって下くだつて行つた別手の擲からめ手軍もあつた。

その大將には大智院ノ宮、彈正ノ尹いんのみや宮、洞院どういんノ実世、二条ノ中将為冬など、公卿色がつよく、侍大將では、島津、江田、筑前ぜんじの前司ら、二十余家の旗がみえる。兵力はざつと五、六千騎で、行く行く信濃の反軍を揉みつぶし、甲州を掃はいて、鎌倉武蔵口へせまる作戦。

時をあわせ、奥州からは北畠顕家が一路南下の予定である。——この両翼を心にえがきながら、義貞は東海の征途にあつた。——濃尾のあいだでは一矢も錦旗に抗むかつてくるもの

はなく、十一月の寒烈はかぶとの眉^まびさしに霰^{あられ}を打ち、弓手も凍るばかりだったが、彼の頬にはたえず自負の信念か微笑かがあつた。

「尊氏は以前から戦にかけてはから下手よ。また直義は、たんなる血氣の逸^{はや}り者」——と。このあいだにも、都の使いは、たびたび、義貞を上げましに下つていた。——朝廷では諸大寺の座主^{ざす}から天皇ご自身までも、連日にわたつて戦勝祈願の大威徳法の修法をこらし、また再度の綸旨^{りんじ}を諸国に発して、逆賊尊氏の必滅^{ひつめつ}を天地にちかつておられるとのこと。まさに天下分け目の様相だった。

網^{あみ}引^ひき地蔵^{じぞう}

鎌倉^{いづみやつ}泉ヶ谷^{じょうこうみやうじ}の浄光明寺^{きえん}は、ほんの一堂に庫裡^{くらり}があるだけの、草寺^{くさでら}だった。

むかし北条長時^{からす}が何かの忌縁^{きえん}に建てたものだという。いかにも侘^わびた禅室ですぐ裏の泉谷山^{いづみやま}には朝夕鴉^{からす}ばかり啼^ないていた。それに時は十一月。枯木寒鴉^{こぼくかんあず}図^ずそのままな冬木立の中
でもあつた。

「もどりまいてござりまする」

馬は山門の外に。

駒のあるじは今、旅ぼこりの身もそのまま、すぐ、ここにさきごろから引き籠こもっていた尊氏のまえにあつて、平伏していた。

「和かずうじ氏か」

待ちかねたぞというばかりな顔である。が、大いに労をねぎらつて。

「早かつたな和氏。——海道の往復を、こんな日数でもどるには、さだめし道中夜もかけて歸つて来たか。大儀大儀。して、上奏文の響きはなんとあつたぞ」

「すでに朝議一決のあとにござりましたが」

「うむ」

「上書は、洞院ノ実世卿さねよきようからただちに叡覧に入れ、僉議せんぎの席でもご披露あつたやにうけたまわります。が、ついにお返し沙汰は何もございませぬ」

「それでいい。だが、義貞の反応についてはどうだ。聞きおよぶところはなかったか」

「いや、それは大いにございました」

「大いにあつたと？ ふ、ふ」

予期していたものの手ごたえに、思わず彼の相好そうこうが笑み破やれた。

使者の細川和氏も、これを土産として帰るには、よほどの苦心を要したらしく、やおらかわつと革苞を解いて、

「まず、ご一読を」

と、尊氏の前においた。

それは彼が和氏を使いとしてわざと朝廷へ提出した「義貞だんがいじょう弾劾状」にたいして、当の義貞が、ただちに「尊氏こそ八逆の賊である」と反駁上奏したと聞く全文の写しなのだ。つた。

和氏は殿上の誰かにそつと手を廻して、その写しを入手してもどつて来たものにちがいない。……尊氏は手にとるや、眼をそばめてその全文を黙読していた。

一つ、何

一つ、何

と箇条書きにしてある自分への痛烈な八罪なるものに目を通していながら、尊氏の面にはかしなんの波紋も起つて来ず、むしろ容認しているふうですらあった。いやもつと何か目的を別にした「——思うつぽ」とこれを読んで、ほぼ満足のうちに巻き収めていたといえないことでもなかった。

「和氏。老軀ろうくに鞭打むちうたせて、ご苦勞だったが、使いの功は上々であつたぞ。これでまず、義貞もじつとはしておられまい」

「されば即日、朝廷からは義貞へ、尊氏追討の総大将を任せられ、中書ちゅうしよの宮尊良たかながを上に、約三万騎、東海東山の両道から、ぞくぞく東へ下りつつありまする」

和氏はべつな覚書をふところから取り出して、その密牒みつちようなども、尊氏の前にならべかけた。しかし、尊氏は手にもとらずこういった。

「待て待て。わしは世に告げてあるとおり籠居ろうきよの身だ。軍事は聞いても、せんかたない。諸政一切も直義ただよしにまかせてあること、戦のことなら直義の許へ報告せい。この尊氏はあずかり知らん」

晩の勤行こんぎよう、朝のおつとめ。ここでの禅院生活を、尊氏は出家の身とも変りのない規律と日課の中においていた。

大塔ノ宮の霊

元弘げんこうの戦歿者敵味方の霊

高時の霊

いくたの有縁無縁の霊うえん

に心からな回向えこうをささげている姿にみえる。また心から朝廷へも恭順きようじゆんの意ひようを表している彼かに見える。

もちろん、酒も魚肉も断ち、法衣ころもこそつけていないが、道服すがたで、昼は机によつて読書さんまい三昧、閑居まだ日は浅いが、倦む色もみえないのだった。

したがって、近習の細川頼春と一色右馬介も、庫裡くりの裏で、ぜひなく薪割りや水汲みまでをやっていた。彼だけが日々ただ武者張つて無為むゐにもいられないのであろう。——今も、裏山から担かつぎ出して来た粗朶そだのタバに腰をおろしていた二人はいささか味気ない顔の疲れを見あわせていた。

「右馬どの」

「む？」

「貴公には分つておるだろ」

「何が」

「大殿の御本心だ。本心、このまま世捨て人となるおつもりだろうか」

「さあ、どうかな」

「幼少からのお傳役^{もりやく}。その右馬どのなら」

「いや、ご舎弟（直義）さまでさえ分らぬ兄といっておられる。どうして拙者などにわかるものか。……だが、ああしていらいしやる今日は今日だけの御本心だとはいえるだろう」

「では、あしたは」

「あしたのことは、おそらく御自身でも……。いやもつと遠い先は観ておられるに相違ないが」

「つかみどころのないことを」

「そう、つかみどころがない——それがあのお方そのものだ。まだ又太郎さまだった十代のお若い頃からだ。……しかしそれは、ぼんやりしているのとは違う。何か、人とは異^{こと}なる時点と観点に立つておられるせいであろう。だから、人には矛盾とみえることも平気でなされる風もあるのだ。またそんな一面が年ごとおつよくなってきた風でもあるな」

「……………」

頼春は、目くばせした。寺の庫裡^{くり}にもよく里^{さと}の販^{ひき}ぎ女^めたちが物売りに廻^{まわ}つて来る。いまもふと山着姿の小娘が、方丈の庭口をとりちがえて、戻^{かえ}つて来たらしく、うろうろしていたが、ここの二人へ気づくと急に、

「山の芋いも買うておくんなされ。お侍さん、山の芋はいらんかね」

と、馴れ馴れしく、そばへ来て、強しいるのだった。要いらぬというと、

「では、麦の粉はどうですえ。菓子にしたらええがの」

「いらんと申すに」

「お茶は」

「茶もある」

「でも、ことし摘つんだよいお茶なのに、見ても貰もらわんでは」

「解とくな。荷を解いても、買かいはせぬぞ」

追おい払はつていたときである。ちょうど庫裡くらの縁を通りかけた尊氏そんじがこれを見て。

「頼春。買かつてやれ、何ぞ」

「お。これはいつのまに」

「愛くるしい娘だ。その芋の苞つと、持つているだけ求めてやるがよい」と、言いつた。

「運うのよいやつだ。殿さまへようお礼を申せ」

頼春は、値あたをきいて、販ひぎ女めの手に銭ぜにをわたし、早そう々に追おい立たてたが、女はぬかずい

たまま、縁の上の尊氏の姿へ、

「ありがとうございます」

なんども、それをくり返し、またお願いいたしますと、やっと立って去りかけた。

その背へ、浴びせるように、

「これこれ。これに狎なれて、またうるさく来てはならんぞ」

右馬介が言った。けれど女は返辞もしなかった。そのくせ遠くから縁の尊氏の姿を二度も振り向いて行った。

尊氏はあとで二人へ訊ねた。

「あのむすめは、よくここへ見えるのか」

「いえ、里の物売りは、よくまいりますが、いまのような小娘は」

「初めてか」

「は。きょう初めて見たようにおもいます」

「気をつけたがよい」

「それはまたどういうわけで」

「ただの山家女や浦うらびと人のむすめとは思えぬ。何かいわくのある者だろう……」と、そのまま縁を下りて、あり合う草履ぞうりに足をつツかけながら。

「右馬介」

「はっ」

「この裏山の洞に、地蔵が祀まつつてあるといったな。ゆうべの炉辺で、そんな話を二人でしておったが」

「は。いやしかし、つまらぬ地蔵でございしますので」

「何でもよい。地蔵は母の信仰でもあり、わしの守護仏ともいわれておる。行ってみよう」
尊氏はもう歩いていた。

鎌倉の海もこの山も、冬を忘れたような小春日だった。右馬介たちが柴採りに来てふと見つけたという横穴を覗いてみると、二尺ばかりな石の地蔵が、ちよこんと石の台座に乘せてあつた。

「これか」

「はい」

「地蔵だろうか？」

「弥陀みだとも見えませぬ」

「やはり地蔵尊かの。しかしお顔も衣紋えもんも、ひどく磨滅して貝殻なども附着しておる。察

するに、地蔵は地蔵でも、海上がりの御仏みほとけだろ」

「お目がねの通りです」と、頼春が答え——「これはいつの頃か、近くの漁師が海から拾い上げた物のよしで、里人さとびとのあいだでは、網引き地蔵と呼んでおるやに聞きました」

「ほ。網引き地蔵と」

尊氏は急にその前へうずくまった。そしてつらつら地蔵を見て、また、うやうやしく掌てを合せた。そのあとで笑いながら二人の近習へ言つたのだつた。

「どうだ、地蔵の顔は、この尊氏と、どこかよう似ているであろうが」

「お戯れを」

「いや戯れではない。網引き地蔵とは、おん名からして気に入つた。粗略にするな」

このときは、ただこれだけで帰つて来たので、二人には、尊氏は何でそのような冗談をいつたのか、またひどく機嫌のいい一瞬いつときを顔に見せたのか、主君の心は酌くめなかつた。が、その意味がわかつてきたのは数日の後だつた。いやその晩、下御所しもごしよの直義ただよしがこの禅院を訪ねて来た時からだといつてもよい。

「こよいは、お別れにまいりました」

直義は、冷静だつた。

尊氏もそうと察していたらしく、かくべつ、怪しみもしなかった。

「出陣は明朝かの」

「は。すでに高ノ師泰こうもろやす以下三千騎ほどを、とりあえず一陣として先に急がせ、吉良、細

川、佐々木道誉ささきみちゆらも、つづいて戦場へむかわせました」

「そうか」

「敵は、東海東山の両道を数万の大軍で急下してまいるよし。このたびこそは、天下分け目の一戦と期しているもののようにござりまする」

「むむ」

「おそろくはなかなかの苦戦。直義も生きてふたたびお目にかかれるや否やわかりませぬ」

「ぜひもない儀だ」

「一族の諸将は、このさい、まげても、大御所（尊氏）の御出馬を仰がずにはと、軍議紛ふん々ではございましたなれど」

「……………」

「否々いないな、一たん寺門に入つて、世へ屏居へいきよと触れたからには、たとえ剃髪ていはつはなさらぬまでも、めつたにお心をひるがえす兄上ではない……と一族どもを押しなだめて、一切は

この直義が独断にて指揮いたしまいでござりまする。その僭上は、おゆるしのほどを」

「なんの、軍事も諸政もすべてを捨てた恭順きようじゆんの身。あとは、あとの者の一存に委すしかない。……だが」

と、間まをおいて。

「直義」

「は」

「このたびの戦の相手は一体誰だ？」

「異いなおたずね。おたずねまでもございますまいに」

「いや心得ておかねばならん。敵は新田義貞であることを。皇室ではない、義貞であるのだ」

「が。その義貞は、朝命をこうむつて、朝敵討伐の節せつ刀を拝した者にすぎませぬ」

「かたちは、さもあれ、名分めいぶんの上においてはだ。あくまで、わが足利家は新田を誅ちゆうば

伐つするものと世上となへ唱えろ。——和氏かずうじからも、その義貞弾劾の件は、聞いたであろうが」

「はい」

「尊氏のあの上奏は、朝廷を相手どつたものではない。いや朝廷との対決を、わざと、足利新田両家の確執に外^そらして、義貞を陣頭におびき出すためにした挑戦状にほかならぬのだ」

「ではあれも、そうした深いご用意であつたので？」

「もちろん、実戦でもその域^{いき}を越えてはならん。——はや高ノ師泰を先^{せん}鋒^{ほう}にやつたそうだが、その師泰の軍勢にも、三河の矢矧^{やはぎ}から西へは進み出るなど固くいましめておけ。……三河までは足利家の分国（領分）だが、そこから先を侵^{おか}せばしぜん反逆の軍になる。あくまで我は、受けて立つ、そこが足利家の名分であるぞよ」

「心得ておきましょう」

ぜびなく、直義はそう言つてまもなく退^さがつて行つたが、決して釈^{しゃく}然^{ぜん}とした色ではなかつた。いや奮然と死を期して別れ去つたものと見られなくもない。

すると、当夜の夜半だつた。

何か、尊氏の寢所の方で、異様な物音がしたので、近習の二人は、押つ取り刀でそこへ駆けこんで行つた。

「殿っ」

「おうつ、介と頼春か」

「なんでございますな、いまの物音は」

「盗人ぬすびとが入ったのだ」

「え、盗人が」

「あかりをつけろ」

「は。ただ今」

室はまっ暗だったのである。右馬介は宿直とのいの方へ灯を呼んだ。

すると尊氏は、

「ほかの侍どもは入れるな」

と、頼春に命じて、廊の仕切り戸を閉めさせた。

寢所の内には、枕が飛んでいた。また研とぎすました短い刀が落ちている。尊氏に投げつけられたものであろう。隅には小さくなつて、うずくまっている人影があつた。

「お。そやつでございますな、曲者は」

二人はそばへ寄つて行つた。山着の筒袖に膝行袴たつつけを穿はき、布頭巾ぬのずきんで顔をくるんでいた

その者は、左右の腕を、いきなり介と頼春の二人につよく捻じとられたので、いやおうな

く伏せていた胸を反らし、覆面のうちを短檠たんけいの灯に曝さらした。その顔は、思いがけなく、花みたいに白かった。

「やつ？」

二人は思わず手を離れた。きのう庫裡くりへ物売りに来たあの販ひざぎ女めなのである。またとつさに、あのとき尊氏が言ったことばも思い出されていた。

「介——」と、あきれ顔でいる彼へ、尊氏は一方の座から声をかけて。「ま。やさしく訊いてやれよ。なんでこの尊氏の命を狙うなどの不敵を抱いてここへ忍んできたものか。ましてまだ年もゆかぬ小娘の身でよ。よほどな仔細さいしゆがなくてはなるまい」

「では、これに落ちている刃は」

「その小娘の物だ。それをもって、わしの寝首を搔かこうと神かけていたものだろう。可恐こわいな。尊氏、大軍は何の怖れともせぬが、こういう目に見えぬところの刃には心こころも悔くむ。何でわしにさまでな恨みがあるのか、介よ、やさしく訊いてみい。おそらくは娘も逆上しているように、あとでもよい、よくいたわって、訊いておけ」

「かしこまりました」

介が、そう答えると、すぐその尾について、小娘が言ったのだった。

「仰せられますな尊氏さま。いたわつてなど、いただきたくはありません」

「ほ。いうたな」

「逆上もしておりませぬ。さむらいの娘です。仕損じた上の覚悟もしております。あなたをよくよく悪運のつよいお方。わたくしは不運なお人たちの味方。それだけのこと。すぐご処分をしてくださいませ」

「よし」

尊氏は、うなずいた。

「望みのようにしてやる。だが、一応の理由を問わねば処分をくだし難い。まず訊こう。名は」

「棗なづめといいまする」

「棗か。して生国は」

「信濃しなのの諏訪すわです」

「諏訪はふりの祝の一族だの」

「はい。兄の三郎盛高は、鎌倉の亡ぶ日まで、御先代（高時）の近侍の内の一人でした。そしてわたくしは」

「あ。思い出したわ」

「ご存知でしたか」

「二位殿（高時の妾）の御所に仕えていた者である。……かねて和氏かずうじから聞いていた」
いつであつたか。細川和氏の夜話に聞いたことがある。

高時滅亡の直後。

そして鎌倉の焦土に「犬神憑つき」という奇病が流行つていた頃のこととか。和氏と弟の師氏もろうじは、浜の漁師小屋で、一夜、ふしぎな小娘を見かけたという。

戦後のちまたには、亡家の女たちが、みな身を売つたり浅ましい生業たつきのもとに生き喘あえいでいたが、その小娘は、亡主の二位殿と高時との仲に生なじた亀寿丸かめじゅまるの行方を独りさがしあるいていた。——と聞いて、和氏はそのけなげさに感じ、舟を与えて落してやつた。――

——という巷ちまた話ばなしを尊氏はいまふと思ひだしたのだった。

「そのときの棗なつめとやらだな。棗か、そちは」

「和氏さまのあのお情けは、いまでも忘れてはおりませぬ」

「ではその折から、兄や父のいる諏訪へ歸つて、亡君のわすれがたみ、亀寿さまのおそばに、再び仕えていたわけだの」

「はい。兄の三郎盛高は、あの日、亀寿さまを背に負うて、信濃へ落ちておりました」

「むむ。さすが北条遺臣の中には良い武士はあったのだな。さきごろ、信濃北越に大兵をおこし、わずか二十日の間でしかなかったが、一時にせよこの鎌倉の府を奪回した先代軍の大将は——その亀寿さまが名をかえた——北条時行だったのであった」

「そうです。……足利直義どの以下を追い落とし、ふたたび、亀寿さまをいただいて、この鎌倉へ入ったときの、一族方のよろこびは、ことばにも言いつくせません。けれどそれもわずか二十日、たちまち、京からあなた御自身が加勢に来て、あわれ私たちの夢は、二十日先代と、世の人が笑うほど、つかの間に、^まみじんとなってしまいました」

「ぜひもない。なべて、弱いものは、亡ぶしかない世の中だ」

「いいえ」

と、棗はするどく首を振った。解け落ちた頭巾の下も無造作なつかね髪にすぎず、紅白粉も知らない顔はただ一途で異様な若さだけに研^とがれていた。

「おことばですが、ほんとの人らしい人は、弱い群れの中にこそ大勢います。弱いながら人の美しさを持つて必死に生きているものを、そんな者は亡んでしまえとは、あなたらしい言い草です。だから、わ、わたくしは」

ふと、鳴咽おえつになりかけた。唇をむすぶ。キラと目だけで尊氏を射、そして、涙をこらえてから、なお次をいおうと体じゅうの敵意を少しも解いていない。

尊氏は、じつと、見すえた。男にもこれほどの者は少ない。女である。しかも小娘だ。時代の風雲が作った荒磯の奇形な姫小松の一つともいうべきだろうか。

尊氏は、ふと、からかい気味に、

「だから、どうなのだ？」

と、反問すると、棗なつめは、血ぶくろを切られたようにばツと答えた。

「あなたを殺してやりたいと思つたのです！」

「なんで」

「あなたは強い」

「それだけか」

「それだけではありません。あなたは悪人だ。先には、ご恩顧ある北条家を裏切り、今また、朝臣の身で朝敵に立っている」

「はははは」

尊氏は笑った。だが、どこか空虚うつろをおおいえない笑いでもあった。

ふと。朝早い寒雀のさえずりが耳につく。

尊氏は三名をそこへおいたまま黙つて廊へ出て行つた。まもなくまた、ここへ戻つてきた彼は、衣服もかえ、洗顔や髪の手入れもすましていた。そして、

「介。^{すけ}……袈裟^{けさ}を」

と求め、その袈裟を掛け、手に数珠^{ずず}を持つてから、介と頼春へ、こういつつけた。

「棗^{なつめ}の処置は、そちたち二人へ預けておこう。あわれな者だ。酷^{むご}くはするな」

「はっ」

しかし、二人は当惑顔を見あわせた。小娘^{じんじょう}とはいえ尋常^{じんじょう}な不敵さではない。もし逃げでもしたらどうしようかという惧^{おそ}れである。で、そのへんのお指図を仰ぎたいと重ねていうと、尊氏は事もなげに笑い捨てた。

「たまたま、わしの室へ舞い込んだ小鳥のようなものだ。逃げたいなら元の野へ放してやれ。居たいなら幾日でもここへおいてやれ。ま、遊ばせておけばよい」

ゆるい、しかし大きな登音は、もう本堂のほうへ通う暗い廊を踏んで遠退^{とわの}いていた。例の勤行^{ごんぎょう}の時間なのである。まだ夜のような冬の晨^{あした}だが、彼はここに屏居^{へいきよ}いらい、朝々のそれを欠かしたことはない。

みずから壇の燈とうみょう 明をとぼし、香こうを拈ねんじ、經文一卷をよみあげる。そのあとも、氷のような床ゆかの冷えもわすれきつて禪那ぜんなの默想をつづけるのだった。この修行は彼としてはすでに久しいもので、いま始まったことでもない。師の疎石そせき夢窓国師の許へは、在京中にも折あることに参さんじていたし、その師を都へ迎えたのも彼であつた。また、後醍醐との禪縁をむすぶにいたらしめた蔭にも彼のすすめがあつた。

ただにそればかりでなく、後醍醐と尊氏とのあいだには、疏通微妙そつうみみょうな間かんに、禪の眼があつた。どっちも、禪の人である。その觀見かんけんをとおして互いの人間を量はかりあつていところがなくもない。禪は何らの扮飾も見ない。直指人心じきしだ。赤裸と赤裸だ。いやその赤裸すら禪にはないのだ。しかも機応自由の中に世を見つくす、世を生きぬく。そうして今という大地を舞台にこの両者は禪と禪とのたたかいを無意識に意中でしたともいえないことはない。

「……。殿」

誰か、後ろでよんでいた。

われにかえると、尊氏の耳にも遠い所の貝かいの音ねが聞えていた。

直ただよし義の軍勢が、今朝、由比ヶ浜から西へ立つはずである。それだな、とすぐ覺さとる。

「介^{すけ}か。……何事だ」

「はつ。ただいま山門まで、仁木殿が、出陣のごあいさつまでに、と申しまして」

「見えたのか」

「はい」

「あいさつだけを受けておけ。屏^{へいきよ}居の身だ。会^{えしやく}釈におよぼん」

「かしこまりました」

退^さがる。

まもなく、また来て。

石堂父子がお別れに参りましたと告げ。つづいては、畠山左京、今川修理亮^{しゆりのすけ}、小山の判官、武田甲斐、そのほか幾十将が、出陣のいとま乞いにと訪れたが、尊氏はそのたれへも会わなかった。

そして昼はまた、机によつて、独り読書に耽^{ふけ}っていたが、なに思い出したか、急に右馬介を呼びたてていた。

「介か。もそつと、ずっと前へすすめ。急にそちらならではの用事ができた」

「は、何事で」

「極秘のこと、書状にしては万一が惧れられる。しかしそちらならば年来の馴染みだ。先の道誉も疑うまい」

「お使いでございますな」

「そうだ。直義の軍勢は今朝立つたが、佐々木道誉らの先鋒は、すでに鎌倉を立つておる。——その佐々木の陣へ、秘命をつたえに行つて欲しいのだが」

「おやすいこと、さつそくにも」

「いや、やさしくない。味方のたれ一人にも知られてはまずいのだ。行く行く味方の陣地を通らねばならんが、そちの顔は余りにも味方には知れすぎておる」

「お案じなされますな。それほどの御秘命なら、頭を剃りこぼち、寺の備えにある笠、法衣を着てまいります」

「俄か坊主か。それやよからう。道誉に会うて、云々、尊氏の意中をかく申せ」——と、その云々の内容を小声で彼にささやいたが、また一考して、

「いやあの疑いぶかい道誉ではあるな。そちの使いでも、言葉だけではなお、これほどな大事、なかなか信じぬかもしれぬ」

と、机の上の禅書に、目をおとしていたが、やがて朱筆をとって、その禅書の文字の諸

所に、朱点を打ったり、棒を引いたり、また欄外に書き入れするなど、苦吟、長いことかかつて、

「これでよい」

と、やつと筆をおいた。朱をたどれば、いわゆる「暗文」をなすのであった。

「介。これならば僧侶が持つてもふしぎはない。また他人が見ても解読はできぬ。併せて、これを道誉へ渡せ」

「こころえました。ではおあずかりしてまいります」

「ときに」

と、尊氏はことばをかえて。

「昨夜の小娘——棗と申したな——あの小むすめはどうしておるな」

「一室にふさぎこんでおりまする」

「朝餉は」

「与えました」

「逃げもせぬのか」

「は。朝餉を喰べたあとも、釜屋部屋の片すみに坐ったまま、じっと考えこんでいるのみ

で、べつに泣いてもおりませぬ。何か、ご処置のことでも」

「いやべつに」

「では、身の支度もございますので、このままおいとまを」

「待て待て」

「は」

「尊氏はつつしみの身、かかることを命じた者は、尊氏ではないぞ。裏山の綱引き地蔵が命じるのだ。たとえ途中で直義ただよしの陣に行き会い、直義と出会うても申すなよ、道誉の件は」

「申すことではございませぬ」

右馬介は退がつて、こつそり一と間のうちで頭をまろめ、法衣、頭陀袋ずだぶくろの雲水姿うんすいすがたになりすました。

同僚の頼春は、それを見て驚いた。しかしその頼春にさえ、介は、仔細を打ちあけなかった。そしてただ、

「どうだこの姿、お地蔵そっくりだろう。じつは裏山の綱引き地蔵尊のお使いで急に西の旅へ立つ。頼春どの留守をたのむぞ。わけてあの小娘に油断するな」

とばかり、冗談に言いまぎらわし、たそがれの山門から飄ひようとして飛び出て行つた。

門

官軍は、十一月の二十五日、三河の矢矧やはぎまで来て、はじめて足利勢の抵抗をうけた。

海道の合戦は、この日に始まり、交戦三日後には早やそこの矢矧やはぎ川も官軍二万の後方しりえにおかれていた。そして序戦にやぶれ去つた足利方の先鋒せんぼう高ノ師泰もろやすは、鷺坂さぎさか（遠州見附の北）までなだれ退いて、

「残念だが、味方の来援を待つしかない」

とし、初めからおおうべからざる敗勢だった。

師泰らが、無念がつたのも、むりではない。彼らは、すでに当初、

「矢矧川から西へは一步も進んではならぬ」

という軍命令の下におかれていたのである。当然、こんな制約下では士気もあがらず、積極的な作戦もとれなかつたにちがいない。——そのため、まもなく仁木、細川、今川、吉良などの味方を加えるには加えたが、鷺坂のふせぎもならず、またぞろ、駿州の手越河

原まで敗退するの余儀ない破目^{はめ}になってしまった。

官軍は強かった。

わけて新田義貞の采配^{さいはい}振りも、かつての鎌倉入りの日以上な冴えで、その用兵ぶりなど、さすがと思われるものがある。

加うるに、

王軍

の威光もあつた。なんといつても錦の旗には人心がひかれる。多くの犠牲を捨てながらも、兵数は逆にふくれあがつていた。土地土地の土豪の参加、降参兵の投入。勝敗の帰趨^{きすう}はもう、それだけでも官軍強し、と誰の目にも^{ぼく}トしうるものがあつたのだ。

一方。

鎌倉をややおくれで出た足利直義^{ただよし}の本軍は、手越で味方の退却とひとつになった。ほとんど全兵力の足利勢がここに結集したわけである。直義はすぐ布陣を立て直し、士氣を上げまし、

「もしここでもやぶれたら、われらの途は死しかないぞ。万事は休む^や」

と、みずから指揮の陣頭に立った。——宿敵義貞と一騎打ちの覚悟であつた。

激戦幾昼夜。

しかしここでも一戦ごとに、足利勢は敗色を否みようなくしていた。その上にもである。突如、

「佐々木道誉の一軍が、義貞へ降参をちかつて寝返った」という驚くべき声が陣中を騒がせはじめた。

「よもや？」

直義はなお信じかね、また、とくに、道誉とは昵懇じつこんな高ノ師直なども、

「そんなばかな。おそらく、それは敵方の流言るげんだろう」

と、頑強に否定していた。けれど彼の信念も半刻はんときとは持たなかった。道誉が守備していた上流から押し渡った官軍の強力な大部隊が、夜のうち早くも味方の後方にまわって、直義の退路を断ちたにかかっているとすぐ分った。

「すわ！」

と、ここに暁の総なだれをおこし、その日から翌日へかけ、海道は敗走の足利兵がひきもきらず、直義はやがて、箱根の水飲みずのみ（三島口の山中）に拠って、味方をまとめていると聞えた。

このとき。もし官軍が急追さらに急追撃を加えていたら、直義は危なかったかもしれない。鎌倉も一挙に義貞の馬蹄ばていの下であつたかもしれない。だが官軍も連日の戦いで疲れていた。それに心も驕おごつていたか、義貞はつい国府の三島に馬を駐とめて数日は凱歌の快に酔つてしまった。

どんどん、どん……

さつきから山門の外を烈しく叩いている者がある。朝だが、まだ星があつて、浄光明寺の内はまっ暗だった。

だが、尊氏はすでに起床していた。いつものとおり勤ごんぎよう行ぎの座にすわるためである。かじかむ手、白い息、みずから灯ともす燈とうみよう明の虹の中に彼はふと耳をすまして、頼春頼春、と二た声ばかり呼んだ。

すぐ庫裡くりのほうから跽音がとんで来る。近習の頼春であつた。釜屋働たすききの襷たすきを解いて。

「殿。何ぞお召で」

「お」

と言つて、尊氏はまた、遠い所の音を待つように面おもてを澄すました。

「頼春。外は風だな。聞えなかったか？」

「はて。何かお耳に」

「しきりに山門を叩く者があつた。風の音とも思われぬ」

「それはどうも。……竈かまどに火をたきつけておりましたので、つい、うかとしておりました。ことによつたら、お待ちかねの右馬介が立帰つてまいったのかもしれない」

「いやいや、一兩人でない、馬のいななきもしたようだった。うかと門を開けず、まず何者かをたしかめて来い」

頼春はかしこまって、すぐ外へ駆けだして行つた。

そのとき、山門の外の者は、あきらめたのか、鳴りをひそめていた。が、なるほど少なからぬ人馬が騒さわめいている様子だった。

頼春は、太刀の鯉口をかたくつかんだ。武者の習性といつていい。すぐ不測な敵の襲来が胸をつきぬけていたのである。そこで彼はいわれたとおり、門扉もんぴのかんぬきもそのままに、まず何者か？ また何の用か？ を大音声でたずねていた。

そしてまもなく。

彼は、門外の者の答えを持つて、もとの本堂へもどつて来た。

が、尊氏は、はや勤行ごんぎょうの座について、読経をあげていた。——その三昧さんまい一念な背を見ると彼はぜひなく遠くにそつと坐つてしまった。そして機をうかがっていたが、近づいていえる機はなかなかなかった。——誦経ずきょうがすむと尊氏は半跏趺坐はんかふざ（片あぐら）のかたちをとり、丹田たんでん（下腹）に印いんをむすび、呼吸をひそめて、いつもの坐禅に入つたまま、またしばらくは他もなく自己もない「面心面仏」の人そのものになりきっている姿だったからである。

「……………」

いつか堂の欄間らんまに朝の陽の刎ね返りが映していた。尊氏はやっと、跏趺坐ふざをかえて、頼春をふりむいた。

「どうした？ 門外のことは」

「お味方ぜいの勢せいにござりました」

「味方」

「は。……戦場より抜けてこれへ急使としておいでなされた下御所しもごしよ（直義ただよし）さまのお旗本、上杉伊豆守重房、須賀左衛門すが、そのほか十騎ばかりの」

「ならば門をあけてやれ」

「お目通りへ請^{しょう}じててもよろしゅうございましょうか」

「む。二人だけを」

「では、すぐこれへ」

頼春は、飛んで戻った。そして山門をひらくと、破^やれ鎧^{よろい}、あるいは乱髪、または負^て傷^{おい}の足をひきずるなど、惨たんたる敗戦の泥土をそのまま身に持った武士大勢が、ぞろぞろ霜を踏んで境内へ入って来た。

尊氏は道服に袈裟^{けさ}すがた。

通されて平伏した二人は血泥^{ちじろ}もそのままな戦場の身なりである。尊氏は後ろの頼春へむかつて、

「御壇^{みだん}の御明^{みあか}しを消せ」

と、命じ、さらに、

「堂の四面の扉を閉めろ」

と、先にいいつけた。

それから使者二人の話を聞き、また直義からの書状も見て、さて言った。

「むむ。いくさは負けか。直義以下そんなにもさんざんにやぶれたのか」

「まことに面目もござりませぬ。矢矧川やはぎがわの一戦を仕損じてからは、海道の要害でも、いたる所でお味方は討ちなされ、あまつさえ、手越河原では佐々木道譽の裏切りなどもあつて、残念至極ながらいかんともなしがたく」

「そうだろう。——兵数においても味方は敵の四分の一。——初めから負けは分つていたといえなくもない」

「いやしかし、もし矢矧川より先へは出るなどの制約さえなければ、濃尾の地じざむらい侍、半島のお味方も、呼応こおうして来ましたろうし、また作戦も自由に、よい勝負ができたろうにと、それだけを、みな無念にぞんじておりまする」

「だまれ」

「はっ」

「元々、尊氏は朝廷を敵とする意志でない。さればこそ、恭順の意を表しひよう、戦は、義貞との対決として、直義以下のそちたちにまかせたのだ。敗れてからの泣き言などは聞きぐるしいぞ」

「ゆめ、泣き言など申しはしません！」と、上杉伊豆守（重房）は大声で言い返した。これは憲房のりふさの長子である。したがって、尊氏とも他人ではない。

「……まずはお聞きくださいまし。直義さまはいわずもがな、足利方の諸士、みな名に恥じぬ戦はしたとおもいます。けれど、敵は官軍の名に誇り、いまや三万におよぶ大兵を擁すにいたり、お味方はいえ、からくも箱根山中の一壘二壘にしがみついて、孤軍、必死のふせぎにあたっておりまする」

「わかった。いま、直義の書状に見るも、その辛さのほどはようわかる。……だが、それゆえ、わしに起てとすすめに来ても、それは無理だろ」

「なぜ、ご無理ですか」

「尊氏は公約しておる。本心、朝敵たるは好まぬところと」

「でも、過ぐる日、朝廷では、尊氏ノ官位ヲ褫奪ス、と世に公布しております」

「仔細ない、仔細ない」

「のみならず、軍状その他、すべて官軍の合言葉は、逆臣尊氏でしかありません」

「それもよし」

「いや殿はそうでも、朝廷方では、殿の恭順など一切みとめてなどおりません。——ひとたび、官軍がここへ迫らば、たとえ染衣剃髪のお身とおなりであろうとも、何で、仮借などするのですか」

「……………」

「申しては憚りながら、大塔ノ宮の仇とばかり、八ツ裂きにもいたしかねますまい。さらには、ご舎弟直義さまをも、お見殺しになさるお腹でございましょうか。いまや箱根の孤塁には、譜代の御一族の全生命が、ただ一つのお救いのみを、ひたすら、お待ちしておりますものを」

重房が言い疲れると、代つてまた、須賀左衛門が言つて、尊氏へ迫つた。
じつと、恐い目をしたまま、黙りこくつてゐる尊氏へ。

「何としても、おきき入れかなわぬ上はこれまでのものです。御一門の魁に、まずわれら両名ここの御堂を拝借して、腹搔ツ切つて相果てまする」

「……………」

「また直義さまも、孤軍の味方も、箱根の一塁を枕に、立ち腹切るか、斬り死にか、いずれともみな最期の途をえらぶでしょう」

「……………」

「ですが、これがわが殿のご誓約であつたでしょうか。——そもそも元弘の初め、はじめてわが足利勢が上洛の途中、矢矧の柳堂において、一族宿老すべての者へ、ご大望を打ち

あけられ、一同、源氏重代のみ旗と祖霊のまえで血判をいたしました。よもあれをお忘れではございますまい。いらい拙者どもは、そのみを、ただただ、弓矢の大願とちかい、子を捨て、親の死をも見てきました」

「……………」

「しかるに今日、殿には、恭順を称^{とな}えて寺を出で給わず、それもそのお心が、天^{てん}聴^{ちよう}にとどいてゐるならまだしものと、そうでもないのに、ひとり何を守ろうとなさるのか。われら将卒には、得心がゆきません。……孤軍の御舍弟を見殺しにし、お味方すべてをも失ツた後に、いったい何があるのでしょうか。……あわれ、三河におわす千寿王さま、みだい所さま、いや足利一類と見なさる者、ひとりも世には残りますまい」

ことばは、切^{せつ}々^{せつ}、ていねいであつても、身はそのまま戦場人の二人だった。このとき、上杉重房も言つた。

「左衛門ツ。これまでだ。殿はつんぼとみえる。もう申すもせんない。やめろつ、腹切ツてお目にかけるばかりだわ」

「おうつ、御覽^{ごらん}ぜよ殿」

二人は坐り直した。革胴の紐を解いて短刀を左に持った。——が、尊氏はそれも見てい

る気か、なお黙っていた。

しかし、尊氏の蔭に控えていた頼春が、ぼつと進み出て二人を止めた。たかぶる声と声の下に三名のからだは一つものに見え、相擁しながら、主君を後ろに、その主君を罵倒し、「見損った！ ああ、見損ったおれたち家来も馬鹿だツた」

と、無念泣きに泣き入ってしまったのであった。すると尊氏は初めて、

「頼春」

と、重い口をひらき、身に掛けていた袈裟けさを外して、

「袈裟けさ篋へおさめておけ。そしてまず朝飯を食おう。それからすぐ身仕度だ、具足ぐそく櫃びつを取出して来い」

と、いいつけた。何か凛りんとした語気だった。そして命じ終るやいな本堂を立つて方丈の方へ行ってしまった。

「や、や？」

頼春は蹙しぢるように、主君の姿を、廊の外へ追いつためいて。

「殿々とのとの、よろい櫃びつとは、お身仕度とは、ご出馬のご用意にござりまするか」

「おおよー！」

遠くぼうの房の内うちで、尊氏の返辞へんじが、大きく聞えた。

本堂前ほんだうまへには大焚火おほたきびが焚たかれた。浄光明寺のうちも外もたちまち活気と人ざわめきの埧ると変つばり、尊氏は、あらためて方丈へ呼びよせた上杉重房と須賀左衛門のふたりへ、

「すぐ行け」

と、何事かを命じていた。

ふたりはすぐ馬にとび乗つて山門を出て行つた。おそらくは鎌倉じゅうを駈けまわり、なお各所の木戸や屋敷には多少残つている留守の将士へ、尊氏の出馬を告げ、

「すぐ御馬前へ集まれ」

と、布令ふれいに廻つたものに相違なからう。

尊氏はそのあとで芋粥いもがゆを三杯も喰べた。出陣には武門しきたりの古式もあるのだが、家族はおらず、時もこんな場合である。頼春の給仕のみで、すぐ粥腹かゆばらに鎧よろいを着込む。

かつての元弘の年。

はじめ、彼が高時の命で上方へ出陣したときは、父貞氏の喪もに会していた。よくよく、出陣祝いにはめぐまれない巡り合せめぐあわせがつきまつている。

しかし彼は、こんな形式事を気に病むものではないらしい。粥腹ぬくに温ぬくもつた五体をよろ

いにつつむと、かえつて、彼本来の面目とおちつきを持ち、そして、頼春や寺中の家土がそれぞれの腹拵えや身仕度をすますあいだ、独りあぐらをくんでゆったりと庭の朝霜に對していた。

もちろん心はもう戦場へとんでいよう。自分が駈けつけてゆくまで弟の直義ただよしがよく敵の大軍をささえて生きているかどうか。あれこれ、限りのない惑念も湧いたであろう。

しかも、この敗退の因は、彼にある。尊氏が初めから起たなかった出ばなの士氣の不振にあつたと言つていい。——その大事な機会を——なぜ彼はわれから恭順をとなえて寺へなど籠こもつていたのか。

後世の史家は、これを尊氏が打つた「賊名のがれの芝居」であつたと結論する。

なるほど多分に意識的な計算のあとはある。だが、これが彼の名分だけの擬態であつたとするなら、何もこうまで、あぶない橋は渡るまい。足利一門の致命ともなりかねないような最悪の最後まで、じつと、蟄居ちつきよをまもっている愚ぐはしまいし、その必要もなかったのだ。

おもうに。——彼が後醍醐の恩寵おんちようをふかくわすれず、また朝廷は朝廷としてあがめておきたいと声明していたのも、それは彼の本心で決して偽りではなかったものと考えら

れる。けれど、足利一門の滅亡もそのためには捨てて惜しまぬというほどまでには徹底した恭順でもなかったのである。——そして彼は、朝廷へは抗したくないが、対義貞との戦いならば——と、義貞のおびき出しには、むしろ主戦的な構えですらあったのだった。

矛盾の兄、と直義ただよしがいったのも道理であって、今朝の尊氏はまた、自己のそうした行為のあとを、いささかも矛盾だったとはしていないふうだった。——天も照しょうらん覧あれ、自分の本心はこうである。にもかかわらず、あくまで朝ちようけん権をかさにきた王軍はわがのどくびを締めてくる。坐して待てば死あるのみ。足利一門は地上から消滅する。これは我慢ならない。たとえ朝廷の軍であろうと今は忍ぶるときではない。

「行くぞ、頼春」

尊氏は、方丈から起つやいな、大きくどなった。

「それっ、お出ましたぞ」

寺中の将士は、尊氏につづき、一せいに山門の外へ流れ出た。といつてもすべてで四、五十人をこえてはいない。このわずかなものがじつに尊氏の、天下の分け目をみかどと争う門出の兵力であつたのだ。

つい今朝はまだ、身に袈裟けさをかけていた恭順の人が、具足馬ぐそく上の人だった。かぶとは背

に負い、烏帽子だったので、まだうらうらと冬靄ふゆもやの高きにはあがっていない太陽が彼の顔をまともから染めていた。そのきらやかなる「矛盾像」を、しかしその人自身は決して眩しげになしていなかった。しかと腹では割りきッている眉だった。

「頼春、頼春」

「はっ」

「わしの馬の尻について、よく駈けてくる童わっぱはだれだ、どこの童武者わらべむしやだ」

「ごぞんじの棗なつめでございます」

「女か」

「はいっ。先夜の」

「なんであんな者を連れてまいる。追っ返せ」

「ききません。何といってもきかないのです。けれどあくまで殿のおん供をして行くのだと」

「修羅しゆらまた修羅だぞ、行く先は」

「合点がてんなのです、充分に」

「こういう料簡りようけんだ」

「わかりません、まったくわからぬ女です。……が、察しまするに、これまで自分が考えていた足利の大殿というものと、目に見た殿とは、まったくちがっていたと、いたく悔悟かいごの念ねんに打たれたものと思われまする」

「ふうむ」

「そのうえ、ここ幾日を共にいて、殿のご起居から一切を知るにおよび、いよいよ初めの恨みも畏敬いけいにかわり、いつまでもおそばにいたいと願うたではありませんまいか」

「まるで、やんちや娘だな、ただならぬ生死のちまたを、なんとも恐れていぬなどは」

「ここを追われても、行く所はないとも言っておりました」

「それはそうだ。先代軍などは、はや一ト村雨の露とどこかへ消えてしまった。女の兄の諏訪三郎なども生きてはおるまい。不愍ふびんといえ、不愍な女」

「この明け方も、いちどは、おん供などは相ならんと、追っ払ったのでございましたが、どこか近くの農家にでも預け置いてあったものか、たちまち、小姓具足を身に着け直し、殿が御出門となるやいな、ああしておあとについて来たものにござりまする。お目ざわりなれば、もいちど叱ちツて、追い返しでしょうか」

「いや待て」

尊氏は、振返つて。

「ほツとけ、放ツとけ」

彼の駒足、彼の前後につづく駒足、自然に駒と駒とは勇みを競ツて、加速度に流れは早くなつていた。

また、辻々へかかるたび、その参加者も激増していた。——すでに伊豆守重房と須賀左衛門とが、ふれ廻つていたことなので、鎌倉じゅうの留守屋敷は、この朝、その老幼までをあげて身の物具もののぐもあわただしく、すべて辻の木戸や浜べ口にむらがり出て、尊氏の駒を迎え、「——先は知らず、ただ大殿が行く所へ」と、いのちを託していたのだった。

かくて由比ヶ浜を西へこの一勢が急いだときは、老兵童卒を加えおよそ六、七百の兵数にはなつていた。

かざばな
風花

時は、真冬だった。諸書に

建武二年

十二月八日

鎌倉をお立出で……

と一致しているから、尊氏の発向は、この日とみてまちがいないが、以後の合戦中には、

「タビタビノ氷雨」
ヒヨウウ

とか、

「終夜ノ風」

とかの記録がまま出て来るから、終始、天候はよくなかったようである。

ところで作者^{わたくし}はよくものしり顔に古書の端々を引きあいにもちだすが、これは決して物語の辻褄をあわせるための手段ではない。必要な脚色や小説模様はわたくしもわたくしなりの仕立て方で染め上げてはいるが、素材の史系^{しし}はどこまで史家の糸で織って行きたいと思うし、またすこしでも往時^{おうじ}の實際を紙背^{しはい}に読む読者の試案にもなろうかと、折にふれお目にかけているにすぎない次第である。

大体、古典の戦記物なる物では、たたかいの奇略、一騎打のさま、筆を惜しまず、つぶさな描写はこころみられているが、これを絵画的でなく、理念でたどると、しよせん現代人にはウ呑みにできかねる。

たとえば、このさいの、

箱根、竹の下合戦

の一条もまたしかりで——両軍の配置、地理、兵数、機動の経路——そして尊氏が断行した兵略の根底など、すべて大切なことはなに一つそれからは知ることができないといつても決して言い過ぎでない。

というようなわけで、ここでもまた、阿蘇家、相馬家の軍忠状とか、古文書の断片とか、古典太平記よりはややましな梅松論などの傍証を綜合して書いてゆくしかないことになる。

と、まず前提して——そしてその推定から尊氏軍の進路を^{はか}図つてゆくと、彼が^{さかわがわ}酒匂川附近へさしかかった頃には、おそらく、箱根山中にとりかこまれていた弟直義^{ただよし}の孤軍^{さか}からも、

「ありがたし。これこそ天助^{てんじょ}の御到着」

と、直義の口上を持つて、さつそく出迎えの将士がこれへ来合せたことと思われる。

それもあり、また伊豆や海道筋からも味方の相当数が「尊氏出馬」の声から声をつたえ聞いて集まり、須臾^{しゆゆ}にして麾下^{きか}は、数千にのぼっていたろう。軍記調の古典ではすぐこれ

を十八万騎の二十万騎のと称するが、せいぜいのところ、じっさいは三、四千騎か。

しかも彼は、このさい、

「直義から迎えによこした武者どもは、ただちにまた、直義の陣所へ返って、そのみをかたく守れ」

と、その数百人も、自軍には加えなかった。

この意外な指令に驚いたのは、細川頼春、上杉重房、須賀左衛門らの左右だけではない。あたりの将士はみな、耳を疑った顔つきで、

「——では、いったい、孤軍の味方も援けに向わず、この軍はどこへ行くのか？」

と、一せいな怪しみを尊氏へそそぎあつた。

尊氏はしかし何のためらいもなく、それらの一隊は元の箱根路へ返し、自身は自軍だけで、さらに酒匂さかわの岸を上流へ急ぎ出した。

つい言いのこしていることがある。

それはさきに、尊氏の密命をうけて、浄光明寺の門から、旅の一雲水うんすいに化けて、どこへともなく立去っていた侍臣一色右馬介についてであるが。

その右馬介は、尊氏の軍が酒匂^{さかわ}の駅に着いた日、

「途中、ご出馬と噂をきき、ここにお待ち申しておりました」

と、どこからともなく姿を現わし、彼の前へ来て初めてその破れ笠^{やがさ}のひもを解いた。

「介^{すけ}か」

待ちかねていた尊氏は人を避けてすぐ彼とふたりだけで駅の伝馬役所の内に入り、しばし密談をかわしていた。

要は、介の報告であつたにちがいない。——報告の内容に尊氏は満足した容子であつた。彼がこれから臨まんとするいちかばちの戦場の賭けは、このときにおいて一^{いっ}そう腹がすわつたものといつていい。

「介^{すけ}。……すでにそちが去つてからまもなく、佐々木道普の寝^ねがえりと聞えて来た。それ聞いて、ひそかにやつたわと思うていたぞ。そしてまた今、そちのことばでまた一^{いっ}ばいたしかめえた。このうえは、大儀だが、もういちど、あとへ戻つて使いしてくれい」

「いずこかは存じませぬが、いとやすいことにござりまする。して次はどこへ」

「直義の陣場へだ」

「こころえまいてござりまする」

「直義一勢ぜいはいま、箱根路の三島口、水飲みずのみという部落の前に壕ほりを切って、一族死に物狂いでふせぎ戦っていると申す。……我慢はここわずかなまだ。死ぬなと申せ」

「きつとおつたえ申しまする。いやおん兄君の御出馬とお聞きあれば、それだけでも勇氣は百倍。およろこび目にみえまする。そのほか何ぞおつたえは」

「書面はいらん。そちの口だけで充分だろう。序戦、そちが遠くへ策に出ていたなどは、直義もまた、何も知っていないのだ。そこを打明けて、よう話せ」

「ご遠謀には、さぞお驚きなされましようず。では」

「待て待て。いま、そちから敵状の仔細あらまし聞きとつたが、もいちど、念のため、覚えしておきたい」と、尊氏はよろいの袖から小さい綴物とじものと矢立の筆をとり出した。そしてそれへ地形の図を描き、また介の調べによる官軍方の陣所人員その他の符号をぎつと誌つけて行つた。

「ま、こんなことでもいい。いくら確かとそちが見ておいたことでも、軍は生き物だ、いくらでも動く。その動きを見こして把握せねばならぬ」

「しかし、三島あたりの町沙汰でも、義貞はじめ、官軍の公卿大將輩ばら、みな勝ちに酔って、はや凱旋がいせん凱歌がいがの有頂天うちようてんとあるのは事実にござりまする」

「そこがありがたい。……ありがたい無形な味方と申さずばなるまい。——では右馬介」

「は。おいとまを」

「裏から出て行けよ」

「そのつもりで笠、杖なども離しておりません。さらば御武運を」

介は、一礼して、伝馬役所の裏から誰にもその面を知られず立去ってしまった。じつにこの一布石があつたればこそ、尊氏も自信をもつて、直義が迎えの一隊も返し、自軍のみで目ざす山波深くへ進んで行つたものであつたろう。

いつたい、どこへ。

歩いている将士すら軍の方向は知らなかった。が、翌日の彼らはもう酒匂さかわの上流を折れて足柄山あしがらやまにかかつているのを知つていた。——やがて地蔵堂へを経、金時山きんときやまの北を峠越えに出ると、南へのぞむすぐ目のさきに、

竹の下

さらに三島まで一路降り坂で、その彼方には駿河湾の冬の海が黒いといつていいほど深い碧あおをしている。

しかし、そこまでを見とどけたのは、先駆の物見隊だけで、尊氏の本隊は、なお地蔵堂

のあたりにとどまり、吹きすさぶ風花まじりの山風の下にその晩は夜営していた。

地名、竹の下とは「岳の下」の意味か。——物見の言によれば、そのへんから足柄明神へかけて、およそ七、八千とみられる敵が諸所に団々たる大焚火をあげて温もっているという。——いまは疑いの余地もない。大将尊氏の胸にあるものは、その搦め手の敵軍を、不意に、真上から撃ち下ろすにあつたにちがいない。

「旗は」

と、尊氏は物見の者に、彼らが眼で知りえたかぎりの旗じるしなど聞きとっていた。

それによつて、敵の主陣は、義貞の弟、脇屋義助、義治とわかった。

また中書ノ宮尊良親王以下、八人の公卿大将がそのうえにいることもわかった。

「よしよし、ほかの大名旗本勢など、いちいち知る要もない。まずは腰糧を食うてよく寝ておけ」

と、これは物見隊へだけでなく、全軍の将士へも同様な令でつたえられた。

けれど腰兵糧は氷を噛むようなものだし、火の気はもちろんゆるされず、その寒烈は骨を刺す。が、それでもいつか横たわると三千の兵は死んだように眠っていた。眠っているまが人間の本望を充たしている最良の時でもあるかのように。

尊氏も一とき眠った。

そのほかは地藏堂の縁をめぐるて思い思いな寝相をえがいていたが、折々には、むくと誰かが首をもたげて耳をたてた。そしてまた眠りにおちた。

こうして寅の刻とらこく（午前四時）をやや過ぎたかの頃になると、初めて、地藏堂附近は騒然となり、人も馬もふるい起きて、やがて一せいに峠の上へ出て行つた。——そこに立つと、竹の下はすぐ眼の下にあり、敵の所在は燃え残りの火の気で知れる。尊氏は齒の根のふるえを禁じえなかつた。心のなかでさし上げた大石を一気に落すような思いで言つた。

「あの真ん中へ突つ込め」

そしてまた、

「坂下へ廻るな。いつも敵の上に足場をとつていたためつけろ」

と、追っかけに注意した。

まだ夜は明けていず、足もとすらもまつ暗なのだ。——敵の驚きはいうまでもない。寝耳に水の奇襲だつた。脇屋義助の本陣のあたりが、須臾しゅゆのまにぱつと赤い火光に染まってみえる。すでに火が放かけられたものであろう。

また。近くの足柄明神もすぐ黒煙にくるまれていた。中書ノ宮をはじめ長袖の公卿大将

ばらは、うろたえに右往左往^{うおうさおう}し、打物すら持ち忘れてただ逃げ惑った。そして手もなく討たれてゆく将も二、三にはとどまらなかった。

何か、地異天変のような錯覚^{さつかく}にもとらわれる。

七千人の旗營^{きえい}が一瞬にどうかしてしまったとしか見えない。——どろどろと熔岩^{ようがん}のような黒いものが、山の中腹から逃げまろび重なりあつて、はるか麓^{ふもと}まで押し流れて行く。すべてそれは、人間と馬と、また新田勢や中書軍の旗差物などだった。

「まずかった」

脇屋義助。兄の義貞にまさるこの勇将は、どこかで地だんだ踏んだことだろう。

「これというのも、足手まといな中書ノ宮や、公卿大将の大勢を、上に奉じていたためだ」と、くやしがつたにもちがいない。

およそ兵略として、夜の陣を、山腹の急坂において眠るなどは、法外な無知である。——と知りつつも、つい竹の下にとどまったのは、足柄明神や民家の屋根もあるので、宮以下の陣座の便宜^{ひんぎん}について惹かれての処置だった。

「もう追いつかぬ！」

彼の号令も、今は一兵の足さえ踏みとどまらせる力にはならなかった。——敵は、金時

山を負つて、逆落しに、猛火は山風を孕はらんで、これも味方のあたまからおおいかぶさつてくる。そしてひとたび浮き足立つた自失のなだれは加速度を加えるばかりで、その群影は——御殿場——御坂——佐野ヶ原——黄瀬川べりと、止とどまるところを知らなかった。しかも雑兵輩ぞうひようばらは、こんな潰滅状態のなかにありながらも、

「氣をつけろ、新手の敵は足利の宰相らしいぞ」

と、はや尊氏の出現を知つて、尊氏の名を口から口へつたえていた。そしてこれも予想になかつた震撼しんかんをよびおこし全官軍の大驚愕だいきようがくとなつた。

時に、当の本軍たる新田義貞はどこに陣していたかといえ、この日の前日も箱根山中の要害——足利直義の孤軍を——まだ攻めあぐねていたのであり、この明け方の、

尊氏来たる

の声には、ここでもまた、竹の下と同様な寝耳に水の驚きと共に、総退却を余儀なくしていた。

なぜならば、竹の下や足柄明神から崩れ立つた兵は、みな溪流三島口へ落ちかたまり、その三島口は、義貞の本軍からもただ一路の後方陣地だったからで、

「なに、尊氏の軍が」

と、ここでは、その恐慌状態を背後からうけたかたちだったのである。
義貞もあわてた。

足柄峠を突破して、尊氏自身が、背後へ深く廻ってくるなどは、よくよく捨て身の戦法に出て来たものにちがいない。——おそらくは精兵をすぐり、決死の兵でもあるだろう。恐るべし、決死の軍には当るべからず、として彼は急に、

「全軍、退け」

と令して、その大軍を、徐々に、駿豆すんずぎかいの藍沢あいざわ方面へ移したものだった。

すぐ。前面にあつた足利直義らの孤軍は一せいに攻撃に出てきた。また新田方のうちからも突如、寝返り軍が行動を起すなど、みるまに義貞の本軍はズタズタに乱れ、その陣地変えさえおぼつかなく見えてきた。

果てなく戦場の地域はひろがっていた。函南かなみの裾野から足柄、愛鷹あしたかのふもとへかけ十里は人馬のとどろきといってよい。

ひようひようとこの日は風があつて白い風花が旗や剣槍を吹きかすめた。義貞はひとまず三島ノ国府に兵をまとめて陣容をたて直すつもりで藍沢あいざわヶ原を駈けていたが、幾度と

なく、

「裏切りとは何者の裏切りだ。一体、誰のどこの軍が、寝返ったのか」

と、前後の騎影に訊いていた。しかし皆^{かいつもく}目^めその真相はわかつて来ない。そしてただ味方のどの方面を見わたしても、西へ南へ、なだれうごいているか、支離滅裂な雄^おたけびのうちに、しかもまた、あらぬ地点に敵が見えたりもするのであった。

「船田、船田。あれなる小高い岡へ旗を立て、義貞ここにありと味方へ知らせろ」

そこは三島に近く、西に黄瀬川をのぞんだ土狩^{とかり}の岡だった。

船田ノ入道はまっさきに登って行つて一引両の幟^{のぼり}を立て、また螺^{らしゅ}手に命じて貝を吹かせ

た。つづいては堀口、世良田、里見などの一族。さらに義貞のそばを杉原下総、高田義遠、

篠塚伊賀守、川波新左など——新田十六騎——の旗本がとりまいていた。

けれど、味方をよび集めるための旗陣^{きしん}と貝の音は、かえって敵を求めてしまった。

黄瀬川の向うには、足柄峠から脇屋義助と中書軍とを追いくだしてきた尊氏の麾下^{きか}がまつ黒にみえ、またうしろからは、直義の兵馬が追ッかけて来、岡は孤立に陥りかけた。

もちろん、空^{むな}しく待つてはいない。河原の低地、背面の平野ではすでに激戦を展じている。

烈風なので、矢は用をなさず、どこでも騎馬歩兵の接戦だった。そのうち国府（三島）方面から黒煙がのぼりはじめた。官軍にとつての重要な本営地である。義貞は愕然とした。「や、や。退路を断つた敵があるぞ！」

もはや三島の内からも寝返り軍の出たことは疑つてみる余地がなかった。いや今晩来の裏切り者が、誰と誰であつたかも今はほぼわかつて来た。

四十人、五十人と、組々で敵へ降参してゆく小族などは物の数でもなかったが、千、二千という兵をつれて敵へ寝返つた大物もある。そのうちの優なる者は、

筑紫の太友左近将監

出雲の塩冶判官高貞

近江の佐々木道誉

などであると聞えた。

「えつ、道誉が？」

と、それには義貞も咄然とした。——その道誉は、つい先ごろには足利方として矢矧の陣にいたのであるが、手越河原の対陣のさい彼から款を通じて来たので、渡りに舟と味方に用い、以来、後ろ備えにしておいたものだった。

「さては」

と、今にして思い当らぬわけにゆかない。

出雲の塩冶えんやは元々佐々木一族だし、筑紫の大友は、初めから信じ難いふしがあるので後陣においた者である。ここで彼はハツとした。あるいは、道誓の降参は初めから尊氏との黙契もつけいで行われた二度のトンぼ返りではなかったのか、と。

「しまった！」

何処かで、あの薄らあばたが——そのあばたをみな笑クボにしているような尊氏の顔が——義貞の臉に、ふと見えた。

風花はひる頃からほんとの雪に変わり出していた。

その雪雲の下に、炎々と焼けつつある国府（三島）の町屋根が望まれる。

新田軍は三島を捨てた。ぜひなく、愛鷹山あしたかやまの根に沿った西への道を、幾段にもなつて、落ちて行つた。敵に追われ、雪風に捲かれながら、逃げなだれてゆく人馬の影が日没まで絶えなかった。

「中書ちゅうしよの宮はどくなされたか。宮以下の公卿軍は」

こう訊きながら義貞はひと息ついた。鈴川の近くであつた。

旗本十六騎のうち、そばにいたのは葦堀七郎、篠塚伊賀守、川波新左などの四、五名にすぎず、兵もせいぜい二、三百しかみえなかった。

「いや、もう先です」と、旗本の中の一人がいう。

「――宮の軍は、はや富士川まで落ちて行つたと聞きます。しかし二条の中將為冬卿はお討死とか」

「二条殿は死んだか」

「ほか二、三の公卿大將も討たれ、その手にあつた諸家の兵など、どうなったのか、ほとんど確かにはわかりません」

「義助（脇屋）はまだ後だな」

「ご舎弟様の一軍は、黄瀬川の上を取つて、烈しく敵をくいとめ、船田ノ入道なども、必死な殿軍をつとめておりますが……」

まもなく烏山修理亮、大井田式部があとを慕つて追ツついて来る。また一ノ井兵部、厚東駿河守、堀口美濃守貞満も、満身、朱の姿で、

「おお殿」

と、残念そうに、みな義貞の駒のまわりに寄つて来た。

が、なお義助が見えないので、

「いかにせし」

と、義貞は気が気でない。けれどその義助もやがて見え、わが子、義治よしはるを連れていた。この式部大輔たゆう義治は、まだ十四の年少武者だった。父義助は、この子を乱軍中から救出すためにずいぶん苦勞をしたらしい。父子のすがたにその難戦苦戦を通つて来た状がそのまま出ていた。しかし脇屋義助は、ここへ来るとすぐ兄へ忠告した。

「馬もうごかず、お疲れでもありませんが、ここで夜は過ごせませぬ。どうしても夜のうちに富士川を越え渡らねば危険です」

「大敗だなあ」

と、義貞は浩嘆こうたんして。

「きのうまでのあの大勝が、こんな一敗地に終ろうとは」

「無念です。まったく尊氏めにしてやられました。——大友、塩冶、佐々木などの寝返りさえなくば」

「それはやはり尊氏の計だったのか」

「——としか考えられません。思うに、這奴しやつが蟄居ちつきよの入寺にゆうじなどと事々しく世にふれて

いたのからして、こちらに油断を囁ませる策であつたのでしょう。……そして道譽という化け物を巧みにつかい、その道譽をして、官軍中の諸將へ密々後日の恩賞を約束させ、今暁、一ときの返り忠に出たものと思われまする」

「むむ。……」

義貞のせつなの眉を、このとき、誰も正視にたえなかった。

「よしつ、忘れまいぞ。いつかは尊氏にこの逆の目を見せずにおこうや。が、ぜひもない。今は無念をのんで退いておこう」

全軍、富士川を雪の夜半にやつと渡つた。

一方。

足利勢は三島を中心に夜つびての凱歌だつた。降りやまぬ雪の下にはまだ炎々と民家が焼けているのだが消し手はなく、ただ戦勝の驕りに燃えた顔の狂奔と、降参兵の大群が、諸所に茫然と給与の粥を待つてたたずんでいるほか、折々、前線からの騎馬が泥土を飛ばしてその夜の本陣の森へ入って行くのが見られるだけで、いつか十四日の朝は来ていた。

尊氏と直義とは、きのうここの国府の館で落ち合い、

「いまは何もいえぬ」

と、いう尊氏に、

「私もただ胸がいつぱいで」

と、直義も眼をうるませ、二人はあとの陣務に追われていた。

その降将のうちでも、とくべつに尊氏が床しょうぎ几を与えて、やあと、親しげに迎えたのは、かの佐々木道誉であつた。

「道誉。健在でまずめでたいの」

「おかげで。ははは」

「いやこのたびの勝ちいか軍は御辺の功を第一と思う。ご苦勞いくさだった」

「お賞めにあずかつて身の面目でおざる。したが、およそ道誉のいたしたことは、武門の名誉とはうらはらなもの。おかげで道誉は海内随一の寝返り上手という名を博はくしたことに
なり申そうか。いや、自嘲にたえん」

「人には人の才能がある。それも器量の一つ。道誉にあらずんばなしえない」

「お賞めやら？ お貶けなしやら？ とにかく道誉を知る者はあなたでしかない。同時に、あなたを知る者もそれがしだと自負しておる。そのためにや、分ぶの悪い役割とは思ひながら

も唯々^いとして、御計略の道具になった」

「珍^{ちん}重^{ちよう}珍^{ちん}重^{ちよう}」

と、尊氏も戯^{たわむ}れて、

「この後も使うぞ」

と、顔じゅうのあばたを笑クボにして言つた。

入れ代りに、陣幕^{とばり}を揚げて、直義が顔を見せた。明け方のつかの間^まだったろうが、よく

眠つた朝の顔だった。

「兄^{あに}者^{じゃ}」

と、つい出たことばを、言いあらためて。

「兄上。——一夜考えておく——との昨夜の御意^{ぎよい}でした」

「む。この後の方針か」

「されば。いちど鎌倉へひきあげて地固めするか。または、このまま義貞を追ツて都へ迫るかの、二途ですが」

「きめたよ、直義」

「どう？」

「このまま行こう」

「即日？」

「今日にも」

「こころえました」

「鎌倉などは欲しいものにくれてやれ。直義、中^{ちゆうげん}原とは真ん中のことだ」

「そこまでのお腹をうかがえばわれら死んでも本望です」

「ばかを申せ。死ぬに苦勞はいらん。これからこそ実^みのある苦勞を尊氏はする気なのだ」

「朝敵とよばれても」

「照^{しょうらん}覧 あれ、人はいおうと、天は知るだろう。尊氏はただ正しいと信じる道を行くだ

けだ。……いやこんなはなしは後日後日。直義、すぐ前進の貝を吹かせろ」

「お待ち下さい。さつき師直が、降参の将の簿^ぼを作つて、お目にかけるといっておりますから」

直義はあわてて出て行つた。まもなく発向の貝が鳴つた。この朝の足利勢は、一夜に万を超える兵力となつていた。

ほとんど抵抗らしい抵抗もみず、以後の足利勢は、行く先々でいよいよその兵力を強大

にするばかりであつた。

当日、加島に夜営

翌朝、富士川渡河

次の日、興津

やがて手越、大井川と一路東海の道は足利色に風靡ふうびされて行つた。

しかしその間、大雨の一昼夜もあつたので、尊氏は新田の敗残勢力を叩くよりも、これ以上、自軍を疲れさせまいと心していた。わけて海道一の大河、天龍川を越えるには、しよせん一ト難儀はとしていたのである。

ところが、ほどなく遠州に入りその天龍川を前に眺めわたすと、濁流満々ながら対岸にいたるまで堅固な舟橋がえんえんとなお無事に架かかつていたので、

「これはどうだ！」

と、軍勢は笑いどよめいた。

「新田勢のあわてぶりよ。逃げるに急であとの舟橋を断きり落して行く大事な退軍の常法すらも忘れている——」と。

が、尊氏は、

「はて？ うかと渡るな」

と、全軍を待たせた。

そして附近の川小屋から土地ところの者数名を狩り出し、何で舟橋が無事にあつたかを直々じきじきに質ただした。

すると彼らは。——これはつい四、五日前のこと。新田勢がさんざんな敗まけ軍いくさのていでこの地へかかり、俄に村々へ合力を命じ、そのせつ架かけおかれたもの、と前提して。

「まる二日二た晩は、馬やら兵が西へ西へ越え行かれましたが、てまえどもはまたこれへ呼びつけられ、やい聞け、われらの勢せいが渡りきつたら、すぐさま舟橋を断きり放はなち、一そうの舟も附近に置いてはならんぞとの、ご厳命でございまする」

「む、新田がの」

「いえ、仰おつしやつたのは、ご幕下ばつかのお方で……。すると、おん大将の新田殿は、それを聞いて橋の途中からお戻りになり、たいそうご機嫌のわるいお声で、お侍たちを叱ちッておいでられました」

「叱ちッた？」

「はい。おことばには、敗軍のわれらさえ架かけえた橋を、断きり落したとて何になろう。お

よそ、大敵に向う戦の始めなら、舟橋などは焼いて、背水はいすいの陣を布くという兵略もあるが、敗戦して落ちてゆく今、敵にもやすやす架かけ得られるものを毀こわして行っても益はない。むしろ義貞の小心を見すかされよう。狼狽したといわれても末代までの恥だ。そっくり残しておけ、との御意。わたくしどもへも、しかとお命じで、そのままお立ち去りあつたような次第にござりまする」

「そうか。……川守どもに褒美をやれ」

そして、尊氏はそれから言った。感に打たれている麾下きかの将士を見て。

「さすがは義貞よ。逃げつつも見事な一矢いっしのあいさつを残して行つた。武士はこうありたいもの。彼にかかる鎌倉武士の余香があらうとは思わなかった。尊氏もここでは見事彼に負けたぞ。好敵手、好敵手。いちばい心をひきしめようわい」

途中、さらに軍の強化に努めながら、やがて足利軍は、近江へ達した。近江かしわばら柏原に軍営ぐんえいを張り、年の終りをここにみた。――すでに十二月二十九日であつた。

内裏だいりえんじょう炎上

何を感じるのだろう、瘦せ犬すらも目を光らしてどこかに異常なふうである。ちまたの人間はいうまでもない、都じゆうが日ごろの姿一切を喪失し——春を待つ——そんな年暮景色など見たくとも見られなかった。

敗軍の新田勢が洛内にぞろぞろたどりついて来たのが二十五、六日のこと。それから一日たりと兵馬の東奔西走を見ぬ日はない。足利軍が近江まで迫ったことはたれもみな知っている。けれど洛民の恐怖はそれだけのものではなかった。べつに兵庫、摂津方面からも西国の反官軍が尊氏に呼応し、淀、山崎の口へ攻めのぼって来るとさかんな風説だったのでもある。

「西も、東もか」

「都はどうなる？」

「どうなるものか、都はふくろの中の何とやらじゃ」

「いや、わしらはよ」

「こうなったら、どうしようもあるうか。命一つをかかえて、戦のやむまで、どこぞへじつとかがんでいるほか思案もないわ」

さるほどに——

と、古典はいとかんたんに書いている。

新玉あらたまの年立ち帰れども

内裏だいりには朝拜てうはいもなし

節会せちゑもおこなはれず

京、白河には

家をこぼちて堀に入れ

財を積んでは持ち運ぶ……

庶民は「すわ」とまともや山野へ逃げ込む騒ぎだったのだ。しかも暮正月を跨またいでである。なんの因果でと、嘆きの声は枯れ野や冬山に充ち充ちても、血まなこな武者ばらには、何と無用な生き物の多さよと、かえりみられもしないのか。荷を負ったり手に手をつないで行く老幼が馬蹄にかけられて転ころけまろんでいるなどは、めずらしくない巷ちまたであつた。

明けた年は、建武三年。——だがそれは後世には、北朝側の年号とされ、後には同じ年を、延元えんげん元年とも併称された。

だからその意味で、南北二朝に別れた最初の年だ。

その年の始め。

一月元旦というのに瀬田ノ大橋では戦争の支度だった。いやその防禦工事中も、しばしば敵陣からの奇襲におびえ、どこかではもう不吉な年の前ぶれに似て、魔の声みたいな矢うなりが虚空こくうの冬を引き裂いていた。その配備は、

瀬田方面、三千騎 総大将 千種ノ中将忠顕ただあき、名和伯耆守長年ほうぎのかみ、結城ゆうぎの判官親光

宇治方面、五千騎 楠木左衛門尉正成しやう

淀方面、一万騎 新田右衛門佐義貞

山崎方面、七千騎 脇屋駿河守義助

遊軍さん、山徒さんの僧兵千余人 延暦寺えんりやくじノ僧、道場坊宥覚ゆうかく

ほかに 若干じゃつかんの舟軍がある。――舟軍は琵琶湖上を遊弋ゆうよくしていた。

この兵力と配置でもよくわかるのは、義貞の敗報いたるや、いかに今はと朝廷もあわてたかということである。在京の地方軍はもちろんのこと、公卿指揮者、滝口の兵、叡山の僧兵までをあげて都門の東西にそそぎこみ、

「万が一にも、ここにやぶれなば」

と、廟議びやうぎとしては、じつに稀有けうな即決と、また一大覚悟のもとに、これの布陣となつた経過がありありわかる。何しろ元日、これはただならぬ元日だった。

由来、洛内攻めには、いつも近江路と大津の中間、瀬田川の瀬田ノ大橋、また宇治川が、攻守決戦の境になる。

壬申じんしんノ乱の大海人おおしあまの皇子軍みこ。木曾義仲の寿永じゅえいの都入り。承久じょうきゅうノ乱らんの北条勢と朝廷方がた。

そしてまいど、守備のほうか、そのたび破られていることも例外がない。

という前例もあるので、このたびはと、千種忠顕ただあき、結城判官親光らは、その防禦構築にはあらん限りな力をそそいだ。

瀬田から石山の下へかけ、川へ向つて諸所に櫓やぐらを組み——櫓には出櫓、高櫓の二種があつて——楯たてのうちに弓隊の弓の上手を選抜して揃えた。

もちろん、大橋の橋板はすべて撤去し、橋づめの口には、厳重な鹿垣しかがき。ここには弓隊だけでなく、その後方に長槍隊と歩兵部隊が厚く見える。

そしてなお、川の中には、乱杭らんぐいを打込み、大綱を張りまわし、膳所ぜぜヶ瀬せ、供御くごノ瀬せのあたりまでは水も見えぬほどな流木りゅうぼくだった。すべて敵の渡河にたいする防禦であるのはいうまでもない。

「天野経顕つねあきの軍忠状」に見ても、

正月元日より十一日迄

連日の合戦

警固毎日

高矢櫓たかやぐらにありて

軍忠ぬきに抽んづ

とあり、いかに肉薄戦がむずかしく、遠矢合戦に暮れていたかがわかる。

が、これは正面大手だけのことだった。

——宇治方面では楠木正成の五千騎が、宇治橋きを断り、槇ノ島まき、平等院のあたりに黒煙をあげ、ここの守備は一ぱいものものしく、

魔風たいか、大厦たいかに吹きかけ

宇治平等院びやうどうゐんの宝蔵仏閣

たちまちに焼けうせしこそ

浅ましけれ

と、古典の筆者も古来の文化財あぐたが芥あぐたのよう焼亡されてゆくさまを嘆いている。いやそのような暴状はここだけでなく、石山寺の宝蔵もこのときに破壊され、淀、八幡、

山崎へかけても同様だった。とまれ都門の東西南北、今やぐるりと劍槍の長城だったわけである。

また、ここで視野を大きく、全国的なうごきへも目を注いでみる要がある。

さきに足利方が、直義の名で、諸国へ飛ばしておいた檄の応えが、いまやものをいつて来たかたちで、

五畿、七道、四国九州、全土の朝敵

一時に蜂起すと聞えしかば

朝野肝を消さずといふ事なし

とあるような情勢にもあったので、都はまさに海嘯の中の一樓に似ていたのである。――
――現に、刻々と兵庫、摂津方面からせまって来る四国の細川定禪（足利一族）、山陽、山陰の武族など、みなその呼応で起ったものだった。

だから尊氏には、確信があった。心に期して、あせらなかつたようである。

彼は、大晦日も元日も行軍中にあつた。そして途上、江州の伊岐ノ宮の小城を一昼夜で攻めつづし、前線に着いてからでも、入念に巡察をおこなっていた。しかる後、いよいよ瀬田の攻撃を弟直義と師泰の手にあずけ、自身は中軍の精兵一万余をひきいて宇治へ向

った。

足利方の兵力は、官軍より数倍多かつたようである。

勝てばどつと降兵を加えて強大となり、負くれば一夜にその旗営きえいも痩やせ細こってしまうのが、今の合戦の特徴だった。低い士分、雑兵のあらかたが「命」いのちを一つの投機てきにして、戦場をただ食う職場とも考えていた風潮がひろい底辺にはあつたのだろう。

とまれ、尊氏は敵に数倍する兵を計算に入れて、ひとつの人海戦術に出た。

それは上手な戦法では決してない。坐しての政略には富むが、馬上実戦の奇手などはない彼である。しかし、策はあつた。

その日、七日から八日へかけて。

かねがね、しめしあわせを持っていた足利軍は、瀬田、宇治、大渡、山崎、丹波口、のこらずの前線から一せいに攻撃をおこした。——主力はもちろん尊氏の麾下きかで、その中軍は、八日、大渡をつき破り、同夜、八幡方面やわたまで進出した。

そして、翌九日、

「山崎の口も、細川定禪じょうぜん、赤松円心らの手勢が、かち取ってござりまする」

との伝令をうけたとき、尊氏は口にこそ出さないが、

「もう、しめたもの」

と、思ったような態^{てい}だった。

はじめ、彼は宇治を突破口と考えたが、その手の守りには菊水の旗が見えた。すると、彼は、

「楠木勢だな」

と、すぐ転^{てん}じて、大渡へ移ってしまった。なぜか正成を避けたのである。

もし尊氏がこの守りを突いたら、楠木勢も一敗地にまみれていたかもしれない。なぜなら、瀬田、供^{くご}御^ごノ瀬^せ方面の味方あやうしと聞えたので、正成は麾下^やの矢尾^{やお}ノ別当、志賀右衛門らに八百騎をつけて、加勢^さに割^さいてやったところであり、義貞は淀口、脇屋義助は遠い山崎だったから、とても尊氏の兵力はささえきれなかったにちがいない。

けれどまた、もし楠木へぶつかって行ったら、尊氏軍の死傷もおそらくかず知れなかったことだろう。——尊氏はよくそれを予察^ちしていた。——いや正成を知^ち悉^{しつ}していたのである。彼はまだ心のどこかで正成に惹^ひかれている。

「縁あらば」

と、他日一つの酒を酌^くみ合い、同床異夢^{どうしょういむ}にあらぬ同夢をみることはないと思

つていたのだ。

十日の昼合戦は、伏見、鳥羽、桂川の沿岸など、長い戦線で展開された。——しかし細川定禅、赤松円心らの四国、中国勢は、すでに洛内の一角に入っていた。——義貞の一万余騎は、いくつものに分裂し、日没前、諸所に乱れ立つのが見えた。

「宇治もやぶれた……」

とは、その時刻の声だった。

尊氏の軍は、伏見へ出、このさいまたも、馬淵義綱、田上正氏などの降将とその兵九百人を加えていた。

そして味方の細川定禅、赤松円心のりむら則村の二将と、鳥羽殿とばでんの門外で落ちあつた。つまり東西両軍の連絡を遂げたのだった。

「本望を遂げまいた」

と、円心は言った。この円心も、いぜんは官方であつたが、例の建武恩賞のさい、余りにもひどい冷遇に怒って、いらい国元の播州にひき籠っていた者であつた。

瀬田はひがしの関門だが、都の西の八幡やわた、山崎はもっと重要である。畿内きな、西国街道へ

のどくびなのだ。

尊氏はいつも目先の障害にとらわれない。先のたたかいをたたかって行く。万難を排して、今やこの方面の赤松円心や細川定禅らの西国勢と手をむすび、そして鳥羽伏見から羅生門にわたる都門の動脈を扼してしまったものである。

「洛内の占領も、はや、今夜のうち！」

当然、波濤の軍勢は、逸つていた。が、尊氏は、

「あしたにする」

と、急に、この日の合戦を、ひとまず都の郊外にとどめ、そして、

「もう急ぐことはない。むしろ宇治、大渡、丹波口などに、なお、うごめく敵へそなえて、味方をかためろ」

と、いう令を出した。

停頓は意外だった。麾下の将士には理解できないことである。このへんを彼の戦下手という者はいふのだろう。古典「太平記」「保暦間記」「梅松論」の諸書はその理由を、

この日、十日は厭み日（悪日）なればとて、洛中攻めは翌日にのばす――

として、あえて尊氏の気もちには入っていない。しかしそんな御幣をかつぐ尊氏でなか

つたことは、これまたいうまでもないことである。

血に狂う^{ひきゆう}豺^{ひきゆう}貅^{ひきゆう}数万の大將として、尊氏が慎重でないわけはない。おそらくは、いまや^{どうてん}動^{どうてん}顛^{どうてん}狼^{どうてん}狼^{どうてん}の極にあらう内裏の^{おおみやびと}大宮人^{おおみやびと}たちが——わけても後醍醐のご進退が——彼の胸にも想像されて、

「まず、こよい一夜は、ご猶予を差上げておくべきか」

と、したのがその胸底であつたと思う。

この期^ごにしろ、彼には本心、後醍醐を憎みたてまつる気などは毛頭ないのである。ただし^ご尊氏にとつては当面、まことに困るお人なのだ。退いてもらえばよいのだった。——すでに叡慮としてもお勝目はありますまい。聖断いかなされますや。尊氏、これにて一夜だけはお待ち申し上げましょう——。という無言の表示がその停戦であつたと観る。まさに、その通りで。

洛中は早や死の街に似、どこか戦線の^{ほころ}綻^{ほころ}びから潜入した西国兵が、町屋の裏にひそんで火をつけ出したのが消し手もなく燃えひろがり、煙は二条内裏へも忍び入って、いつになり^{たそが}早い黄昏^{たそが}れが御所一円をおおい出していたのであつた。

「いかにせん？」

との、御評議もまたたくまだった。——主上には叡山へ御落去あるぞ！——と声大きく触れ出された瞬間からの光景といつてはもう一ト方な騒ぎではない。

賢所の神器を、玉体にお添えし、鳳輦へと、お急ぎ立てはしたものの、それをつぐ駕輿丁の者はいず、ぜひなく、衛府の士が前後を担いまいらせる。また、供奉の公卿も、若きはあらかた甲冑弓箭をおびて前線へ出払っていたし——吉田大納言定房が牛車をとばして参じたほか、老殿上十数人、滝口、蔵人の輩など、寒々しいばかりである。——そしてただ多かつたのは、准後の廉子以下、あまたな女御やそれに侍く小女房たちの女人だった。

十日の宵には、瀬田はまだ陥ちていない。

前線の義貞からは、夕方、

「お氣づかいあるな」

と、宮門まで強気な伝令もあつたりしている。にもかかわらず、洛内の危機感は、刻々、不気味さを濃くしていた。玉座をまもる侍臣のあわてふためきも度を過ぎてはいたが、このさいの、

主上、山門へ御動座

の措置は、よくよくなことだった。窮余の急、やむをえなかったともいえようか。

こんな例は、平家都落ちのむかし、木曾義仲の侵入にあたつて、一時、後白河法皇が叡山へ難をお避けになつたあれ以来のことである。しかも後白河のばあいは、源平両勢力の上になお中立的な余地を残しておられたが、こんどはそうでない。——後醍醐はその経過やら綸旨の上からも、御自身、軍の御指揮者たるのかたちで、公卿すらも弓、箭を取つて陣頭に出ていたのだつた。

だからおなじ蒙塵（天子の御避難）でも、今日の恐怖は、往時の比ではない。——賢所（三種ノ神器の移動）を忘れなかったのがやつとであつた。——日ごろ、紫宸、清涼、弘徽殿などになぞらえられていた所の一切の御物——また昼の御座の日の簡、おん仏間の五大尊の御像、后町のきらびやかな御簾ごとの調度なども——すべてそのままお立退きのほかなかつた。

それから、まもなく。

これらの巨大な洞窟の宝財はチラチラと煙のなかに静かなそして妖しいばかり美しい火を持ち出していた。飛び火か。兵の放火か。バチバチとしばらくは火ハゼの音であつたが、やがて天に冲す炎の柱になり出した。——その中天には、寒烈一月十日の、月があつた。

ここわづか天下一統して

朝恩にほこりし月卿雲客

さしたる事もなきに

武具もたしなみ

弓馬を好みて

朝儀、道に違ひ

礼法、則に背きしなど

いつかは

かかる不思議の

出来るべき前表なりけん

とは、古典にみえる浩嘆であるが——この炎をうしろに、叡山東坂本へと落ち行つた鳳輦の供奉の人々にしても、それぞれの感や反省の傷みに、足も心もそぞろであつたに違ひあるまい。

が、かくと知つて、途中からは、追い追いと、お供の人影なども増していた。

阿蘇ノ大宮司惟時、出雲の宇佐兵衛ノ尉助景の手の者が、まつさきに來て、ご警固に

付き、新田の諸侍しよぎむらい、千葉、宇都宮、そのほか戦線から脱落していた軍兵なども、北白川から志賀越えへかけては、ぞくぞく、おあとを慕つて来る。

すると、このうちにあつた結城太田ゆうきおおたノ大夫判官たゆうのほうがん親光ちかみつは、なに思ったか、

「いや君のお供をして叡山へ行くよりは」

と、急に独り言ひとごちして、鳳輦みこしのおそばへ走つてゆき、あたりの公卿へこう告げた。

「少々、思い立つたことがござりますゆえ、それがし一人は、ここにておいとま申しあげます。主上へは、よそながら後日にでもよろしく御奏聞ごそうもんおきを」

と、理由もいわずに、元の道へ蹠々ともどつてしまった。——親光ほどな侍さえ臆病風か？ と口惜しがらぬ者はなかつた。

瀬田口は依然としてゐる。諸所の守りで官軍は破れたが、ここのみは頑強だった。

「師泰もろやす」

と、直義ただよしはいま呼んだ。猛攻まる二昼夜の号令に喉のどもつぶれた声である。

副将こうの高ノ師泰も疲れきつた姿だった。すぐそれへ来たが、直義が黙然とただ戦線をにらんでいるので、彼も腕ぐみを共にしばらく側に突つ立っていた。

戦線は瀬田川の川床^{かわどこ}だった。上流^{かみ}は石山寺辺りから湖水口へかけてまで、折々にわあツと喊^{かんせい}声をあげている。

だがまだ、一騎も対岸へ駆け渡つてはいない。

無数な人馬の屍^{かばね}は、河中の張り縄^{らんぐい}や乱杭^{らんぐい}にひっかかったまま水に洗われており、橋板のない大橋の上にも矢に仆れた味方の死者が、あえなく橋ゲタに伏したり、ブラ下がつて、水面に落ちかかっている。――それさえ収容できぬほど、対岸の高矢櫓^{たかやぐら}や出矢櫓^{でやぐら}の弓陣は、進み出る人影さえ見れば、どっと、矢の乱射を集中してくるのだった。

「師泰。どうかならんか。何かよい策はないか、何か……」

「さあ。死傷もかぞえきれません。さまざま、手を変えてみるものの」

「くりかえしだな」

「ただ累々^{るる}の犠牲を河に埋めるばかりで」

「だが怯^{ひる}んでなどいられるか。すでに兄者^{あにじや}の軍は大渡を破り、きのうは八幡、山崎まで進んだとある。直義何をしているのだとお叱りが聞えるようだ」

「師泰とて笑われ者、齒ガミを禁じえませぬが、これ以上の死者を出すのもどうかと考えられます。ま、明朝ともなれば」

「明朝、何が？」

「道譽の船手が、湖上、遅くもこれへ着きましよう」

「その佐々木は、疾とくにこの瀬田攻めに参加しておるはずの者。またも日和見ひよりみかもしれん。元々、風上にはおけぬやつだ。あてにはするな」

先に道譽が味方を救った二度寝返りの芸などは、いかに大きな軍功であろうと、直義には内心、軽蔑の感しか残されていない。尊氏はとかく珍重しているが、もともと彼には性の合わない男なのだ。苦戦、このさいにおいてはなおさらだった。

ところがである。十二日の未明だった。

まだほの暗い湖上を、数十の船影が、瀬田の岸へ寄つて来た。佐々木勢であつたのだ。

道譽は、直義に会うとすぐ言った、

「苦戦もさぞと、心はせいでしたが、船手の準備に日がかかり、途中敵の舟陣の目をかすめるなども容易でなく、思わぬ日時を費やしました」と。

「いや、むりもない」

直義は怒りもわすれた。正直、百倍の力を得たよろこびだった。がしかし、そのすぐ次に、道譽は容易ならぬ情報を彼に告げた。——それには、船手の加勢をえた直義の強味も、

差引き、大きな狼狽を余さずにいられた。かつた。

何事かといえど。

かねがね、予測はされていたことだが、奥州の北畠顯家あきいえが、北の精兵七千騎をひきつれ、長途、王軍をたすけるべく疾風迅雷しつふうじんらいのように西下して、はや不破を越え、今日にも、近江愛知川えちがわには着くであろうとのことだった。

「なに。——北畠顯家の奥州軍が、今日にも愛知川へ着くというのか」

足の裏から地ひびきでも聞いたように、直義は恐れ慌てた。予期はしていたが、こう迅速はや！ とは想像外であつたらしい。

「もしその大敵を背後うしろにうけ、ここもまだ陥ちぬとあつたら一大事ぞ」

と、道誉と共に作戦をねツた。そして遮二無二しゃむむ、今日中にはと、水陸から瀬田の敵をおめきつつんだ。

この湖上奇襲はみごと功をそうし、直義と道誉の兵が、やがて粟津あわづの岸を占領してからは、官軍も腹背ふくはいの脅威にあきらかな苦悶をみせはじめ——またまもなく、正面の高ノ師こうも泰も、瀬田の一角を突破していた。

柵、櫓、幕、陣小屋。たちまちそこは火の海となり、官軍はぞくぞく大津、坂本方面へ

と退却し出した。しかしこのむりな突破に払った足利方の損害は寡少でない。直義が行くところ、その戦場はいつも余りに烈しく余りにも血なまぐさい。

時に、この十一日。

一方の尊氏軍は都の西から入洛して、洞院ノ公賢の空館を、仮の本営とさだめていた。

同日、こんな事件があつた。

尊氏もまだそこへ床几をさだめたばかりの混雑最中に、

「申し上げます。——結城太田ノ判官親光が降参の由を申して、そのおとりなしを、かねて親しい大友左近将監貞載まで願い出ておりますが、いかがいたしましたものかと、大友よりの問い合せにござりますか」

と、営門の将から伺いを立てて来た。

折ふし——降参ノ輩、注スルニ暇アラズ——の状だったが、親光といえ、東北の大族結城宗広の子である。またとない者だ。尊氏はすぐ大友に伴れてまいるようにと、いいつけた。

その伝命で、大友左近将監は、すぐ親光をつれて陣所を出た。そして樋口東ノ洞院

の小川べりづたいに来て土橋を越え渡ると、大友が言った。

「はや、そこが御門前。法なればお腰の刀ものをお預かり申したい」

「こころえた」

と、親光は太刀を外し、鞘さやの鯉口を左に持つて差出しながら、

「年来、そこもととは、武士のおつきあいをして来たが、よも、こんな降参のお扱いを願おうとは思わなかつたな」

「まったくじや。したが名よりも実だ、今の世は」

「げに、そこもとは氣転がよいな。伊豆三島の合戦に官軍が破れたのは、まったく御邊と佐々木が寝返りのためであつたと聞く。——おおッ、人非人！ よくも戦友を売り、君恩を裏切ツたなッ」

「あッ！」

と、大友は額ひたいから左の目へ抜き打ちに浴びせられた半身を朱あけにし、本営内へ逃げこんで行く。——親光は、阿修羅あしゅらとなり——逆賊尊氏にも見参げんさんせん！ 尊氏にも一ト太刀！

——とつづいて門へ駆け入ったが、たちまち大勢の白刃に囲まれ無残な死をとげてしまった。

大友もまた、翌る日、息がたえた。この騒動は日常血ぐさい戦陣での出来事ながら、余りに無節操な降将やら時の人心をいたく衝撃したようだった。——また前夜、後醍醐に供^ぐ奉^ぶしていた叡山落ちの人々も、親光が列を脱けたその折の思いちがい^{ざんき}を、あとではいたく慚愧したとやら、これも当時の評判であつたという。

小公子

四明^{しみよう}ヶ岳^{たけ}の樹^{じゅ}氷^{ひよう}、湖水を研^とぐ北風。叡山東坂本の行宮^{あんぐう}は、寒烈、そんな一語ではつくせない。言語に絶する寒さだった。また敗報に次ぐ敗報のうえに、

主上はすでに

大宮の彼岸^{ひがん}所に御座^{ぎよざ}あれど

未だ参^{いま}ずる大衆一人もなし

さては

衆徒も心を変じぬるや……

と、あるのを見ても、この日まだ、山門の意向さえも、はつきりしていなかった形勢で

あつたとみえる。

おそらくは、山門の僉議せんぎも、

お味方か、中立か

の二論にわかれていたのだろう。尊氏軍の洛中占領も、直義の瀬田陥落も、山上にはわかつていたはずである。いやそこから手をかざせば、洛中洛外の兵火は、一望に見えもする。

「もし叡山が、足利がたへ傾いたら？」

これを思うと、供奉ぐぶの公卿たちは、食べる物も今朝はのどに通らなかった。

主上以下、皇室の大御家族は、日吉山王ひえさんのう二十一社の「彼岸所ひがんしよ」とよぶ空院に、それぞれ一夜をやつと凌しのがれたが、玉座のおかれた一院でさえ、氷の床、氷柱つららの御簾みす、吹き騒ぐ枯こ葉ようのほかは参さんずる人もなかったらしい。

まさに、後醍醐御一生のうちでも、この日はもつとも険しい、そして、あやうい御浮沈の刻々だった。

が、ひる頃。

はじめて、藤本坊の英憲えいけんやまた円宗院の法印じようしゆ定宗じようしゆらが、五百余人の堂衆を後しりえに

つれて、大床の下に来て伏し、

「まずは三千の衆徒、臨幸を厭んじたてまつるなどの者は、一人もあるまじきにて候う。

一山同心、ふた心はあらじと、ご叡慮を安んぜられて、しかるびよう存じあげまする」

と、奏した。

さらに、南岸坊の僧都、道場坊の宥覚なども、千余の僧兵をひきいて行宮をかため

にかかった。また、みかどに隨身して来た将士のためには、坂本、比叡辻の坊々や民家の

家々に札を打って宿所にそなえ、軍需として、延暦寺からは錢貨六万貫、米穀七千石を提

供した。

山上、十禅寺の大鐘は、はやたえまなく鳴りつづけ、ついにここも戦場と化して来た。

およそ戦雲のつばさはどんな法の山だろうが避けてはいない。——つい嶺の南、大津の

三井寺は、由来、叡山とは何事につけても反目していた。幾世にわたって対峙してきた宗

門と宗門だった。そこへ、尊氏の麾下、細川定禅の軍が、瀬田の直義に代って、今朝

から入った。——法城を軍城として、坂本へ襲せる氣勢をみせているという。叡山もまた、

当然に、城塞化した。

けれど、よく幾日を、ここにささえられるだろうか。

千種、楠木、新田、名和、それらの味方とこの行宮あんぐうとはほとんど連絡もとれていない。寸断され、包囲され、随所で苦戦におちていた。——しかるに尊氏軍は刻々と叡山一点にその重包囲を圧縮しつつある状だった。東坂本の下からも、西坂本の方面からも。

「……ああ、潮の中うしおよ」

行宮あんぐうの憂いは濃い。ただ望みは、奥州軍北畠顕家あきいえの援軍が、まに合うか、まに合わぬか、それただ一つでしかなかった。

奥州軍——

ここでその動きを見るには、どうしてもまず北畠顕家あきいえの人とその立場とに一章を割さいておかねばなるまい。

こんどの、尊氏討伐の大命が発せられたさい——あの去年十一月二十日のころ——朝廷ではそれと同時に、遠い地の陸奥守むつのかみ顕家へたいしても、

直タダチニ発向セヨ

の檄げきを飛ばし、

郷軍、鎮台兵ノ全力ヲ挙ゲテ、北方ヨリ衝ツイテ上ノボレ

と逐次、朝命を急達していた。

しかし、当時としては何しろたいへんな遠隔だった。

鎮守府の柵^{さく}、多賀城のあった地は、いまの宮城県宮城郡多賀城町市川、岩切駅の東一里で、仙台から松島へ行く塩釜街道の途中にあたる小山である。

延喜^{えんぎ}年間の碑^ひというその多賀城碑によれば、

京ヲ去ル、一千五百里

と見え——もちろんこれは古里^{こり}の六町を一里とかぞえる大ざっぱな里程ではあるが——歩いての旅でも、片道二十五、六日といわれていた。

「すわ、御国^{みくに}の大事」

顯家は、勅を拝すなりその遠さにまず胸がつかえた。

鎌倉までとしても半月の余はかかる。彼は父の親房^{ちかふさ}にはかつて、地方政^{まんどころ}所ノ執事、評定所所員、侍所の面々、寺社、安堵^{あんど}奉行までを加えて、国司の議場で大評議をひらいた。そしてその場ですぐ宣言した。

「案じられる！ このたびの大乱こそ、御国のありかたを決するものだ！ 一日のまも猶豫はならぬ。わしは今日にも多賀城を立つ。——家の子郎党の糾合^{きゆうごう}などに手間取るも

のは、急いであとより追ッかけて来い。――柵さくの留守には、南部師行もろゆき、冷泉家行れいぜいらを残す。――あとはすべてわしにつづけ。時を逸いつして、馳はせおくれたら一代の不覚だろうぞ」

顕家は時に十八歳だった。

おとし十六の秋に、奥州鎮定の大任を負い、幼い義良親王のりながを上のに、父の親房や結城宗広ゆうぎを後見として、この地へくだつて来ていたのである。

陸羽の奥はまだ蝦夷地えぞちのままといつてよい。乱妨らんぼう、反乱、同族の鬭いなど、絶えまもない。――顕家あきいえは二年の在任ですつかり戦陣の起居に馴れた。根は根からの大宮人おおみやびと、任

は国司という文官なのだが、いつか純粹花のようなこの童貞の人は、自身を馬上の將軍にきたえていた。

後見の父親房は、あの「神皇正統記」の著者ちよしゃでもあった。それでもわかるように身を持じすことみずからきびしく、神国、皇室、万世一系を緯いとする主義のほかには生きがいもないかのような人である。顕家はこの人の鑄型いがたに鑄られた理想の子として親の目にも映うつっていた。

そのむかし、この顕家もまだ十四歳の左中將の若者であつたころ、北山殿どのの行幸みゆきに、花の御宴ぎよえんに陪ばいして、陵王りようおうの舞を舞つたことがある。

よほどその紅顔可憐な姿がお目にのこつたものとみえ、みかどはそのごもよく「あの、花陵王はどうしているの？」と父の親房へままおたずねがあったりした。——その紅顔の子頭家が、今日の国難に赴く奥州軍の総帥だった。思わぬ任地へ来て二年、北国の朔風に研がれた馬上の子は、その生涯の方向を、いまは誰かに決定づけられていた。ともあれ、どう急いでも頭家がその鎮守地——陸前多賀城ノ柵——を発したのは十二月半ば頃であつたろう。

みちのくの山はすべてまっ白だった。行軍は明け暮れ吹雪になやまされた。

柵の留守も要る。初め兵は千にも足りぬ編成だったので、その長途をあやぶまれたが、頭家は、

「行く行く、途中で参陣の約ある者三、四千はかぞえられる。いまは兵力よりも一日でも早く立つほうが、はるか大事ぞ」

と、言つて出た。いかに彼の純真な意氣が行くてを急いでいたかわかる。

軍中には、父親房も交じつてゐる。その親房は、ことし八歳の義良親王を綿帽子にくるんで馬の鞍ツボに抱いていた。——しよせん、輿では道もはかどらず、駕輿丁の者も、雪の歩行にたえられぬからだつた。

旗は、錦の旗の一旒^{りゆう}をかざし、ほかは弓まで袋にしていた。弓弦^{ゆづる}なども張ったままでおくとピンと凍ッてまま切れてしまう。また不意な雪中合戦が起るとしても、こんな大雪では矢バネも用をなすまいかと思われた。

が、顕家の南下を、

——やらじ

と、さまたげたのは、途上の風雪だけではない。久慈郡の佐竹ノ楯^{たて}。亘理郡の相馬一族。またさきに尊氏から、奥州管^{かんりよう}領の名で東北に派遣^{はけん}されていた斯波家長の党などが、「親王を奪い、顕家、親房を討つて取れ」

と、あらゆる妨害と、またしばしばの奇襲に出た。

しかしまた、顕家の軍も、遠からず参会の将を加えて、威風堂々をなしてきた。そのおもなる隊には、伊達^{だて}、南部、結城などの大族があり、やがて白河を越え、雪もうすらぐと、上野^{こうずけ}地方から新田与党^{よとう}の参陣もみえて、兵は五千余騎に達していた。

だが、予想以上な日かずを費やされたのはぜひもない。

何しろ斯波家長らの追躡^{ついじよう}（尾行してくる攻撃）も執拗^{しつよう}なので、鎌倉を横に見捨て、ひたむき、東海道を急いだが、ついにあの——箱根竹ノ下合戦には——間に合わなかった。

もし、それに間に合っていたなら、足柄^{あしがら}山上から黄瀬川谷へかけ、尊氏の軍はそのとき限り時代の墳墓に埋没され去っていたことであつたろう。——時運の機微、寸秒の作用のふしぎ、それらをあとでかえりみれば、人意人力のほかにも、また一つの、天意みたいなものがあるのを何としても否みきれない。

こうして、顕家の奥州軍は、年の瀬も正月もなく急いでいたが、都へ近づくほど、官軍方の聞えは悲風ばかりで、足利方の優勢は断然たるものがあり、一夜の宿陣も気が気ではなく、

みかどは如何^{いかに}なされし？

都の姿もどうなつたか

と、奥州出発いらい、およそ二十八、九日めに、やつと近江愛知川^{えちがわ}の湖畔に着いた。いや着くやいな、戦旅の疲れも、鎧^{よろい}虱^{じらみ}や泥土を払う暇^{いとま}もなく、

「船はないか。叡山はここから見えるが、瀬田、大津は敵の陣地だ。一刻も早く、これを彼方の行宮へ知らせたいが」

と、またはたとその連絡には当惑していた。

船集めは容易でない。

まして敵地だ。数千の兵馬が着いた日すぐ湖上を渡ったなどは考えられぬことである。おそらくは、頭家が着くいぜんに、先発隊が来てすでに幾日も前から愛知川口に手配をしていたものだろう。

いやそれにしても、湖東や湖南に住む水上生活者の協力がなければできないことだった。古来、堅田や焼津^{やいづ}には、叡山勢力下の船持ちがたくさんに部落^{やす}していて「堅田湖族」などと世によばれていたし、同様な水辺部族は、湖南の野洲川や能登川口にもあまたいたものにちがいない。——おもうに頭家は、後日の報賞を約して、彼らのかくしている「隠し船」を集めさせるに成功したものではないか。

とまれ、奥州軍七千は、湖東と堅田の間を幾往復もくりかえして、十三日から十四、十五の三日間にわたり全軍琵琶湖を船で渡った。

このさい、陸路では、瀬田ノ大橋が落ちているし、また足利方の占領区域ではあり、どうしても、奥州軍は一兵のこらず水路によったものと見るしかない。

「おお、援軍が見えたぞ！ 援軍が着いた！」

「奥州の猛卒猛将」

「しかも七千が」

「万歳」

「万歳っ」

東坂本はまるで狂気のあらしだった。山門の大鐘も全山の衆徒へ、ごんごんと告げ鳴らしている。——これはすでに前日から分つていたことだが、日吉彼岸所ひえひがんしょにおける行宮あんぐうのあたりの色めきは一ぺんに春が来たような騒ぎに見える。公卿侍臣たちは、抱きあつて泣いた。或る者は、展望のきく所へ駈けのぼつて、堅田ノ浜から整然と進んで来る黒い長途からの軍列へ手を振っていた。わけて、俄に明るさの流れていたのは、准后じゆんごうの一院やら、女御小女房にょごこにようぼうなどの密ひそまつていた避難所だった。そうしたうちに、麓からは、

「顕家、参内」

の由あんぐうが行宮へ聞えて来た。

お待ちかねだった。生なまやさしいお待ちようではない。後醍醐はここの十数日の憂色も初めて、何処かにほころばせて、

「来たか。——あの花陵王かりようおうがやって来たか」

と、お口をついて仰つしやつたほどだった。

花陵王とは、かつて、顕家が十四のとき、花の御宴に陵王を舞ってお目にとまつたときからの、帝が彼をよぶ愛称だった。——その顕家は十八となり、花の將軍となつて、お目の前にぬかずいていた。後醍醐は彼の援軍をえて、再生のお氣もちでもあつたが、あの小陵王が、こんなけなげな者になつたかというご感慨なども入りまじり、あらゆるおことばで、顕家の労をねぎらわれた。

「……………」

顕家は感泣していた。かぞえ年の十八はまだ年少な香をもっている。感情の琴線は純で一途だった。情に極まると子供みたいな咽びを洩らす。

父親房は、やがて親王にお添いして、准后の院へ伺候して行つた。——が、顕家はなお御前にのこつて、宵のころまで御酒を賜わり、その夜は行宮の廊ノ床に、鎧も解かず、宿直寝していた。ここのおよろこびもただならぬ。しかし、当夜も麓は合戦の火の手やら地獄を思わす人間のおめきであつた。

まだらな残雪に見える。十四日の月のこぼれた。

顕家は綿のごとく疲れていたのにさてなかなか眠れなかった。——山風はつよく、麓では遠い兵馬の喧騒が海鳴りに似、夜じゅう、何か事ありげだった。トロとしかけては本能

的にすぐ筋肉が目をさます。

それに吹きさらしな行宮の外廊は、氷に坐しているようだった。だが、これは彼が求めてしていた宿直とのいだった。――宵に、親しく御酒をいただいたとき、たまたま後醍醐のおくちから、

「顕家、覚えておるか」

と、元弘元年の北山御遊ぎょゆうのおはなしが出たのである。その平和な一日の楽しさ、尊さ。顕家にも忘れられない。

それで彼は北山殿でも花の終夜よすがら、君に宿直とのいしたことなども思い出して、あす知れぬ戦陣の身、これがお名残りになろうもしれずと、独り今夜をここに懐かしんでいたのだった。……するうちに、いつか彼は、長途千里の疲れやらここに着いた安心も出て、眠るともなく過去層の幻影の中にふと居眠っていた……

――あれは春の三月やよいで、

花を見ればや

の北山行幸みゆきだった。

中宮を初め、女院の鏡子や瑛子えいこの君なども御一しよであった。みかどは寝殿しんでんの階ノ間はし

にお茵しとねをおかれ、階はしの東に、二条ノ道平、堀河ノ大納言、春宮とうぐうノ大夫公宗きんむね、侍従ノ中納言公明きんめい、御子左みこひだりノ為定などたくさんな衣冠が居ながれていた。

御遊ぎゆうは終日ひねもすにおよび。

やがて、樂所がくその御興ごきようには、右大臣兼かね季すえの琵琶、権ノ大夫冬信の笛、源中納言具行ともゆきの笙しょう、治部きよノ卿のひちりき、琴は宰相ノ公春きんはるなど秘曲をこらした。

なお、それにもまさる聞き物は、女藏人にょのくらうどノ高砂、播磨はりまの内侍ないしたち、あまたな女人の合奏だった。そのころ中務なかつかさの宮も、おん直衣のうしに太刀姿で見えられ、御隨身ども一つに、舞謡まいうたの手拍子などに興じ入られたと、この日のさまは「増鏡」の「むら時雨の巻」にも眼まのあたり目に見るように描かれている――

暮れかかるほどに

花の木間このま、夕日花やかに移ろひて、陵王りやうわう（扮装せる当年十四歳の顕家）のかがやき出でたるは、えもいはず、おもしろし。

そのほど

うへ（後醍醐）にも、御引直衣おんひきなほしにて、椅子いすにつかせ給ひて、御笛を吹かせ給ふ。――宰相ノ中将顕家あきいへ、陵王の入綾いりあやを、いみじう尽して罷まかつるを、召返して、前さきノ関白

殿、御衣とりてかづけ給ふ。

紅梅の上は着、二あるの衣なり。左の肩にかけて、いささか一曲舞ひて罷かん出ぬ。
右の大臣、太鼓打ち給ふ……

「ああ、夢よ」

顕家は目醒めた。

しかし、太鼓は夢でない。何が起つたのか。とうとうと麓で陣太鼓が鳴っている。

あの君、この公卿。夢の中の人にしてなお今日も生きている人が何人あるだろうか。顕家の臉には、一瞬、儚い花びらが、水の上の花屑のように流れ去った。

「やつ？ 敵の襲来か」

あたりは急に騒然とし、坂本、唐崎の遠くにまで、潮のようななどよめきや飛ぶ火が見えた。

夜すがらな山下のあらしは、明けてみれば、それも味方の吉事とわかった。

洛内のすみに追いこまれていた新田義貞の手が、敵中突破に成功して、やつと東坂本へたどり着いて来たものだつた。

また。宇治の手の楠木も、千種、脇屋、名和などもそれいぜんにみな行宮の守りに返

つており——これに奥州軍の来援もみたこの朝の官軍は、まったく生色を新たに、
 「いまは時措^おくべきでない。われから攻勢に転じ、まず三井寺の賊軍を殲^{せんめつ}滅して後、尊
 氏、直義を洛中に囲み、このたびこそは、その首級をあげねばならん」

と、義貞は衆に豪語していた。その日の評定においてである。

顕家も加わっていた。

「……ですが」と、彼は年少なので、いと控え目に、

「われら、千五百里の道（古里の数）を昼夜なく馳^はせのぼって来たみちのくの兵馬は何ぶんにも疲れはてております。せめて一日は休息させてやりたいと思いますが」

「才才花の將軍北畠殿よな」と、義貞の総大将ぶりも、その人へは眸^{なまこ}を和めて「ごもつともだ。途中風雪の御難儀だけでもずいぶんえらかったことでおわそう。……したが、長途を来た兵馬というものは、生^{なま}じ一兩日休ませると、かえって骨がゆるんで物の役にはたたぬものだ。いッそ息を抜かせぬにかぎる。——北畠どの、それが用兵のこつというものです。おわかりかの」

と、訓^{おし}えるような口調だった。

顕家は赤面して、

「よくわかりました」

といったきりで黙った。次いで諸將の発言もあったが、多くは義貞の意向ですすめられ、みかどのご裁可をみるや、ただちに大規模な作戦活動に移っていた。

おんじようじ
園城寺、

すなわち三井寺の炎上を見たのはこの日のことである。この正月十六日合戦は、大津合戦とも当時呼ばれた激戦だった。

「しまった」

と、尊氏方の細川定禅は、すぐ洛中の尊氏、直義の許へ、火急に！と援軍を求めているに相違ない。

さきごろから尊氏の命で、定禅の軍は、ここを足場に、行宮あんぐうのおかれてある叡山攻めをしきりに策していたのである。反叡山の三井寺大衆一千余も、もちろんそれを援けていた。

が、叡山は嶮だし、伝教以来のゆゆしい御山みやまでもあるとして、尊氏がその攻略には大事をとらせていたことが、かえって、今日の遅れであった。義貞の猛攻撃がツケ入る好機となつてゐる。

義貞は懲こりていた。

さきの箱根、足柄あしがらの苦杯を彼は忘れ難い。あのときの戦略的な「読ミ」の不足は大將として恥ずべきだった。だから今はその逆に出た急襲といえなくもない。

はや三井寺には黒煙があがつている。——一番、千葉ノ介たかたね高胤、二番、北畠顕家、三番、結城宗広。四番、伊達と信夫しのぶの連合勢。——ほか楠木や名和の隊も突進してゆき、攻守入りみだれて、炎の下たたかい半日余、たそがれにはもうそこは無残な火塵かじんの広場だった。そして山科から京方面へ黒々と足利兵の逃げなだれが続くばかりで、ついに尊氏からの援軍は見なかった。

第五列

洛内はさつそく兵糧に欠乏していた。

首都占領の優位も、大軍勢も、その点では、無条件に樂觀してはいられなかった。

「円心。播磨船はりまづねはまだか。糧米輸送の見込みはどうだの？」

尊氏は、赤松円心を見るたびにこう訊きかぬ日はない。

昨今、山陽道は杜絶とぜつしていた。楠木の別動隊が淀の水路や河内、摂津口をさまたげてい

るためだという。——先に細川定禪の軍を三井寺へやっておいたのも、近江口の糧道抑えおさが一つの目的だったのだが、瀬田ノ大橋は破壊され、湖上の輸送はなおまならない。そしていまやこの焦土の洛中なのだ。日々数万の兵が糞するほどの食糧が残されているはずもなく、

「はて、負ければさんざん、勝つてもこの餓鬼のすがた。とかく、戦とは、難しいことがいろいろ起るものだ」

と、尊氏はつらつら痛感していた。——それでも数万の兵が何とか食っているからだつた。そのかわりあらゆる軍の悪に目をつぶっていなければならないのである。彼にはそれが自分の悪行みたいにつらく見えた。

そして彼のあたまは、朝夕、本陣の床几の前に据えられる敵将の首を見るなどよりも、どうしてもほかへ熱意をひかれていた。わけていま、彼が求めていたのは、性急な戦果ではなかった。その戦果を確実なものにする戦争名分であった。

「わからんか。お行方は？」

今日も尊氏は、つい司令部の貴重な一刻を、その詮議せんぎに、過すごごしてしまつた形だった。彼が求めるものの捜査の主任は、例により一色右馬介が命ぜられていた。右馬介はあの

雲水姿を便衣べんいとして、手下も使い、ここ数日それに奔命ほんめいしていたが、

「なんとしても、お一ト方すら分りませぬ。これ以上は叡山にでも登ってみぬことには」と、毎度のむなしい復命をまたくりかえしていた。

「ではやはり……」と、尊氏も今は半ばあきらめ顔に。

「持明院統じみょういんとうの後伏見ごふしみ、花園の二法皇から新院（先帝、光厳）の君まで、すべて過日の内裏落去のさい、共に叡山の上へ、いやおうなしにお座所変えを強しいられて行ったものと考えられないか」

「必定ひつじょうは」

すけ 介も、さじ投げ気味で。

「それに相違さぐわいございますまい。およそ御避難ありそうな先は、くまなくお捜し申しあげましたこと。……が、なお、望みはないでもございませぬ」

「さはいえ、叡山では、近づきまいらせる手もあるまい」

「いえ。持明院統の臣で、去年こぞの騒動、西園寺公宗きんむね（北山殿）の一件にからみ、以来、剃髪して寺にかくれている公卿がありますそうな」

「たれか」

「日野資名卿すけなきようです」

「日野？」

「はい。むかし、佐渡ヶ島の配所で、あえなく亡くなられた資朝卿すけともの弟御。てまえとも、まんざら縁なきお方ではありません」

「それは絶好なお取次だ。資名どのを捜し出せ。資名を介かいして、持明院統の院宣いんせんを請こおう。——軍はこいくさこまで勝つてきたが、院宣を持たねば、遂にさいごの実みは結ぶまい。その者ならば、居所は分っているのか」

「いえ、まだ……」と、介は首を振って。「これから捜すわけですが、しかし、手がかりもないではございませぬ」

「はやくいたせ。——もはや今日の戦いは、足利と新田のいくさとは見せようがない。この尊氏は朝敵とみられておる。我に名分がないのは、軍に旗がないのにひとしい。——大きな弱みだ。一日も早く、持明院統の院宣を請こい奉こつて逆軍でない証しるしを示さぬことには」

「は。きつと、急ぎまする」

「して。その日野資名の居どころを、どこに捜すの？」

「戦前ですが、仁和寺の尼長屋に、佐渡で亡くなられた資朝卿すけともきようの後家の君が隠れ住ん

でございました」

「む。資名には、あによめ 嫂にあたるお人だな」

「そうです。その後家君ぎみの許に、ご存知の、小右京の君も一つに身をよせていましたゆえ」

「おおあの、小右京か」

「おそらくはこの戦乱で、尼長屋の人々もどこぞへ散り去ったかもわかりません。……けれども仁和寺のあたりへ行けば、知れぬことはございます。また資朝卿の後家ぎみに会いさえすれば、しぜん資名どのの居る所も分ろうかとも存じられます」

はしなく、小右京の名を聞いて、尊氏は、この大きな世の波濤に会ってその姿も見せなくしている無数な弱き者——磯べの貝殻のような力なきもの——めしい 盲の覚一やら草心尼などの安否もふつと思ひ出されていた。

が、そのとき、陣外は急に騒然としていた。

「黒煙が望まれる！」

「園城寺だ、三井寺の方ではないか」

尊氏は、さすがすぐ床几を立て、さつと陣幕とばりを出て行ったが、また戻って来て。

「すけ 介」

「はっ」

「いくさの勝敗はまだいずれともわからん。しかしそちに命じておいたことは目前の一勝一敗にかかわらぬ大事中の大事だ。はやくそちはそちの使命に向つて吉報を持つて来い」

「では、後刻また」

追われるように右馬介は笠をかぶつて巷へ出て行つた。

その巷は、狂奔する兵馬以外には、ただの生業のかけらもなかった。——三井寺の味方危うし——の聲が高い。山科、四の宮あたりには、高ノ師泰や石堂、仁木などの味方が陣していると聞いていた洛中兵は、

「なあに、大丈夫さ」

と、尊氏の本陣とにらみ合せてたかをくくつていたが、たそがれ近くから模様は妙に陰しく変り出していた。

尊氏の陣営内へ入つて行つた直義や今川範国は、いつまでもその幕舎から姿をみせず、やがて、外に現われた直義は、何か、兄とまた激論でも交わしたらしく憤然と唇をかんでいた。そして俄に鞍馬口にあつた自陣を三条河原へすすめたが、すでに三井寺から敗れ落ちて来た衆徒やら細川兵は、さんざんな態で、粟田口のへんに吹き溜められていた。

「後手だ。ざまはない！」

直義はくやしがつた。

「またしても、兄者の念入りが、敵に虚を突かせたわ。せつかく勝っていた戦をよ。三井寺はもう奪り返せまい！」

後手を取った。

と、直義が切齒扼腕したのもむりでない。

たしかにわずかな時間差だった。洛中の足利方は、みるみるうちに、その優位を逆転されて、苦しい守勢を余儀なくされた。

だが、立場をかえていえば、新田勢を中心とする官軍方のこの迅速な巻きかえしは、まったく義貞の捨て身な勇が人の予想をこえていたもので——彼は箱根、足柄で舐めた不覚な教訓をここに生かし——敵の橋頭堡ともいえる三井寺を攻めつぶすやいな、まだその炎もさかんうちに、

「この勢いで、洛中へ突きすすめ！」

と、はやくも次の段階へ指揮を振るっていたものだった。

そして味方一同の勝ち誇りにも、

「まだ、早い」

と、勝^{かちどき}鬨も揚げさせていなかったほどなのである。

が、諸軍はとにかく、北畠顯家の奥州勢は、ここの行宮^{あんぐう}に着いてからさえ、休息なしに参加していた長途の兵なので、

「余りにも……」

と、その疲労を思いやる声もあった。けれど義貞は、

「いや、ここで弛^{ゆる}むより、洛中の一カ所を占領した後、ゆるりと草枕に休むがいい。逢坂越えはあと一気ぞ」

と、耳もかすことではなかった。またすでに暮^{ぼしよく}色の頃なので、兵に腰^{こしがて}兵糧を撰^とらせようとする諸将もあつたが、

「すべて次のさしずを待て。もし飯を食つてなどいる間に、洛中の尊氏、直義が大挙してこれへ来たら、三井寺の一勝も、またたちどころに水の泡となる。この勝ちを、勝ちとさだめるまで、少々我慢させい」

と、これをすら無視して、全軍すぐ前進に移っていた。だからその迅^{はや}さには、山科^{やましな}にいた高^{こう}ノ師^{もろやす}泰の一陣さえ、ひとたまりなく一掃^{いつそう}されてしまい、三井寺の崩れの中へ、

さらに敗走兵を大きく加えて、ごった返しに、三条口までの坂道を、黒い流れが、逃げおめいて行つた。

「保たもつッ、瓜うりゅうたもつ生保つッ」

と、義貞はその追撃に躍り逸はッやっている馬上から後ろを見て――

「瓜生の勢せいはちよつと待て。そちの隊は何人いる？」

「百五十人がやや欠けました。およそ百二、三十人、あとに駈けつづいております」

「よしッ。その者どもの笠かさ印しるしをみな脱とッと捨てさせろ。そして、敗走する敵の中へまぎれ入り、偽わッて、敵陣の中へ敵兵となつて潜り込め」

「あッ。心得ました」

瓜生隊の中には忍者組織があつたのである。同様な第五列に馴れている者は、越後新田党の羽川一族や烏山一族にもある。

義貞は、それらの乱波隊らっぱたいにも、むねをふくめて、ぞくぞく、敵の潰乱かいらん状態のうちへ味方の第五列を送りこんだ。

宵はすでに暗かつたし、三井寺衆徒のうちには、正規の僧兵のみでなく、服色一樣でない土民兵もたくさん交じつていたことでもある。――そのうえ細川、高こう、仁木、西条など、

はじめもつかぬ泥ンこな兵どもが、われがちに三条河原を逃げ渡って、対岸の足利陣地内へ混み入ったことなので、尊氏、直義の帷幕では、まったくこの手には気づかずにいた。三井寺の失墜などは、いわば一橋頭堡の争奪にすぎず、それへ主力をうごかすまでのことはない、たかをくくっていた尊氏も、

「なに」

と、耳を疑い、

「着いたばかりの奥州勢も加え、敵は義貞以下、総勢をあげて、三条口へ出て来たのか」と一驚を喫したようだった。——が、それはまだ宵のくちのことで、——あわてて彼もその本陣を三条北の河原から悲田院址へかけて押しすすめていた。

そして偵察を放つと。

義貞は、自己の陣地を、栗田口から十禅寺ノ辻の辺に占め、楠木勢は、祇園林へ下がつて潜み、最勝寺の森には千種、名和。——また吉田山周辺には、北畠顕家らの奥州勢——結城、伊達、南部、幾多の陣が、加茂川の一水を前に、たとえば碁石をつらねたように望まれるとある。

「さすがは」

尊氏はその手際を聞き、

「義貞は戦上手よ」

と、淡々としてつぶやいた。そして、

「義貞は元来、平場（平地）の駆けを好み、またそれが得意の騎馬隊が中心なのに、前に川を当て、後ろに山を負った布陣は、どういう腹か」

と、すこし無気味な感を抱いたふうでもあった。

おもえば、百余年来、郷国を隣にし合い、代々確執かくしつをつづけ、和解また不和をつづけて来た新田と足利とは、ここにその総決算をつけるべき宿命を、長い月日にかけて作ってきたものかもしれない。と、ひしひし、闘志に胸を打たれながらも、

「すべてはわが大望の素地したじだった。そして義貞もまた、この尊氏の土持ちつちもちしてくれた一人とすれば憎くもない」

尊氏は苦笑をたたえた。

だがこの夜、彼の不敵さ以上にも敵を呑んでいた者は、義貞であつたろう。義貞にはすでに必勝の算があつた。悠々、その夜は休んで朝を待った。

十七日、夜は矢さけびに明けた――。兩岸の矢いくさに始まり、やがて加茂川河原の上

下にわたつての接戦となつた。くわしい一騎打ち合戦はここでは省く。——が、ただ乱軍中突として、新田方の第五列が尊氏の中軍に大混乱を呼び起したとだけはこのぞきえない。

——このため、足利軍は総敗北におち、一時、北野から七条、九条へ遠く退いた。しかし官軍側も、追撃また追撃にまかせすぎて、あまりにその力を分散させ過ぎた嫌いがある。これが司令者の一失であつたことは、その晩のうちに証拠だてられた。

いちど総退却した足利勢は、夜半からふたび活動をおこし、全市の路地にくたくたとなつて駐屯していた官軍へ逆襲せをかけてきたのである。

まつたくの暗闇合戦で、この市街戦では、新田の重臣、船田ノ入道義昌が戦死し、千葉ノ介高胤、由良新左衛門なども、巷に仆れた。

総じて官軍は、わけて義貞の旗は、派手な敗れ方をして、きのうの戦果も、いちどに画餅としてしまったのだった。

ぜひなく、官軍は川の東へ、総ひきあげを呼び交わし、加茂の上流、糺のへんへかたまつた。そして徐々に、叡山山麓の西がわ——西坂本、雲母坂——へかけて厚い布陣をみせ、なお次の新手を翌日には加えていた。

このさい。俄な新手が補強され出したというわけは、先に、洞院ノ実世を大将として、

信濃へ入り、やがて義貞の本軍と会合すべき計画だった東山道軍の七千が、

「主戦場は都へと変った」

「いまは引つ返せ」

と、遅れ^{おく}走せながら、前夜、行宮^{あんぐう}の下に帰り着き、そしてすぐ前線の配備へと廻されていたためだった。

これに、三千の僧兵も、向きを変えて、叡山の布陣は、すべてここに、

山の東側から西側へ

と、まったく移った。——そして以後の十日間——正月二十七日までは、両軍共に、次の大決戦にのぞむべく、その陣立てや整備に過ごし、物見同士の小ゼリ合いのほかは、たいてい見るべき戦もなかった。

状況は、いわゆる四ツの相撲になったのである。

もしこの期間に、尊氏が期するところの、

持明院統の三皇

に接近するの機会をつかみえていたなら、なんらかのかたちで、彼の軍旗の上に、それが^{せんめい}闡明されていたであろうが、ついにその様子はみられなかった。——一色右馬介その

ほか、尊氏の秘命をうけて戦陣もよそに八方奔命していた者どもも、いまだになお、目的への暗中摸索をつづけているに過ぎないものか。——とにかく尊氏にすれば心ならずも賊軍の名の立場のまま、ついに二十七日合戦の大戦争へ突入するしかないものとなっていた。

しかも彼はこの日の戦いで大敗した。

賊軍、逆賊、不逞な反軍と、口にまかせて敵が罵る声々をあびて彼の部下は総くずれに崩れ立った。——錦の旗の前に脆もろかっただけでない。——洛中の食糧不足に足利勢の兵色がとみに瘦せ飢えていたことがその敗因であつたと言いうる。

すでに、洛中占領の当初から食糧政策には欠けていた。いや皆無であつた。都へ入れば食糧はあるものときめ、兵たち個々の心理までおなじだった。

ところが、官の廩りんそう倉あわも公卿の私物もほとんど他へ移されており、疎開民家ときてはなおさらに一ト釜の粟あわすら残してはいなかった。したがって足利勢数万は、入洛以来、勝手な食い漁りによつて生きていたのである。軍律がよく行われるはずはない。また「軍の悪ともなを伴わずにそれのできるわけもない。

「悪兵は用をなさず、か」

大敗した尊氏はすぐそのことばに思い当っていた。

それにしても、この日の惨敗はみじめ極まるもので、主戦場となった下り松から糺河原のあいだでは、彼が若年以来のまたなき相談相手だった叔父の上杉憲房を敵の囲中に亡くしてしまい、また、味方の大名、二階堂道行、三浦貞連、曾我ノ入道などをも、随所の激闘で、あえなく討死させてしまった。

「だめだ！ もはやここでは」

気がもろい。というよりも彼にはすぐ先の見通しがついてしまう。しかし、勝負は時の運、最後の最後まで——としているのは、いつもながら強気な弟直義の血相だった。

彼はどこまで梟将直義の風を失わない。二十七日合戦の挫折にも怯まず、

「戦下手の兄者はとかく指揮をあやまる」

と、尊氏を後陣に庇い、自分が中軍の総指揮をとった。

直義の督戦となると、麾下の将士はみな死神の鞭を聞くように、武者肌をそそけ立てた。かならず、死人の山を越えさせるからであつた。

「退くやつは斬るぞ」

その叱咤を、振り向けもしないのだ。兵は発狂状態をやがておこす。——二十八日合戦

は、こうして加茂の一角で勝った。

これに満足する直義ではない。天まだ暗い翌暁からさらに攻勢を烈しくして、

「師泰もろやす、下り松とを占れ」

と、号令していた。

高ノ師泰もろやす、首藤通経すどうみちつねらが先陣していた。午ごろ、その敵も一蹴しゅうし去った。

すると、どこからとなく、

「――敵は大原から龍華りゅうげ越えして、北国街道へと、徐々に逃げ退いている」

と、聞えた。

義貞も、また行宮あんぐうも、叡山をすてて、一時北陸へ避ける用意らしいという風聞なのである。

「それみろ。味方が苦しいときは敵もまた苦しいのだ。兵力の底はつき、叡山の兵糧も乏しくなったに相違ない」

と、直義は誇った。

が、その見解を、甘い見方として、

「いや、敵の偽計だ。おそらくは乱波らっぱの流布るふ？」

と、いさめる声も多かった。石堂、荒川、仁木、畠山などの部将らだった。

こんな乱軍中の浮説が、いかに危なっかしいものであるかの实例には、つい十日前の闇夜合戦のあとでも、

「敵將の楠木正成と脇屋義助が昨夜討死した」

と、その首まで拾つて来て立ち騒いだことなどある。もとよりそれは偽首にせくびだった。が、偽首と分つたあとの空々そらざらしい敗北感はいつまで後味わるく尾をひくものであった。

果たして。――官軍方の北国落ちなども、その日の夕には、第五列の流言とわかった。しかし、そのときもう直義の軍は深入りをしすぎていた。敵は、山に抛より、夜を待っていたものらしい。

雲母坂きらくさかにいた山法師の一軍、赤山明神下の洞院ノ実世さねよの七千人。これが一時にうごき出すと、鼓こを合せて、白川越えの上や鹿ヶ谷しかたにのふところでも山を裂くような武者声がわきあがった。新田義貞、義助の一万余騎だ。

そして、山科から粟田口へかけても、北畠顕家の奥州勢が、とつぜん、直義のうしろを通つて、いきなり二条の尊氏の本陣へ、突進していた。

形からみても、足利軍は、四分五裂のほかなかった。

そのうえ、楠木、名和、千種などの、昼から陣旗をひそめていた部隊が、五条、七条を渡河して、

「逆賊、のがさじ」

と、尊氏の退路とみられる所へ、所かまわず火を放った。

尊氏の旗本は奮戦した。明け方まで市街の辻でふせぎ戦った。――が、驚くべきことが起った。二引両の足利旗の真中に墨を塗って、急に、新田旗の一引両の旗に拵え直して持ち廻っている隊がたくさんある。――早くも寝返りが続出していたのであった。

魚見堂 うおみどう

尊氏の行方、直義ただよしの生死、それすらも諸説紛々ふんぶんで、かいもく、一時はわからなかった。

が、あれほどな足利勢も午頃ひるいろうには洛中のくまぐまにさえ一兵も影をみせず、遠く丹波境の山波の彼方へ没し去っていたことだけはたしかであり、さらには、まだ諸所の屍かばねもかたづいていないこの生々しい戦塵せんじんの中へ、はやくも後醍醐の還幸さえ見られたのだった。

その日は正月の三十日で、尊氏の洛中没落も、園太曆えんたいりやく、元弘日記裏書、建武三年記、どれもみな同日の事としているのをみれば、天皇には、「——尊氏、退く」と聞き給うや、すぐ、叡山あんぐうの行宮をひきはらつて、

「都にあらでは」

と、即日、御座ぎよざを洛中へ還かえされたものとみえる。

まる一ト月の余であつた。宮廷すべての大御家族を連れての御動座ごどうざでもあつたから、一日もはやく元の御所へと願う女によしやう性せいたちのせがみも容いれての還幸ではあつたろう。しかし、敗退したといえ、なお丹波境には、足利勢の蠢動しゆんどうも充分ありうるのを見こしなから、その日すぐ御座を洛中へ還かえすなどは、よほどなご確信のなにかぎり、よくなしうることではあるまい。

しかもである。

「内裏は一時どこへおく？」

と、御隨身以外の者はそのおちつく所もまだ知らなかった。——なぜなれば去年こぞお立退きのさい、二条富小路の内裏はすでに焼けうせている。——そして元々の大内山は大内裏造営工事の工もいまだ半ばのままで、しよせんお入りあるにはたえない。で、一時、鳳ほうれ

輦^んは、

成^{じよう}就^{じゆ}護^ご国^{こく}院^{いん}

へ入らせられたが、ここも手ぜまやら御不便となつて、あくる日すぐまた、

花山院亭

へお移りになつた。

いかに難に屈しない御性格のみかどであつたことか。翌二月二日には、はやくも仮の政庁にたつて諸政や軍務にたずさわつておられたのだつた。過般来の合戦にぬきんでた功のあつた人々への御感^{ぎよかん}の軍忠状には、ままこの二月二日付けのことが多い。わけて北畠顯^あ家^{きいえ}、結城宗広^{ゆうき}、その一族、田村の莊^{しやうじ}司^しらへの感状には、

遠路をしのぎて

たちまちに参^{さん}洛^{らく}し

おん大事に会^あふの条

御感^{ぎよかん}ななめならず……

という特別な観^{えいりよ}慮^{りよ}も辞句にはいつていた。またそれに徴^{ちやう}してもこれ以外のあまたな将士にもそれぞれ何かのかたちで嘉賞の沙汰が一せいにおこなわれたのはいうまでもないだ

ろう。

洛中はどうしてさかんな凱歌にわいた。この声につられて山野の疎開者もたちまち元のわが家へ帰っていたろう。すなわち、一日のまもおかなかつた還幸の急は、洛民へのそのねらいが第一であつたものとおもわれる。

一方。——一時は戦死説までつたえられていた尊氏、ただよし直義のふたりは、途々、みじめな残軍をかきあつめては、これをひきつれて、丹波の篠村しのむらへ落ちのびていた。——この篠村八幡は、彼が弱冠じやつかんのときの曾遊そうゆうの地。また、彼が反北条の旗上げをした地。——思い出多い三度めの宿命地だつた。

九死に一生をえてたどりついた篠村八幡の森は、尊氏に再生の思いだけでない何かをさらに誓わせていたにちがいない。

ここには、かつて自分が旗上げの日に籠こめた願文がんもんがおさめられてある。——一には世のために、二には朝家のため、三にはわが源家再興のため——と素志そしを天にちかつた願文だつた。そしてついにそのどれもまだ達していないのみか、かえってこんな蹉跌さてつからみじめな惨敗をみてしまった。

「直義」

「は」

「いたか」

「途中、何度かお姿を見失いかけましたが」

「つかれたなあ、さすが」

「茫として、つかれた感じすら今はわかりませぬ」

「そんなことではならぬ。まずおちつけ。ここの御堂は尊氏にとって、何かといえば峠の茶屋のような憩いいこの場となっている」

拝殿へむかつて礼拝らいはいはしていたが、ことばどおり彼はここを峠の一床しょうぎ几ことしているのだろう。階きざはしの一端に腰をおろして、さて？　とここまでの帰結やこれからの方向にしばらく思案顔だった。そして旗上げ当初は何もかもが順調であつたが、さいごへ来ては事すべて、自分の布置ふちや考えとくいちがつてむりな戦をあえてしてきた手際のまずさに思いたらずにいられなかつた。

「直義、妙源はいるか、引田妙源は」

「ついに見えませぬ」

「師直もろなおは」

「師直、師泰の兄弟も」

「いないか」

「ほかの道へ落ちたものとみえまする」

「道誉はどうした？」

「神樂ヶ岡かぐらおかの合戦までは見えましたが、さて、這奴しやつのこと、いかがあろうかわかりません」

「では、近江路かの」

「おそらくは、道誉もまた、味方の敗北と共に、二引両の間を墨で塗りつぶした旗をかつぎ廻った組の一人ではありますまいか」

そこへ宮司が見えた。尊氏は宮司のあいさつをうけたのち、さつそく兵たちに食わせる炊出したきだの手当を依頼したので、ここまで共に落ちてきた人員を点呼てんこさせてみると将士あわせてわずか二百余人にすぎなかった。

ほどなく土地の内藤三郎兵衛道勝どつしょうも来て大金で粥かゆを煮に、兵の飢えはしのがれたが、尊氏はなお、腰糧こしがて三百人分を道勝の手に託して、

「こよいは休み、ここは、明朝立つ」

と、ふれさせた。

あくる朝、ここを立つさい、彼は篠村八幡宮へ佐伯ノ莊さえきしやうの一部を寄進して、所願成しよがんじやう就じゆの祈りをこめた。そのとき今川範国のりくにが、

「ご先祖義家公にも、奥州征伐のみぎりには、ただ七騎とならせ給うた例があります。はじめの負けは御当家の佳例かれいかと覚えまする」

と、なぐさめた。

尊氏は、大きにさようだと、うなずいて、

「負けもよし。ふかく思えば、きのうまで勝つてばかりいたことのほうが、むしろ不吉だった」

と、左右へ言つた。

その朝（二月三日）の情報によれば、官軍は西山峰ノ堂から大江山ぐちまでは追つてきたが、以後は見えないとのことだった。さらば行くと、尊氏は裏丹波を西へさして行つた。尊氏の行くての先は兵庫であつた。山陽道と四国をむすぶ兵庫を無視して勝目はないとしていたからだ。

その兵庫への道を、彼の落ちてゆく残軍は、裏丹波の三草みくさへとつた。この道は寿永じゆえいのむかし、源義経がひよどり越えを突いて出たときの間道である。おそらくは尊氏、直義、

敗残の将士、たれの胸にも、なにかの感慨がなくていられなかつたろう。

いま向ふ方^{かた}は明石^{あかし}の

浦ながら

まだ晴れやらぬ

わがおもひかな

尊氏の歌である。

彼が三草^{みくさ}越えの途で詠^よんだ歌として歌集「等持院殿（等持院は尊氏の院号）百首」のうちに載っている一つである。おもうに三草の山間のまだ残雪もまだらな道を疲れた馬にゆられつつ行く途中でふと矢立の筆をとってたれかに示したものでないか。

だが、この歌の意味は、どうにもとれる。

大望の道、まだまだ遠し、とする心にも。

または、やるかたない敗軍の将の断腸^{だんちよう}の思いとも。

あるいは、家郷をも失わせて、ちりぢりにさまよわせている子や妻や愛する者たちへのつづやきかとも解いて解かれないことはない。

もしたれかが、

「さようなお歌の意にございましょうな」

というとしたら、尊氏は「うん」とうなずいて、わが意をえたりとしたろうか。おそらくはそのどれへも笑つてうなずいたかもしれない。けれどもわが意を解いたものとはしないだろう。——彼のむねに、まだ晴れやらぬ、思いをなさしめていたものは、逆賊尊氏の汚名を着たまやぶれ去つて行くことだったにちがいない。

篠村^{しのむら}八幡へこめた願文^{がんもん}にも、彼は国内平安と朝家の御為をうたっている。家の名をはずかしめずともいつている。また彼の思想からも元々、逆賊叛臣が本懐^{ほんかい}ではない。やぶれは時の運と観^{かん}じ去つても、それだけはなにか拭いきれぬような——晴れやらぬおもい——となり、口でいえぬ歌となつていたかにおもわれる。

「介^{すけ}は、どうしたか」

彼が、切望に切望していた持明院^{じみょういんとう}統のお一ト方による院宣^{いんせん}はついにこの日までまだ手にすることができなかった。

右馬介をして、序戦のうちからその宣下^{せんげ}をいただくべく、八方、奔走させていたことではあったが、ついにまだなんの音沙汰も今日までない。

日野資名と行き会えないのか。小右京の行方もさがし出せずにいるのか。あるいは、後

醍醐の大覚寺統だいかくじとうの警戒の目がきびしく、後伏見、花園、光厳こうごんのどなたにも近づきま
 らすことができずにいるのか。

「……さても」

と、彼にはそれが成るか成らぬかの便りだけでも待ちびさしかった。万が一、事が絶望
 とでもなればいかにせんと、行くての明石あかしの浦すらも暗い未来におもわれてくるのだった。
 道は播磨はりまへ入った。

山路を降り、明石の大蔵谷へ行きつくと、この方面、垂水たるみ、須磨、兵庫へかけては、た
 くさんな味方が落ち合っているのがわかった。高ノ師こう直もろなお、師泰もろやす。赤松円心。細川定じよう
 禅ぜん。——吉良、仁木、石堂らの一族。そして佐々木道誉もまたそれらの敗退軍のうちに
 まじっていた。

「おお御無事だった」

桃井直常、引田妙源らが、まつさきに来てよろこびあい、

「どれほどおさがし申したことかしませぬ。すぐ味方じゅうへ」

と、これを兵庫から播磨境までの諸所へわたって触れわたした。

明石の陣は、一夜にすぎず、尊氏は次の日さつそくその陣所を兵庫（現・神戸市）へす

すめた。——港にちかい逆瀬川の川ぐち、魚見堂を本營地として、ここに敗軍の再編成と再挙反撃の床几をさだめたものだつた。

兵庫は建武の初年いらい楠木正成の勢力範囲にはいつている。が、正成の代官もここに見えなかつたのはいうまでもない。生田、和田ノみさき、会下山、湊川、見えるところの山野は、期せずして先おとい頃からこの地方へ逃げ集まって来た足利方の兵馬だつた。

「兄上」

ただよし
直義はすっかり意気をもち直していた。

「なおこれほどなお味方はのこつています。そのうえに今朝、鞆ノ津からの早馬もありました。それによれば、かねて御教書を発しおかれた周防の守護、大内長弘、長門の守護、厚東一族らが兵船五百その帆を揃えて、もうつい播磨沖まで、ご加勢に近づきつつあるよしにございまする」

「おう」

と、尊氏も眉をひらいた。これも待ちに待っていたものである。

「大内や厚東の船手がみえて来たとおるか」

「ご安心なされませ。つづいては九州の大友、相良、島津らの後陣も馳せさんずるにちが

いなく——それにこの地になれば兵糧の憂いもないこと。兵馬にはここ幾日かを休養させ、ふたたびの御指揮あらば、義貞の勢^{せい}をけちらして、洛中をとりかえすことも、なんの造作^{ぞうさ}ではございません」

だが、直義のいうようなものでもない。その事實はまだ軍の装備や編成も完^{まった}からぬうちに、ここへはひんぴんと入ッて来た破竹^{はちく}な敵の大軍の情報によっても分っていた。

いわく。

八幡^{やわた}、山崎の線を死守していた武田信武は、ついに官軍の大兵にもみつぶされて、多くは官軍へ降参し、大将信武は、いまのところ生死も不明——と。

また、二次の報では。

楠木正成は、神崎川^{かんざきがわ}から難波^{なにわ}の浜^{はま}をひだりに御影街道^{みかげかいだう}へ急進をしめしており、脇屋、宇都宮の二軍も伊丹野^{いたみの}から西へうごき出で、さらにそのうしろには、北畠顕家の万余の兵、新田本軍の義貞朝臣^{あそん}が旗じるしなど、霞^{かす}むばかりな厚さをなし、その兵数もちよつかめぬほどだという。

尊氏の床几をめぐる性急な軍議では、

「この不揃いな装備のまま打ッて出るのは如何^{いか}なもの？」

と、ひとまずは、受けて守るが利とする説が多かった。

「すぐうしろには摩耶山まやさんの險がある。摩耶とこことはわずか五十町。よろしく御大将と御舎弟とは、摩耶をとりでとして、そこへご籠城ろうじょうがよろしからん」という意見なのだ。

すると、佐々木道誉が、笑って言った。

「それはまずかろう。いちど大負けに負けているうえ、両大将が山城やましろへ入りこんで、および腰な御指揮とあつては、士氣が立ち直れるはずもない。また遠方にあるお味方への聞えも悪い。始終しじゅうの利こそ大切と思わるる」

道誉というと、たれもが蔑むさげす。しかし尊氏はうなずいた。そしてすぐ断をくだした。

「よくいった。道誉の言はただし。攻勢に出るとしよう」

ちらと、直義に不満がみえた。自分がいいなかった主張を、道誉に先せんを越された不快さかもしれない。が、尊氏は、気づいていたかどうか。

「直義、異議あるまいな」

「ありませぬ」

「ではすぐ布令ふれしろ」

「は」

「先陣には、細川、赤松」

「いや私も」

「よし、直義もまいれ。次いで尊氏も馬をすすめよう。道誓はわしの中軍に付け」

そのほか、指令をうけた各将は、すぐ軍議の場から散って行った。そしてこの日も六甲のふもとや御影^{みかげ}附近では物見隊の衝突があつた。

いかに官軍側の急追が怒濤の急であつたかわかる。またすでに、敗残の賊軍などただい^いつそ^つう掃^つのみとしていたかもわかる。

その官軍の先鋒は、西の宮に陣していた楠木正成の手勢だつた。——いまはこの人も河内、和泉^{いずみ}の守護職である。——その勢力もかつての南河内の一土豪にすぎなかつた頃の比ではない。そして千早^{ちはや}金剛^{こんごう}で鳴らした往年の勇名だけはなお生き生きと全土の武者の記憶にふかくのこっている。——だからそれに直面した敵は、菊水の旗と見れば、

「ぬかるな」

「計られるな」

「めつたに出るな」

と、かたくなつて、つねに手固い対陣になりやすかつた。

御影みかげの前哨戦から二日後、両軍はやくもこの膠着陣形こうちやくにおちてしまった。いや、

「菊水の旗も、鬼神の魔符まふではあるまい。正成、何ほどのことやある」と、あえて呐喊とっかんをこころみた細川阿波守の弟頼春が、序戦をし損じ、自分もまた重傷を負つて仆れてからの膠着こうちやくだつた。

ところが、どうしたのか。

菊水の旗は、一夜のうちに、どこへか見えなくなつていた。前線から後陣へまわされたふうなのである。——或る説では、河内へひきあげてしまったなどの噂うわさすらあつた。

しかしそれは事実でない。足利方の乱波らんぱの探りでは、三日にわたる膠着戦こうちやくせんが因もととなつて、正成と尊氏とのあいだには微妙な默契があるらしい、とうたがわれ、両者は款かんを通つうじているものだ、との声が官軍内にぱつときかんになったことが、その第一の原因らしいと、尊氏の床几へも、さつそくな秘報がきていた。

「そうか」

尊氏は、誰へも言っていない。じつは自分がやったことである。

彼は正成をきらつたのだ。正成とは戦いたくない。むしろ味方に求めたい。他日を待つ

でも彼とは共に天下済世さいせいのはかりもじつくりはなしてみたい。

だから避けたのだった。尊氏は、正成宛ての懇ろな書簡を書いて、それを兵の肌にしたせ、わざと捕まるように、昆陽野こやの方面の敵中へ放したのだ。伊丹には義貞の弟義助が陣している。義貞は疑いぶかい、勇将だが、惑いまどに弱い質である。かならずや、正成を観る目に変化をおこすにちがいない。——そう考えてほどこした計だった。そのため、おそらくは義貞と正成とのあいだに、一紛争がおこつたものと想像されうる。

「だが、正成には気の毒」

と、ほくそ笑みにも、ふと惻隠そくいんを抱く尊氏だった。

ひろい六甲の山野から打出ヶ浜の長汀ちやうていへかけて急なうごきがみえだしていた。

正成の菊水旗きが後陣へ消え、代つて、脇屋義助の軍が、武庫川むこがわのかみから急下してきた朝からの緊迫した鳴動だった。

「賊軍の息のねをとめろ」

となす総攻撃の開始か。

新田義貞の本軍と、その左翼をなす北畠顕家の万余の兵も、すべて、昆陽野こやのから芦屋へと、前進をみせている。

いや、足利方にとって、もつと脅威的なものは、有馬越えから六甲の中腹を通つて住吉川へ出て来ようとする一軍の敵もみえていたことである。——これが越後新田党の精銳だとわかつたときは、さすがの直義も、

「しやツ、一大事だ」

身の毛をよだてずにいらなかった。——もしその猛兵に破綻をゆるせば、御影から西の宮までの味方は——敵のふくろの中のものになつてしまう。

「師泰、師泰。山の手へ向え。おおつ、細川定禅も、住吉、岡本の辺を踏んまえて、有馬ぐちの敵をふせげ」

彼は声をからした。

そして直義自身は、赤松円心の手勢とがっちりくんで、浜寄りのなぎさと、昆陽方面とから西進してくる敵へむかつて、その陣を扇なりに展いた。——あらゆる形勢、また条件からも、勝敗は、今日じゅうのものともみえてきた。

この急迫を見ては、はるかうしろな尊氏の陣といえ、戦ぎ立たずにいられない。

尊氏のまわりには。

高ノ武蔵守師直、吉良左兵衛ノ尉、桃井修理亮、大高伊予守、上杉伊豆、岩松の

禪師頼有、土岐彈正、おなじく道謙、佐竹義敦、ほか三浦、石堂、仁木、畠山などから老臣今川範国までがかたずをのんで前線との伝令をとっていた。また佐々木佐渡の判官入道道誉もこの中の一人だった。

刻々の戦況をききながら、尊氏はこのうちの将を引き抜いては、

「繁氏（細川）。山の手の助けに行け。三河ノ三郎（吉良）。なぎさづたいに御影の後ろ詰に駆けろ」

と、しばしば、応援をおくり出していた。

——するうちに、この日、明石の沖あいに、大小数百そうの兵船群が列をなして見えてきた。これがわかれると陸では兵庫から生田、御影へかけて狂喜の歓呼がうねりのようにつたえられ、

「長門、周防の兵船五百がここへ着くぞ。大内、厚東がお味方なるぞ」

と、歓呼しあつた。

けれど次にはやがて大きな失望と戸惑いが諸陣の兵の顔を吹いた。——兵庫島へ着いた兵船も多かったが、うち二百余そうの船影は、足利方の陣を横にみながら官軍方の旌旗をさがして西の宮の南へ着け、ただちに兵をあげて、義貞の指揮のもとに就いたのだった。

あとでは分った。

四国の宮方、得能とくのう一族や土居どいの軍勢だったのである。それが海路の途中ではしなく足利方へ加勢におもむく船団とぶつかってしまったため、海戦には出なかったが、相互、微妙な牽制けんせいをしあい、また、日時もよけい費やして、同時にここへ着いたのである。そしてすぐ敵味方の岸へ別れたものだった。

官軍方へも海上の新手が参加し、足利方の兵庫島にも周防すおう、長門の大船団が加わったので、たたかいはいやがうえにも大きくなった。そしてまた、その日は勝敗もつかずに暮れてしまった。

あすこそは――

と前線の直義ただよしからは、尊氏のいた摩耶山麓まやさんろくへ、意気さかなな伝令があり、――きつと勝運しょううんをひらいてみせます。大内、厚東こうとうの新手の勢せいも参着したよし。ねがわくばなおぞくぞく、新鋭の隊を、前線へおくり出し給わりたい。

と、いつて来た。

よし

と、尊氏は答えに附して、なお、かんとんに、

さあれ、義貞は戦上手、わけて平場は彼の得意だ、勢いにつられて深入りすな。特に兵力を分散するな。

と、注意をさずけて、伝令を返していた。

尊氏は夜すがら寝もやれぬふうだった。彼の待ちかねていたこと（持明院統の院宣）はもう絶望にちかい。直義をはじめ奮戦の中にある諸将はすべて強気だが、いくさを意気だけで勝てるとする単純にまではなりきれぬ尊氏でもある。あすの勝敗にかかわらず、彼のあたまは大局から万一のときの副線へも思いをいたさずにいられなかった。

やがてのこと。——道誉がそつとそこへ呼ばれていた。尊氏のあたまの気泡が何かその一つをかたづけておこうと、急に思いついたものらしく、

「ほかでもないが」

と、声をひそめた。あたりは夜営寂^{せき}として、陣幕^{とばり}を透^{とお}す外の篝火^{かがび}が、かすかな明りを二人の間に見せているだけだった。

「道誉。事にわかだが、御辺はここを脱けて、近江へ帰ってくれまいか。摩耶^{まや}の裏を越えて、丹波へ出れば、敵にも出会うまい」

「ほ。……？」と、一驚のいろの下に「またこの道誉へ、寝返れとでも仰せあるか」

「いや、同じ手は二度効くまい。しかし、たたかいても七分は勝目なしとおもわれる。朝敵の名を負った不利いかんともなし難い。よし一時は勝つても、官軍の義貞には、いくらでも後詰がつづこう」

「さては早やお見通しか」

「尊氏は身一ツのみのいくさはしておられん。多くの者の運命をにのうておる」

「近江へもどれとの御意はそれか。伊吹には越前の前（藤夜叉）と御一子不知哉丸とが残してある。お気がかりよの」

「されば、尊氏がここに敗れて、しばらく京師も踏めぬからには、御辺の保護の下に、二人を頼みおくしかない」

「こころえ申した。したが千寿王どのや御台所は」

「三河においてあればこれはさして後顧の要もない。万が一にも、危うしとなれば、舟で落ちゆく島もあろうというもの」

それから、両者のあいだには、たれ知らぬ密談が交わされていた。そして道誉はこの深夜ひそかに一族一隊をつれて、摩耶の裏越えから戦線を脱落し去った。

すると、すぐそのあとのことである。——夜の戦野から拾って来たと称して、物見組の

一将校が、二人のかよいい者を連れ、おそろおそろ尊氏の陣幕へそれを告げに来ていた。

尊氏はおどろいた。その物見組の一将校が語るのを聞けば――

「されば、有馬街道から西の野末でございました。ひるの合戦に、そこらは馬のかばねやら兵のむくろが算をみだしております。しかるに、歩みも遅々と、夜風の中をさまようている不審な人影が見えますゆえ、馬をとばして行き、何者かと呼びかけまするに、逃げもせず、新田殿の者か、足利どのの内かとたずね返しまする。――おおよ、おれどもは足利方だと言つて聞かせますと、ならば御陣所へ連れて行つて給われと、母子して訴えるではございませぬか」

「で、伴うて来たわけよな」

「はっ」

「草心尼とはいわなかったか。ひとりは、覚一法師とも」

「やはりお心あたりのある者で？」

「む、ちと有縁の者だ。すぐこれへつれて来い」

有縁どころか、尊氏には叔母にあたるひと、また、いどこにあたる覚一なのだ。それにせよ、どうしてこんな戦場の夜をさまようていたものか。

まもなく丘の下から兵にともなわれて来るたどたどしい二人があつた。尊氏は陣幕とぼりの内に
入れて敷物を与え、そこらの将士をしりぞけてから、自分も楯たての上に胡坐あぐらした。

「尼前あまぜではないか。どうしてこのようなあぶない所へは」

「才、尊氏さま」

と、草心尼は、旅のわらじのまま居住居をちよつとかえて。

「おもいがけなくお目にかかり、またお変りもあらせられず、こんなうれしいことはござ
いませぬ」

「いや尼前あまぜ、六波羅にいた頃とは、大変りだ。其許そこたちの目から見たら、今の尊氏のすが
たなど羅刹らせつのように見えようがな。……生きるか死ぬかだ。はははは」

と、自嘲して。

「が、われらは是非もない。これや宿業しゆくごうだ。したが、何も知らぬ其許そこたちこそ、世の
大波に、さぞや憂うれき目を見つらんと、ひそかに案じておった。さるを、なぜ洛中を出て、
戦場などへ」

「いえ、洛中こそが、居るところもない修羅地獄でございました」

「おおそうよ。洛らくの北山も東山も、あの大戦では」

「あなたこなた、逃げさまよい、火にも追われ、ぜびなく、明石の知る辺をたよって、淀の西をまいる途中、新田殿の御陣に捕まり、きのうまでは、御陣について、歩き暮れておりました」

「では、義貞のそばに」

「はい、むかしの世良田殿も、いまはいかめしゆう、総大将の陣座にわせられ、あまぜ 尼前よ、心配すな、そばにおれ、いくさはすぐにすむ。ひつじよう 必定、尊氏は自滅か斬り死のほかあるまい。さあれ、其許そこたち母子おやこは、朝敵のとがに連つらなる者とはせぬ。——安住の地を与えてやろう、これにおれ——と仰せてはくださいましたが、なんぼうにも居耐いたえ難がとうて」

「では、無断でそこを去つて出たのか」

「とは申せ、盲めしいを連れていること。行き暮れておりますうちに……」

言いながら、尼は、うしろの覚一へいたいたしい目をやった。背の琵琶を重たげに、覚一はさつきから、墨絵の中の者みたいに、うつむいたままでいた。

覚一はやつていた。

あわれなほど、草心尼にもそれは見えるが、若くして若さの影もない覚一の痩せは、ただの憔悴しょうすいともみえなかった。心の滅ほろびとたたかっている苦悶に肉を削そがれている若者

の頬骨だった。

ひと言、ふた言……

尊氏は彼へはなしかけたが、たちまち目をそらしてしまった。

何か、この盲法師が、無言の責めを尊氏へ責めているように思われたらしい。

しかし、覚一は、そんな片言も言つてはいない。人のしている戦を、この地上の業を、

むしろ彼は、自分の罪業みたいに身のうちで憂悶しているにすぎないのだ。ただ理解したい人の世の相剋^{そうこく}ぶりが彼には悲しくて恨めしくて、つい尊氏へも、多くをいわず、うつむきがちな姿になっているものだった。

「して？」

と、尊氏はすぐ、

「明石の、何処へ」

尼へことばを向けかえた。

「明石の浦に、和歌のお師、冷泉為定さまの古いお家がありますので」

「はて、為定どのは、とうに亡きお方だが」

「いえ、幾たりとなく、歌の同門たちが、早くから戦を避けて住もうております。わた

くしたちも、覚一がお覚えをうけた東宮の御門や女院さまにおすがりすれば、身の無事はえられましようが、覚一はそれを好みませぬ。またふと、巷ちまたで行き会うた右馬介も、明石へ行くことがよいとすすめますゆえ、ならばと、思い切つて都を出て来たわけでございました」

「なに。巷で、介すけに行き会うたとか」

「はい」

「いつ、どこで」

「つい都を離れる前の日ごろ。嵯峨野さがのの辻で」

「介のおる所を、その折、どこか聞かなんだかの」

「双ヶ岡ならびおかのさる法師の家にて、小右京さまと共に、誰やら申す元お公卿の僧を、懸命に毎日さがし歩いているとのことでしたが」

「ああ、まだ日野資名どのに会えずにおるのか。……いや何」

と、急に語尾を消して、陣幕とばりの上にうすらいで来た空明りへ顔を上げた。

「おう、はやまもなく朝が来よう。朝ともなれば、たちまちここは戦場のちまた。其許そこたちのいる所でない。……止めおきたいが置かれもせぬ。……妙源おらぬか。妙源」

「はっ。おめしで」

引田妙源の姿を、とぼりの裾に見ると、尊氏はそれにいいつけた。

「この二人を馬に乗せ、兵庫の魚見堂まで送らせい。そして、よういたわり取らせたうえ、さらに二人のたずねる明石の冷泉殿の家まで兵を添えてとどけてやれ。心ききたる兵数名をつけて、過ちのないようにな」

「かしこまりました。では」

「おおすがよい。尼前、あまぜ覚一、また会おう。再会はまだ先の日遠いかもしれぬが、きつと会おう。その日まで、つつがなく暮しておれよ」

尊氏は何か、急に、心せわしげであつた。そしてこの二人を見送るとすぐ、薬師丸という小姓武者を、陣の内からよびよせていた。

未成年者は一様にわらべむしや童武者とよばれている。

十三、四から六、七歳の年少もかなり軍中にいたことは事実で、うちには寵童もまじっていたといわれるが、尊氏には美童を愛していたようなあとはない。その多くは将座に侍して、総大将の雑用をなすいわゆる「小姓組」に配されていた。

薬師丸もまたそのひとりで、可憐な童体だった。髪を稚子輪ちごわに結び、朱胴しゅどうしゅ朱おどしの

小具足を着、尊氏によばれると、

おん前に――

と、かたのごとく、いつもの恰好でひざまずいた。

「薬師丸か。もそつと寄れ」

「はい」

「そちはたしか、熊野山の別当法橋道有が乙子（末子）であつたな」

「はい」

「日野殿のお家と其許の別当家とは、浅からぬ所縁のあいだではなかったか」

「母は日野家から輿入れされたお方にちがいありません」

「そうだったなあ。御一門の一家、日野資朝卿は、正中ノ乱に与し、大覚寺統の今上

に忠誠をしめして佐渡ヶ島の配所で死んだ。……が、その御兄弟、資名、資明の二卿は、

持明院統につかえられ、例の、西園寺公宗の北山事件に連座して、いまはいずこかに蟄

居の身とか聞いておる」

「……………」

「いや、そのようなわけがらはいま申すにも及ばん。要は、そちの所縁がたのみだ。尊氏

の旨をおびて、その資名、資明二卿のいずれかに、いそいそでお会いできる工夫はないか。わしに代つてだ。どうじやな、薬師丸」

「できぬことはございませぬ。おいとまさえいただければ」

「もとよりすぐ都へ立たねばなるまい。したが、右馬介以下十人ほどを、京にのこしおき、八方おさがし申すといえども、いまだに梨のつぶてなのだ。薬師丸、そちららばどこを尋ねる？」

「まず醍醐の三宝院へ行つてみます。あそこの僧正も日野家から出たお方です。それでも分らなければ日野ノ荘の萱尾明神や、法界寺や、日野ノ里をくまなく訊けば、わからぬはずはございませぬ。いずれは由縁へお身を潜めているものと思われまますから」

「む！ たのもししい」

尊氏は俄に一縷の光を見いだしたようだった。自分の待ちかねている——いや絶望さえしかけている——持明院統の皇の院宣をどうしてもその日野殿のお手から奏請して欲しいのだ——ということ、この薬師丸へ、熱意をこめて、いいつけたものだった。

「双ヶ岡の法師といえ、あの兼好にちがいない。右馬介がその庵に寝泊りして、八方、院宣の入手に奔走しておるよしを、たつたいま耳にした。……薬師丸、そちが介を案内し

て、日野どのにまみえ、首尾ようまた一日もはやく、院宣をくだし給わるよう、いまより急いでここを立つてくれい」

童体の一小武者に、このような大秘事を託して、二次の追っかけに洛中へやつたなどをも、尊氏がいかにかそれを急ぎまた重要視していたかも知れる。一説には、これは赤松のりむら則村（円心）のすすめだともいわれている。

大覚寺統の君がただししい皇統なら、持明院統の君もまたまぎれない皇統であることぐらゐな常識は当年のどんな武者でも持っている。

だから赤松円心ひとりでなく尊氏帷幕いばくの老将たちも、その献言はみな尊氏へしていたにちがひなく、それも諸將の心に余裕があつた日のことだろう。

ところが。後醍醐のご警戒きびしく、当時、持明院統のおかたも、みな叡山へ移され、近づきまいらせる手がかりなどはまったくなかった。——そしてやがて御帰洛を見たところには、足利方は総敗北——洛外遠くへ没落の日であつた。

だから「梅松論」や古典「太平記」も、尊氏が院宣を請うための、薬師丸の派遣を、すべて三草越え以後のこととしていのである。さんざんに敗けいくさとなり、もうほかに手段もない切迫せつぱつまつての思いつきから、

このたたかひを

皇きみと皇きみとの

お争ひになさばや

と彼が言つて、急遽、薬師丸をみやこへやったという態ていに作られてしまっている。

しかし、後にはこれが南北両帝分立の正因にもなるのである。ここらは大いに熟考を要しよう。

かりにもそんな大秘事が、敗北のすえの土壇場へきて、俄に思いつかれたなどは、信じられぬはなしである。——尊氏の政治的才能からみても、それはすでに義貞を追つて、海道を馳はせのぼつて来たところから——そして洛中合戦のあいだにも——四六時中彼の心にあつた重要政略の一つではなかつたか。

——けれど万事は休した。

その院宣はついに、西の宮、御影みかげの再起戦でも負け、完膚かんぷなきまで、官軍にたたかたさいこの日まで、彼の手には入らなかつた。

「いまは」

と、彼はワラをつかむ気もちで、薬師丸まで追ツかけの使いにやったが、しかしまだ元

服前の一童子武者である。それへ大きな望みは望んでみてもムリだった。

しかも戦況は、その日頃をさかいに、悪化の一路をたどっていた。今はすこしでも味方を損じまいとして、尊氏はしきりに退却をうながしたが、直義は頑^{がん}として退かず、細川、赤松らも遠くたたかって伝令はまま切斷され、ために退軍の令もほとんど思うようになれなかった。

これが救出のために、尊氏も馬を出してついには乱軍中の人となった。

後世、伝承された『尊氏馬上像』はこのときの彼の奮戦像であるという。——ようやく、負けいくさの手勢を合^{がっ}して、兵庫の魚見堂へ、一族の諸将が落ち合ったのは、乱軍四日めのことであり、魚見堂伝説として、ここでは尊氏および直義が「——腹を切るべきか」

「いや生は大事、死を急ぐべきでない」と、諸將共々、論議があつたなどともつたえられている。が、もとより尊氏には、自刃の意などは毛頭なかったものと、断言してよい。

筑紫びらき^{つくし}

「これまで」

と、尊氏は見切りをつけて、ついに船へ移った。いや逃げたという方がここではただしい。

ただの陸地における総退却にしても、いわゆる“負け引き”には非常な危険がともなうといわれている。ましてこの折の足利勢がまたまた、大混乱におち、おびたしい犠牲を浜のなぎさに捨てたのはぜひもない。

かねて大小の兵船三百そうの用意はあつたが、

「すわ、大殿には海上へ移られたぞ」

と、おめきあつて、われがちに船へなだれこんだ一ときの騒ぎは言語に絶していた。うしろには早や官軍がせまっていたし、殿軍しんがりとても、すでに戦意はくずれていたことだった。

溺おぼれ死ぬもの。あるいは、敵に捕われる者数千。余りに一そうの内へ人や馬が混み乗ったため、満載のまま、くつがえる船さえあつた——と古典はその惨状を写すに文字を惜しまずつかっている。

尊氏もいまは、非情に、

「つづく者はつづいて来よう。わが船よりまず帆をあげて西へ急げ」

と、船手の者を、せきたてた。このさい、時をかせば、官軍方にも四国の兵船二百余そうがいたのである。海上で包囲されるおそれも多分にあつたのだ。

それゆえ、掩護えんごの船列も布しいたろうが、とうてい、秩序のある船出などではない。さきへ行く尊氏の船を目あてに、あとあとから、帆に帆を慕ッて行つたことだった。——ために陸へとりのこされた残軍はまた残軍で、陸路を西へ、離々りり続々、落ちのびて行くのも見えた。

もしこの機に、官軍方が、陸上の顧慮を一切おいて、

「今こそだ。足利一族を海のもくずに」

と、すぐその戦力を四国船隊の上へ移して、海上、さらに追撃をつづけていたなら、おそらくは尊氏もついに逃げきれなかつたかも知からない。——が、なぜか義貞はそれを敢行しなかつた。野戦ぎようしやうの驍しょう将しょうも海には自信がなく、ふとためらいを抱いたのか、でなければ、

「これほどに打ちたたいたこと、尊氏とて、もはや再起はおぼつかなくろう」

と、敵を見くびつての、驕おごりであつたとか考えられない。

もつとも、官軍側には、公卿大將も多かつた。そして古来、堂上の制としては、

宮闕きゆうけつの下もとのほか

畿外きぐわい諸国の動乱は

これを追捕つみぶの任となし

追捕は武士を以て任ず

というのが朝廷の本則だった。だからいまや海に陸に逃ちようさん散する離々たる敵影を見た公卿たちは、この習例をよい口実に、

「あとは、義貞まかせ」

とし、義貞もつい、

「まずは兵馬を休めろ」

と令して、みすみすここに長蛇ちようだをみのがしてしまったものではなかったか。

なにしても、ここは尊氏の僣倖ぎようこうというしかない。——彼の乗船、およびそのほか大

小の兵船は、乱離な影を明石海峡にみだしながら、ひとまず播州ばんしゅう室ノ津むろつの港へさして落ちたのだった。

僣倖といえ、海上での風向きも、その日は、尊氏に倖さいわいしていて、「梅松論」には、お座ざふね

辰ノ刻たつこく（午前八時）に出さる

俄に、西風吹きけり

是これはたつと云つて

追手なりければ

寅ノ刻とら（翌・午前四時）

ばかりに室ノ津むろつへ御著ごちやく

とあり、また。

もし順風なくば

一期いちごの御浮沈たるべきに

ひとへに

神仏の御加護なり也とて

下御所しもごしよ（直義ただよし）には

渡海のあひだに

舍利しやりノ御劍ぎよけんを

龍神へ向て海底しづめに沈らる

と書いている。これでも尊氏以下の兵庫脱出の困難さが、いかにあぶないものだったか、想像以上なものだったろう。

それとまた、あの不屈ふくつな直義すらが、その僥倖に感謝するの余り、自己の一剣はかんを波間へ投げて、船上から龍神を拝おろがんだという一事などもおもしろい。

新田義貞が鎌倉攻めのさいに稲村ヶ崎で剣を龍神へむかつて投とうじたという、いわゆる“龍神伝説”は、その地形条件などからも、つとに否定されているが、これによると、当時の武将間には（いや、民間一般にも）ひとつの龍神信仰といったようなものがあつたことだけは是認しなければならなくなる。

また、すでにそうした伝承心理が一般のあいだに根づくあつたとすれば、その心理を兵法に利用して、士気を振るわすなどのことは、兵家の常套手段でもあつた。義貞もしたろうし、直義もまたこのさいは、意識的にそれを演じて、

「われらの武運はまだつきぬところぞ。心落すな人々」

と、大いにその偶然を奇瑞きずいとして唱うたつたことであつたにちがいない。

けれど、これの半面には、脱落者が多かつたことも証拠だてられている。——おん船に従ひ奉る船三百余艘さうなり——とはあるが、べつの箇所では

さるほどに

おん供^{つかま}仕つるべき大将共

その中の七八人は

京都へ赴^ゆくあり

後日、降^{かうさん}参とぞ聞えし

などの記事もあるのだ。

このとき一方の旗頭たる大将たちが七、八人も降参洩れしていたなどは、決して少ない兵数の減少ではない。

——当然、たたかい破れて落ちてゆく船上には、落莫な感、悲痛な顔が、おもたく口をとじ合っていたことだろう。そしてこういう中に在る日こそ、その全体の上にある首将の人間そのものが、微妙に、末端の一兵士にまですぐ敏感なひびきをもって映つてゆくものだが、その点でも、尊氏のすがたにはなんのとげとげしさも沈痛な気色もなかった。さっぱり日頃とも余りかわりのない彼だった。

「やれ、着いたか」

と、彼はまもなく船上を立つた。そしてまだほのぐらい室^{むろ}ノ津^つの静かな朝をながめ廻し

て、

「浦人^{うらびと}をおどろかすな。ここに合戦はないとすぐ布令^{ふれ}ておけ。赤松、案内をたのむ」

と、赤松円心の人数を先に、室山^{むろやま}の城へその朝入った。

室ノ津は室の遊女でも知られている古い脂粉^{しふん}の港だが、時ならぬ軍勢の上陸に、町じゅうは戦慄を暗くしていた。

が、尊氏の軍令で、ほどなく、日頃以上な生業の活気に返った。室山の城へも湾内の兵船のうちへも、多くの物資や食糧が買上げられ、ここ兩三日、小さな軍需景気を見たのであった。

「まずは筑紫^{つくし}（九州）までも、海上、物に困らぬだけのお支度は、ととのい終ってござりまする」

高ノ師直^{こうしなお}からこう尊氏へ報告があつた。

出航の奉行は、彼と、赤松一族の信濃守範資^{のりすけ}（室山城主）とが協力でしていた。——
こころ播州^{ばんしゅう}の沿海はあらまし赤松円心の勢力下である。——尊氏が創痕^{そうい}の舟軍をひきつれて、ひとまずここへ寄港したのも一に円心のすすめであつた。

「円心。忘れはおかんど。赤松一族の助力なくば、尊氏も今度はどうなっていたかわから

ぬ」

「仰せられな」と、円心入道は猛気な人だが、尊氏の前ではつねに低目であった。「お味方であるからには、あたりまえなこと。あくまで大御所と喜憂も共にの所存でおさる。一に君の御人徳と申すもので」

「はて、まずい戦ばかりしつづけてきた尊氏に、なお、何の人徳などがあるだろうか」

「いやあの佐々木すらも、さように申しておりました」

「道誉が」

「失意のときこそ、総大将の人間のまことがわかる。この敗軍で、つくづく、足利の宰さいし相ようの御器量が一そう大きく眺められた、と」

「はははは」

笑い消して。

「負けいくさに感心するやつもないものだ。道誉らしいわ」

そこへ直義が迎えに来た。

城中の広間に、はや一同が顔をそろえ、出座をお待ちしているというのである。この日、さいごの評議をすまし、そしてこよい、尊氏はここを出航、筑紫へさして行くといつかね

てからの計画だった。

もとより敗戦は予定していたものではない。しかし、いついかなる変で、都落ちを見ま
いものでないとして、尊氏は、とうから腹に副線を持っていたらしいかたちがある。

ゆらい、九州の武族は、強豪な聞えが高い。尊氏はまだ六波羅のころから、筑紫の少
式や大友の族党へはいちばい恩義をかけていた。そのほか、蒔いておいた胚子も多い。
で、彼の九州落ちは、あてなき落人の漂泊とは違い、ひそかに期するところもあつた
のだ。

その期するものとは、いうまでもなく、捲土重来、大挙して、都へのぼる日のこと
でしかない。——それにそなえるべく、今日最終の室ノ津会議で、万端の手はずもきまッ
た。

すなわち。

この播州地方には、赤松円心一族を防ぎにのこす。

また、備中には今川頼貞、頼兼の兄弟を。備前には、尾張親衛、松田一族を。

さらに安芸には、桃井、小早川一族を差し置く。周防には大島義政、大内豊前守。長門
には守護の厚東一族を。

そして四国は、細川阿波守や細川定禅の軍で固め、山陰にも仁木、上杉の族を配しておくなど、すべて後日のための考慮がなされた。

すべて他日のための布置ふちだということは誰にもわかる。尊氏のさしずにもその遠謀にも寸分、余すところはない。

「……したが？」

と、諸将は不安をのこした。

やがて衆座のうちから、大内豊前守義弘がすすんでその疑点をただした。

「おそれながら、おうかがいつかまつりますか？」

「豊前か——」と、尊氏は眼をやって「何事よの？」

「仰せのように、山陽、山陰、四国へまで、この御軍勢を分けて留めおかれますは、筑紫へ渡らせられる宰相のおん供には、どれほどな兵力がお付添いできましようか？」

「さ。……どれほどあとに残るかな。直義」

訊かれた直義はまた、かたわらの師直を見て。

「師直。千五、六百人程はひッさげて行かれようか？」

「いや、とんでもない」

と、師直は首を振った。

「その半数にも足りませんまい。せいぜい、筑紫落ちのおん供は五、六百人に過ぎぬかと存じられまする」

「それでいい！」

と、尊氏はためらいなく二人の横から断をくだして。

「手勢は五百もつれておれば充分。尊氏の兵力は行く先々においてある。——が、師直はいま何と申したか」

「はっ。……？」

「筑紫落ちといったな。たわけめ。尊氏の下向^{げこう}は、敗れたりとはいえ、落^{おちゆうど}人の身隠しなどとはわけがちがう。いうならば、筑紫びらきと申せ」

「これは、師直の失言でござりました。平におゆるしを」

「余人ならともかく、執事のそちが知つてないはずはない。かねがね筑紫の武者どもへは、他日のため、何くれとなく手を打つておいたことぞ。尊氏はその刈入れ^{くだ}に下るのだわ」

こう師直を叱つておいて、尊氏はそのおもてを全体の武將たちへむけ直した。そして筑紫入りにいたずらな大兵は要すまいという見解に次いで、

「むしろ、瀬戸内の海路こそ、あとの大事。もし沿岸の国々が敵手に落ちたら、わが再上洛もむずかしくなるだろう。尊氏の先途を案じるよりは、各はそれぞれの国元にいて、尊氏が二度の上京を鶴首かくしゅして待て。その日は決して遠いさきのことではない」

と、説明もし、またことばよく励ました。

大勢のうえに、どよめきと明るさがただよった。敗戦のただよい以来、やっと、よみがえってきたいささかな活気であった。——筑紫びらき、ということばが諸將の口からしばしば談笑になつて流れたりした。

軍議の席はそのまま酒宴の夕となつた。晩には、赤松一族をこの地にのこす以外、みな船へ移つてそれぞれの国へさして別れ去る——。その別宴でもあり、またこれは、筑紫びらきの門かどい祝いであるぞ、とも誰かが言つた。そして、かたちばかりの茶碗酒に他日をちかいあつたのだつた。

しかもまた。この宵、久しく、尊氏へも消息を絶つていた一色右馬介が、折も折、早馬でここ室ノ津へいま着いたと、城門からの知らせが入つた。

「何。介すけがいま着いたと」

待ちに待つていた者だ。しかし尊氏はなぜか諸將のいる座をついとはずして、べつな一

室へ移つて行つた。そして、これへと侍に命じ、そこで介を待ったのだつた。

おそらくは、ひそかに、事の不成就ふじようじゆを、胸にえがいていたのではなかつたか。

もしこのさい、ここへもたらしめてくる介の報告が、かねがねの切望を裏切つて——持明院きみ統の皇きみによる院宣いんせん降下の不成功を告げるものであつたら——どうなるか。それは、はなはだまずいものになる。

時も時だ。大きなうつろを味方にまねき、ひいては、他日の結束にも亀裂きれつを生じまいものではない。「と、なつては一大事」として、尊氏もそこで介を待つ間は、吉か凶かに、肋骨あばらもいたむような胸騒むなざこいをいだいていたにちがひなかつた。

「……………」

やがて侍の声がし、介だけが、そつとそこへ入つて来て、平伏した。

例の雲水うんすい姿である。だが髪もひげも伸びに伸びて、乞食僧のように疲れはてた影は、尊氏の目もいたむほどだつた。

「おう、介すけか」

「申しわけもございませんぬ」

「なに、申しわけがない？」

「余りにも日時をついやし、それに今日まで、何らのお便りもつかまつらず……」

「あの乱軍つづき。しかもそちは都の中だ。いちいち仔細の連絡がとれぬなどは仕方もない。それよりは、結句、どういう情勢か。……持明院統の方々へ、ちかづきまいらす手づるは得たのか。また駄目か」

「およろこびなされませ。首尾ようお志は院へ聞え上げられました」

「えっ。かなえられたと?」

「はいっ」

「では院宣の御降しはあるのだな」

「しかと」

「……が、その御使は」

「すぐてまえのあとよりこの室ノ津へお着きあるはずでございます」

「そうか」

尊氏は初めてその胸をのばして大きく呼吸した。そして介の労をいたわると、介は、
「いえいえ。てまえのはたらきなどは微々たるもので」

と、恥じて言った。

「こうさつそくに、事のはこびがついてきましたのは、まったくお差向けの薬師丸が双ならびヶ岡おかへ見えたからでございます」

「お、薬師丸が、そちの許へたずねて行つたか」

「されば、その薬師丸のみちびきで、資名どのの弟御、三宝院の僧、日野賢けんしゅん俊御坊にお会いできたのでございました」

「ではその賢俊より院へ」

「はい。その間かん、朝廷方のきびしい御監視をくぐるため、ことばにも現わせぬ苦心は数かず々ずでござりましたが」

「ム、さもあろう」

「が、賢俊御坊には、これぞ持明院統の時節到来と、必死な御助力でございました。そこでついに光厳上皇の御院宣を拝受いたし、それを肌身に秘めるやいな、てまえが京を立つ日と同時に、賢俊御坊と薬師丸のふたりも、讃岐さぬきへもどる干魚船ほしかぶねの船底へ身をかくし、淀の口より海へのがれ出たはずにござりまする」

宿望の院宣はもうお手に入るばかりなのだ。

尊氏がどんなに狂喜するだろうかを、介は、期待していたが、案外その人にはなんの表

情もうごいてこず、かえって、介のことばのはしに、ふとおもてを曇らせて。

「相違ないのか。介」

「逐ちくいち」申しあげたことに、何の相違がございましょうや」

「しかし、院宣の御使みつかいが、はたしてこれへ御着ごちやくあるやいなや、そちのはなしでは、ちと心もとなく案じられる。——讃岐さぬきがよいの干魚船に潜んで海へ出られたということだが」

「や。申しおくれました。まったくは佐々木道誉の計らいによることでございました」

「道誉の？」

「病のため、兵庫から御陣を離れて、近江へ帰るのだと申す道誉が、途中、双ヶ岡ならびおかの法師へ使いをよこしましたので、さつそく彼の屯たむろへまいって行き会いましたような次第で」

「む」

「聞けば、病とは表向き、云々しかじかで帰国するとのうちあけばなし。で、じつはこなたも、極秘の院宣を、いかにせば無事におとどけないうるか、御使みつかいの賢俊けんしゅん御坊も、おなやみの最中と、事を割つてはなしますと、思案のすえ、ならば供のうちに、備前飽浦あくらの佐々木党の一人、加治源太左衛門安綱がおる、これは海上の案内にくわしい侍、その者の才覚におまかせあれとのことだったのでございまする」

「では、源太左衛門安綱が、御使の賢俊と薬師丸を、送って来るのか」

「さらに道誉の家臣、田子大弥太も干魚船の水夫かことなつて、淀をまぎれ出で、海上これへまいる手はずとなつています」

「そちはなぜ、べつに？」

「万一のさいには、誰がわが殿へこれをお知らせいたしましょうか。それも思い、また一刻もはやくと、てまえは陸路をムチ打つて先にまいったわけでござりまする。八幡はちまん、天の御加護もありましょう。今明中には、御使の一舟が、沖へ見えるに相違ございません」

ここまで聞くと、尊氏は初めて高い感激に体じゆうを耐えられない程なものにした。幼年からの愛臣すけ介のことなので多くは口に出さないが「よくぞ。よくやった！」と見ている眼が、介へも映うつつてかつと彼の心を熱くさせた。無言のままで二人はつい涙ぐんでしまつていたものだった。

が、すぐ尊氏はたちあがつて、

「幸いさいわ、こよいここを別れ去る諸国の大将どもへ、さつそくこの吉報を披露しておこう。」

またそちはただちに港の船をひきつれて、御使の迎えに行け。播磨灘の沖あいまで」と、言いのこして去つた。

やがてしばらくすると、彼方の広間なる大酒盛りの席が、一瞬しいんとひそまった。それからである。尊氏のことばによつて、持明院じみょういんとう統の院宣いんせんここにわれらへ降る——と、満座へ発表されたものであらう。室山の城もゆるぐばかりな歓声が突然わつとそこで揚がった。

「それつ、船を出せ」

「御使に万一あつては」

と、その席からも、ただちに、数人の将がどやどや駈け出し、介もまた、人々と共に、港のほうへ駈けていた。

つづいて、尊氏以下、諸軍もみな城を出払つて、室の港むろからそれぞれの船へ乗りわかれた。

こうしたうちに、

「おう、見えた」

「御使の迎えに行つた船がもどつて来るわ」

と、港いっばいに蕩揺とうようしている無数の船影のうえに、どよめきがわいた。

まさしくそれであらう。この夜は二月十六日であつたから雲間にはまろい月があり、鱗うろこ

のような波光のうちを、その一舟とまた一群の船列とが、近づくほどにあざらかとなつて来る。

院の御使みつかいの船は、まもなく、尊氏の乗船の横へ着いた。すぐ右馬介かいぞの介添えで、自船から大船の上へと移つた日野賢俊けんしゅんと薬師丸の影は、一とき湾内の者の視線しゆくを肅とあつめていた。

はやくも大船の胴ノ間どうまでは、むしろを清めて、尊氏が座をただして御使を待ち、直義とほかの諸将も艦ともへかけて身を一樣な敷波しきなみにして平伏していた。

「あなたが足利の宰相尊氏どのでおわされるか」

賢俊のことばであつた。

個人的な応答と察して、尊氏がしかる由をこたえと、賢俊もまた、

「拙僧は三宝院ノ僧正賢俊と申すものですが、つい先つ頃までは、院のお側近そばう仕えたてまつっていた中納言日野の資明すけあきにおざりまする」

と、その身分を一応あきらかにしたうえで。

「このままでは世はどう成りゆくことでしょう。永劫えいごう、乱に乱を見ねば相なりますまい。かねがね、後伏見、花園、光厳の三院におかれましても、深くおむねを傷いためられていたと

ころです。そこへ、はしなくあなたからのお働きかけでした。身を僧門に隠してはおりましたものの、この賢俊とても、同憂でない者ではございません。——御密使の介すけと薬師丸から委細を聞くやいな、よろこんで、いや身命を賭として、このお仲立ちに当った次第でございまする」

「……………」

「足利どの」

「はっ」

「同慶のいたりです。ここに不肖ふしょう賢俊を以て、すなわち、光厳上皇の御院宣を、足利家へお降くだしあらせられました。つつしんでお受け申されい」

陣中、三方の用意もない。

賢俊はそれの奉書ほうしょと、それに添えられた錦の旗の一卷ひとまきとを、両の手に持ち添えて、すこし前へ身をすすめる。尊氏は無言のまま拝受してあとへさがった。そして、もいちど奉書を押しいただいた上で畏るおそ畏るひらいてみた。

月のひかりに紙の白さがなお白かった。光厳（先の帝みかど）の綸旨りんじには、

義貞と与党よたう一類ちゆうばつを誅伐しつぱくして

天下平穩の来らん日を

一日も早かれと

汝の忠誠に待つ

という意味のものだった。

これによれば、相手は大覺寺統でもなし後醍醐でもない。義貞こそが当の敵だ。そしてこの綸旨に敵対する義貞は、やはり朝敵逆賊の名をまぬがれないことになる。

尊氏も、ここに錦の旗を持った。すでに名分においては同等な立場となった。ただ錦の旗と錦の旗。天下の人心が、そのいずれを選ぶかだけにある。

「直義」

尊氏は、そばへ呼んで。

「賜わった院宣は、そちも拝読しておくがよい。そしてすぐ全軍の船へつたえろ。終つたらすぐ纜解いて、筑紫へくだるぞ」

直義は、かしこまつて、親船のみよしから太音声で味方へ告げた。

「聞けよ人々。新院光嚴の御使より、ただいまわが足利党へ、天下平定の綸旨がここへ降つたぞ。——義貞一類の徒を誅伐して、世のため、忠誠をぬきんでよとの院宣だ。——」

―そのしるしをここにかかげる。仰ぎ見ろ味方の衆

と、一人の郎党に命じて、長い竿を持たせ、そのさきに、錦の旗を解いて、月の空へ高々と振らせた。

声は船から船へ、一ときのまに、つたえられてはいた。夜目ながら錦の旗も月影に見たことだろう。やがて港じゅうが沸騰ふつとうしたようにわああツという武者声を捲きおこした。そしてすぐそれは勇ましい櫓ろひびきや水みづ 飢うと変じて、

「さらば後日」

「さらば、またの再会に」

と、呼びあいながら、かねての謀しめし合せどおり、船列の端から、続々、沖へさして別れ出て行つた。

尊氏の船も、この夜、室ノ津を離れて西へ去つた。

多くは、それぞれの自国へさして一たん帰帆きはんして行つたが、あらかじめ覚悟のとおり、尊氏の船列には五、六百の兵しか扈從こじゅうしていなかった。

その中に、日野賢俊もついて行つた。

彼はそのまま陣中僧として、尊氏のために犬馬の勞をとり、後、室町幕府成立の日にい

たツては、その枢機すうきにまで参加した。

元々、日野家は貴族中の名門でもあり、これが機縁で後には足利家とも通婚した。そしてかの東山殿（足利義政）の妻として、利殖に長けた、政治内争をみだし、ついに応仁ノ大乱の一因にもなったといわれる日野富子という室町型の一女性なども、この日野家から出たひとだった。しかしそれは、はるか後代になつてのはなし。

ここでは、尊氏にせよ賢俊にしろ、明日の運命すら何でよく知りえようか、である。――わけて尊氏はまだ茫洋な感だつたろう。行くての九州に、なお何が待つかも、予知はできない。

味方の一将、石橋和義かずよしを、途中の備前で下ろし、備後鞆ともノ津に半日ほどいて、またすぐ西下をつづけた。

そして、長門にとどまつた。

すると月の二十五日。

筑紫の少貳貞経しやうじの子、頼尚よりひさ兄弟が大宰府だざいふから一族五百余人をひきつれて、

「筑紫びらきの御案内に」

と、迎えに来た。

これへの迎えも、来る方は容易ではなかったのだ。九州諸党の多くは朝廷の召しに応じて京都へ出ていた。——大友貞載さだとし、上島惟頼これより、阿蘇惟時あそこれとき、菊池武重——みな宮方として早くから義貞の麾下きかに付いている。

そのうちの太友だけは、海道箱根ノ合戦で、道誉や塩冶高貞えんやらと共に、足利方へ寝返っていたが、なお他の九州宮方は健在なのだ。——月のすえ二十九日、尊氏は頼尚の案内で、海路、赤間ヶ関から筑前芦屋あしやノ浦へ渡ったが、それは薄氷はくひょうを踏み行くような敵地上陸にことならなかった。

勾当こうとうの内侍ないし

ちようど、尊氏の流亡軍が、筑前芦屋あしやノ浦へつき、ここに初めて九州の地をふんでいたころ——

その二月二十九日。

都では、改元の令があつた。爾今じこん、年号を、
延元えんげん

と改められ、前ノ大納言花山院亭の仮内裏では、発布の神事がおこなわれていた。また同日を期して、このたびの大戦大勝の賀をのべる貴顕の馬やら車やらが混み合つて、三条洞院の四ツ辻に、仕丁たちの間で「くるま喧嘩」が起るほどの騒ぎだった。やれ、車をぶつけたとか。

車のあるじが礼を欠いたとか。

車副の侍から、牛飼の童まで、みな気が立っているのである。そしてみな戦勝の驕りに酔っているのでもある。

なにしろ、尊氏の筑紫隠れは、大きな反映をこの洛中へ投じていた。それを「尊氏退散」とさえいつて、ふたたび、花の都が地に降りたような景観を俄にしていたのだった。

しかし、ほんとの姿にはまだまだ遠く、いたるところは焼け跡だらけな洛内なのだ。——その中へ過日來の兵庫からの凱旋軍が、何万となく入りこんで、各勝手屯に、空地や空館を占めてゴツたがえしているし、日が暮れると婦女子は一人で歩けぬような戦勝の都である。——だが内裏へ参内するほどの人々は、公卿といわず、武将といわず、相見るとびにこう祝福しあっていた。

「やあ、おめでとう」

「いや同慶、同慶」

ここにたれよりも百戦の功を燦と身にあつめていたものは新田義貞で、きのう今日の彼は稀世の名将みたいにあつかわれていた。——ソノ日義貞朝臣アソシニハ、天下ノ士卒ノ将トシテ、降人数万ヲ後二召シ具シ、花ノ都ニ歸リ給フ——と彼の凱旋をたたえた古記はそのまま義貞の風采と見てもよからう。年は三十のなかば、元々の美男でもある。

そのうえこのほど官位も、

左近衛さこんえノ中将

に昇のぼされ、弟の脇屋義助わきやよしすけは、右衛門うえもんノ佐すけとなつた。

彼の得意時代が今や来たかのようなのである。今日も親しくみかどに召されて「以後、山陰山陽十六カ国の事を管領せよ」との朝命を拝ぎやうして御座ぎやざのあたりをさがって来たところだつた。

近く、義貞はまた、尊氏追討ついでうの軍をもよおして、再び西下さいかしなければならぬ。山陰山陽十六カ国にわたる軍令権のみゆるしは、その拳こぶしにあたつていちいち都へ使いを往返おうへんしてはまにあわないのですべてをゆだねられたものではあつた。けれどこれもまた左中将義貞の名をいよいよ三軍のうゑに重からしめるものであることは言げんをまたない。

「ここ七日以内に」

と、義貞はその発向の日どりまでを今日はおちかいして来たのである。一族將兵たちの休養もだが、自身もまた去年いらいの血臭い生活をこの日に少し憩いこいたかった。……で、君からいただいた賜酒ししゅに染まって、頬にはほのかな色が出ていた。憩いの色といってよかった。

「お。……左中将どの」

すると、一簾いちれんの蔭からさし招くものがあつた。たれかとみれば、これも近ごろ勲功の臣として、内裏でも、また外でも、かくれない羽振りの人、千種ちぐさの頭とうノ中将忠頭ただあきだった。「左中将どの。一度折入つて、おはなし申したい儀もあるが」

「うけたまわりましょう。ここでもよろしければ」

「いや、ここではちと」

千種忠頭は間まを措いて。

「尊氏追捕ついぶのために再度の御発向もおひかえあること。お忙しきは察するが、貴邸へ伺うてはいかがであらうか」

「お待ちする」

「今宵にでも」

「けっこうです。ただ近来家中も急増して手ぜまのため、旧居は弟の義助にゆずり、それがしは高倉ノ辻にいます」

「御新亭の方か」

「いや新居などではありません。もと足利直義ただよしのいた旧館をそのままつかっているわけ
で」

「ならば人目も遠くてなおよい都合だ。じつは自分のほかに、もひとりお連れしてまい
お方もあるしの……」

「あなたのほかに」

「む。それは、女にょしょう性のお方とだけを、ここでは、おうちあけ申しておこう。くわしく
いってしもうては色も香も浅くなる。ま……いずれ晩に」

忠顕も忙しげだった。右弁官うべんかんの局きよくから迎えにきた藏人くらうどと袖をつらねてすぐ立ち去り、
義貞はそのまま退出して、高倉ノ辻へ帰った。

私邸に帰れば彼を待つ客や軍務はここにも山とつかえていた。『時の人義貞』にまたた
く春の半日は暮れてしまう。「所用しよようあれば、あとの時務は一さい明日聞く」と表方へい

いわたして、湯殿の湯けむりに浸^{ひた}つたのがもう約束の宵だった。そろそろ千種忠顕が見える頃である。

「折入つてとは？」

千種とは、刎^{ふんけい}頸^{なか}の仲^{なか}だ、悪いこととはおもわれない。

それよりも、その千種が連れてくるといった女性とは誰なのか。そのことのほうが彼には昼から気がかりだった。思い当りがないでもなく、あるいはと、心が浮いてくるからでもある。

左近衛^{さこんえ}ノ中将^{しよ}に叙^{じよ}す

との恩命に接したのは、さきごろ兵庫合戦でまだ在陣中のことだったが、凱旋の日、さつそくそれのお礼とご報告とをかねて参内し、たいそう面目をほどこしたのみならず、宮中の慣例にもないほどな、おもてなしを賜^{たま}わったことがある。

後醍醐は御酒がおつよい。諸卿はみな知っているが、義貞は正直におあいてしていたので、ついに酔いつぶれてしまったらしく、やがてふと気づいたときは誰もみえない朧^{おぼろ}夜^よの一^{でん}殿^{でん}だった。のみならず、目をさますとすぐ楚^そ々^そと薬^{やく}湯^{とう}をささげて来てやさしく気分を問うてくれた一女性がある。

更衣こういとか典侍てんじとかよばれる深宮しんきゅうの女性にちがいない。いよいよ恐縮して、義貞なかつは半ば夢心地で藥湯をおしいただいたが、あたりの花明りに、ふと、そのひとの顔を見たせつな、

あ、草心尼？

と、叫びかけて、おもわずはしたない驚きの目をしばらく彼女の花顔かんはせから離しえなかつたものだった。それほど彼女の眉目みめは若き日のかの草心尼に似て美しく眩まばゆくもあつた。忘れかねて。

そのご、このことを忠顕にもらすと、忠顕がまたそれを、みかどのお耳へ達したらしく、みかどのおことばとして「——左中将がそれほど忘れかねる女なら、左中将へつかわしてもよいの」と、仰せられたということだった。——それもまた煩惱ぼんのうの身には、忘れかねるみことばではあつた。

まさか。

よしんば、帝がほんとにそう仰つしやつたにしろ、女を賜うなどとは、かりそめのお戯れにちがいない——

それとは義貞も心で打消してはいたが、やはり多少はそぞろめいて、その折、千種忠顕

から女の名やら素姓などは訊きさぐつてみたのであった。——で、知りえたところによると、彼女は一条行房の妹で、宮中での御所名は、

勾当こうとうノ内侍ないし

と呼ばれているという。

内侍とあるからにはもちろん御寝ぎよしに侍る御息所みやすんどころや更衣こういにならぶ女性のひとりにちがいない。高嶺たかねの花だ、訊かぬがましであつたよと、義貞はなおさら失望したものだつた。

けれど、栄達と名声と、彼の昨今には、彼を満みたすものが充分だつた。さらには、尊氏追討のもう一段階もひかえている。彼の失意も空洞うつろとまではならず忘れかけていた。そうして、せつかく忘れかけていたものである。またも思い出させるなどはあの忠顕も罪がふかい。——彼が言つたこよいの同伴者とは誰なのか。——それに代るべき女でも連れて来る気か。でなければ、まったく何かべつな用か。

「……………」

湯ぶねのうちに、義貞はうつとり思い耽おもふけつていた。外はおぼろ夜らしく、湯殿の窓にも花の影がサヤサヤあつた。

ふるさとの花、世良田せらたノ館たちの桜もふとおもい出されてくる。恋が成つても破れても、男

には忘れえぬ女が生涯に一人はかならずあるというが、それが自分には草心尼であつたかと、義貞はいま知つた。

その人と、勾当ノ内侍とは、瞼のうちに、けじめもつかぬほどよく似ている。まだ髪をおろさぬ若後家ごろの草心尼と――。

いや草心尼といえば。つい先頃も彼には妙なことがあつた。

摂津の戦場で、兵に捕われて来た旅の母子おやこがあり、見ると、それが彼女と覺一だつたのだ。

しよせん尊氏は亡びる。尊氏を頼つて行つても行くすえ頼む人にはなるまい。自分の陣にいたがよい、と――それはもうむかしの美しさは褪あせた尼なので色恋などでなくいたわつてやつたものだが、無断でいつか見えなくなつてしまつていた。おそらくは、以後の戦場にまき込まれたか、路頭に迷つてゐることだろう。

「……殿。……殿」

湯殿の外の声だつた。

「新兵衛か」

「は。新兵衛にございますが」

「いま出る。いますぐ」

「お耳へまでちよつと」

「千種どのが見えたのであろう」

「さようで」

「いいつけておいたように離亭はなれのほうへお通し申しあげておいたろうな」

「はい」

「おひとりか」

「いえ、女性にょしやうの御方と」

「老女か。お若い方か」

「み車を降りさせ給うたとき、よそながら拝しただけでございますが、花うるしのきらやかな女御車にょごぐるま、おん姿といえ、夜目にさえ藤ろうやかなお方のようにぞんじられました」

「ふ……ム」

義貞は内で体を拭いていた。壮者のゆたかな肉塊しむむらは、拭くそばからまたすぐ汗になってくる。

用意されていたことなので、主客はすぐ酒になっていたが、義貞はまだ、忠ただ頭あきの来意

がとんとわかっていない。客は忠顕だけで、連れていると聞いた女性は、この場には見えないのである。

「いや、おひきあわせはあとにいたそう。その前にちとすましておかねばならぬおはなしもありますから」

と、問わぬ先に忠顕のほうから言った。そのひとは、どこか別室にでもおいて、まず用談を先にとしているらしいのである。

「仰せください」義貞はさいそくした。「——ここは離亭はなれです。呼ぶまではたれも来るなと、家臣どもも遠ざけてござりますれば」

「じつはの……」と、語気を凝こらして「佐々木道誉の降参についてじやが」

「ほ。そのことなら義貞も聞いていました。さきごろ大江山より道誉が使いを出して、あなたの御門へ、降参のおとりなしを、すがって来たとか」

「いやこの忠顕だけに来たわけではない。准后じゆんこう（廉子やすこ）のおん許へも懇願の使いを出して、るる、恭順きやうじゆんのこころを陳のべ、前非を悔ていいておる態ていなのだ」

「はははは。およしなさい、およしなさい」

義貞は手を振った。

「あの道譽が、いまさら前非を悔いたなどとは、笑止千萬しょうしせんばん。なんで真顔に耳が仮かせましようか」

「なるほど。左中将どのには、あくまで御反対と聞いていたが」

「されば宮中にても御内議ありとうかがったせつ、義貞は強いじう不本意でござると、申したことはたしかです」

「お嫌いかの。あの人物は」

「さような感情からではありませぬ。去年、海道諸所の合戦では、二度まで這奴しゃつは寝返りをやっておる。およそ廉恥れんちを知らぬ男でしょうが」

「しかし彼のみではない。いまの武將は」

「いやいかに道義が廃すたつた今でも彼のごときは全く稀まれです。稀ぬえれな鶴ねえです。箱根合戦の後陣ごしんから裏切つて、この義貞を死地におとしたのも彼の才覚。またぞろ尊氏の非運をみるや、尊氏をすてて兵庫から脱陣したものの、京を通らねば近江へも行くことならず、途中の大江山で立ち往生をしているのでしよう。……そしてくるしまぎれに、准后じゅんこうへすがり、またお気のいいあなたをだまそうとしているのだ」

「さ。それで困る。元々、佐々木道譽なる者は、元弘げんこうの年、みかどが六波羅の獄から隠

岐へ流され給うた日の出雲路いずもじまで、その御警固にあたっていた人物だ。——さるがゆえに、みかども准後の御方も、彼は情けある武士よと今もって信じておられる。また深くそのせつの道誉の忠義をお憶えおぼあらせられて、ここは助けとらせよとの叡慮えいりょでもあるらしい」

「……………」

「ところが、左中將には御不服との聞えがある。いま御辺につむじをまげられたら、これまた朝廷のみならず宇内うだいの大事といわねばならん。そこで忠顯がたれのおさしずというでもなければ、ま、篤とくとお胸をうかがってみたいと存じてまいったわけだが」

「ご苦労でした」

義貞は冷たい杯を手を挙げて白く笑った。

「申しおくが」

義貞は、あらたまつて。

「准后のおぼしめしは情じやうとしてわかりますが、義貞の不服は一切私心ではおざらん。ただ軍いくさのためを思うのみです。せっかく、戦勝の瑞氣ずいきにわいている今日、道誉のごとき二タ股者、いや三ツ股者の降参をゆるすなどの過誤おかを冒してはと」

「が、人には功罪いずれもある」

「道誉に何の功がかぞえられましようか」

「まだ北条の勢威もさかんだった正^{しょう}中^{ちゆう}の頃から、彼のみは、幕臣でありながら公卿方に交^{まじ}わり、探^{たん}題^{だい}の弾圧がくだる日も、蔭で宮方をたすけておった」

「日和見^{ひよりみ}者の打算、それなど、功というには当りますまい」

「いちがいに打算とのみは言いきれん。笠置落城^{かさぎ}後、あまたな公卿は斬られ、みかどは六波羅ノ獄に囚^{とら}われ給うなどの日においてさえ、彼は北条の目をぬすんでまで、みかどにお尽し申しあげた」

「それはある」

「また、隠岐護送のおん供の途次^{とじ}においても」

「すでに最前^{かんこう}うかがった」

「さらに、みかど還幸^{かんこう}の日となつても、建武の御新政始めには、御内帑^{ごないどう}のくるしき、ひと方ならず、楮幣^{ちよへい}（紙幣）を発兌^{はつた}して、おしのぎあつたほどだが、そのおりもまた道誉は、私財をかたむけて、宮廷の御費用をおたすけしておる。……いやこれを知る者は、准后^{じゆんこう}の御方だけだが……いまとなつては申してもさしつかえあるまい。准后のお暮らしなども、ずいぶん彼によつて、当時は息をおつきになつていたものだそうな」

「千種どの」

「ム？」

「あなたもまた、彼にみつがれていたお一人だったのか」

「受けんとはいわぬ。彼のみつぎをうけぬ大官はまずないからの。なんとなれば、道譽の佐々木支族は、南海から出雲地方にまでおよんでおる。それらを通じて、彼は海外との交易をやらせ、およそ都に見られる唐物からもののすべては佐女牛さめうしの門から密々市いちへ捌さばかれていた物といつてよい。そして朝廷の大官は日本政府の名による印可符いんかふ（許可証）を彼の交易船に貸していたというわけでもある」

「お待ちください。それは商人あきびとのすること。商人の功かは存ぜぬが、軍功ではありませんまい」

「軍功ではない。しかし軍功にもつながるものだ」

「義貞は武人、軍は論じますが、商論はぞんじません」

「元々、道譽は純な武将とはいいいかねる。半商半武人とも申すべきか。そうした人物も経世の面ではまた要なしとせぬ。まずは彼の旧領を助けおいて、後日、その能才を得意な方に働かせるぐらいな寛度もあつてよかろう」

「はははは。ご熱心よな。仔細の商論は伺った。お取引はご随意に」

「それではこまる」

「と申されても」

「はて。このままでは二人の仲もついに論争の物別れになりかねん。左中将どの。もう止よそう。こよいは酒なと酌くみ給え」

「酒はすでに酌んでいる」

「いやお連れしてまいった御方を加え、なごやかにと申すのだ。お待ちあれ……」

何思ったか、忠ただあき顕はなれは離亭を出て、ふと何処かへ立ってしまった。

義貞は独り酌ついでは飲んでいた。忠顕が去ったあとのうつろは、いやおうなしに彼に自分を考えさせてくる。

道誉の無節操を罵ったが、義貞といえ、北条遺臣の中先代軍からいわせれば、主家に弓をひいた離反者のほかではなく、天下の武門あらましも寝返りの前科者であらぬはない。

「つまらぬ強情を」

と、義貞はかえりみて、忠顕との論争もやや後悔されだしてきた。それは即そく、准後の廉や子すこへたてをつくことにもなるからだ。

おそらく忠顕のおとずれは、廉子の命で来たものだろう。——とすれば、彼が連れて来た女によしやう性せいというのも、あるいは、准后腹心の局つぼねのひとりかも知れぬ。

「目をつぶろう……」

義貞は自我をなだめた。准后と事を構えて争うなどはおろかである。また争って勝てツこはない。現朝廷の姐だつき己である。いつかは女によそう奏そうの難なんに会おう。そのとき、腹をたてて弓をひけば、自分もまた道誉の無節操と似た者となるしかない。

すくなくも自分の忠誠は現帝の御理想へささげているのだ。道誉のごとき男、尊氏のごとき者と、同列であつてはならない。産うぶすな土つちの神も照しょう覧らんあれ願がん文もんの誓いはきつとつらぬいてみせよう。——ここにただ尊氏をさえ滅ぼしてしまえばだ。道誉一人の存否などは問題でない。どうにでもなる。そのどうでもいいことに、准后のごきげんを損じ、忠顕と気まづくなるなどは、愚であつた。おろかしさよと、ようやく、彼の酒氣が身のうちでほのぼのと色かもを醸かしかけていた。すると、そのときである、

「……お召しあそばしましたか」

と、どこやらで声こゑが匂におう。

きれいなせせらぎの階音にも似た声こゑ音おとには氣のせいかわえがあつた。

「たれだ？」

「わたくしです」

「わたくしとは」

「……………」

答えにつまって、そして羞恥^{はじ}らつてでもいるような気配^{おぼろ}が、臃^{こうらん}な勾欄^{こうらん}のあたりでしていた。その間には、細殿の簾^すが垂れている。義貞はもどかしくなり、われから立つて、簾を押しはらった。簾の目にたかっていた花の幾ヒラが舞つて、その下に手をつかえていたひとの黒髪にもハラとこぼれた。

「や、そなたは」

「勾当ノ内侍でございまする」

「……………これは」

義貞はあきれた。茫然と口もきけなかった。

声で、もしやと思わぬでもなかったが、あまりに欲^{ほっ}していたものが余りにたやすく目の前におかれた驚きの反作用が奇異な戦慄にもなるのであった。

「はて、人の悪い」

義貞は、胸の戸まどいを、ふとそんな眩きにして。

「では、千種どのが、こよいお連れあつた女性というは」

「私でございました」

内侍は、どこかに怯え^{おび}の翳^{かげ}を持ちながらすかに答えた。

「お召ゆえ、この離亭^{はなれ}へ罷^{まか}れと仰せなので、まいりましたが」

「いや、義貞は呼んだ覚えはない。ないどころか、連れがそなたとも知らなかった。して千種どのはどこに」

「はやお帰りになりました」

「えっ。帰った？」

ふしぎな行為をするものだ。なんでこんな謎めいたまねを彼はするのか。

義貞には、忠顕の腹が、彼の腹芸みたいな行為が、

「妙な？」

としか考えられない。何かウラが？ とさえ疑われてくる。

しかし残された勾当ノ内侍が、ひとり残っていることをすこしも疑っていないのは一体どういうわけだろう。義貞がそのことをただすと、彼女は消えも入りたげな姿をみせてや

つと答えた。

「どうぞおそばにお置き給わりませ。内裏のおいとまも今日を限りに、いまよりはお館に
いるようにとの、仰せつけを畏^{かしこ}んでまいりました。ふつつかな者ではございますが」

「仰せつけ？ ……。はて、たれの？」

「もとよりお上^{うえ}の」

「みかどのおことばだと仰つしやるのか」

「くわしいことは千種さまから、はやお耳かとぞんじます」

「いやなにも聞いていない」

「まだ、なにも」

「まったくなにも」

「……………」

彼女は初めてうろたえの色をあらわした。しずかでいた眸よりは、心^{こころ} 噪^{さわ}がしい眸の
ほうが一^{いち}ばい美しさを増していた。とつぜん意中の者同士がなんらの前提もなく密会の機
にめぐまれたようなときめきをすら義貞はとたんに覺えた。

ともあれと、彼はべつな小部屋へ彼女を誘^{いざな}い入れた。

「内侍。そなたのいうに従えば、そなたもこのままいることを、承知のうえで今宵これへ参つたように聞えるが」

「はい。もしお厭いといなくば」

「それがわからぬ」

「どうしてですか」

「みかどのお心も」

「でもお上には左中将との一約、ぜひもなければと私へお言いふくめでございました」

「約束と仰せられて」

「はい」

「……約束とな」

あとの呟きはほとんど口のうちだった。義貞は心のちぢむ思いがした。忠顕から洩れ聞いていた叡慮とはやはり一時のお戯れではなかったのか、と。

どうしよう。急に彼は惑まどった。むかしには源三位頼政げんざんみが菖蒲あやめノ前まえを主上から賜わったというはなしはある。が、自分の上にそんな僥倖がめぐんで欲しいなどとは思ひもしていなかった。——忘れかねるといふ想いを率直に忠顕へ洩らしただけのことである。もしこの

勾当の内侍がみかどにとって寵幸ちようこうもただならぬ愛妃あいひであつたとしたら、それをねだつた自分はいとも罪深い者になろう。恐懼きようくといつても言い足りはしない。ただただ申しわけないかぎりである。

彼のそうした容子がふと内侍を不安にさせてきたのかもしれない。急に、つきつめたその眸に涙さえ差しぐんで。

「左中将さま。居てもよろしいのでございましょうか」

「居てもとは」

「おそばに」

「そなたさえ居る心なら」

「わたくしはもう……」

と、彼女は思いきつたようにあふるる涙と共に言った。

「ここへ来て、真実ほつといたしました。内裏という火宅かたくをのがれ出てきたような思いがして」

義貞は内侍のことばをあやしんだ。内裏も火宅同様とは。

煩惱ぼんのう ぼむらの炎、その中での業苦ごうく遁れ難い人間の三界さんまい住居。——それが仏典でいう「火宅」

と彼は承知している。

内裏の後宮もまたそんな所だろうか。勾当ノ内侍は、問われて袂を濡らすばかりだったが、やがて、とぎれとぎれに語りだした。いまは義貞にゆだねるしかない女の一生と、どこかで観念のみえるのもあわれであつた。

彼女の生家は公卿中での名門である。とくに兄の一条頭ノ大夫行房は、隠岐配所にまでお供をして、始終、帝とあの一ト頃の艱苦を共にした侍者の一人でもあつたから、還幸の後、みかども、いちばい行房にはお目をかけられ、末の妹の勾当ノ内侍も後宮に入つて、あまたな妃嬪のうちでさえかがやく寵幸を身一つにほこつていた。

これだけならば、彼女になんの不足があろう。後宮を茨の園と恐れにおののくわけもない。

が、やがて彼女は、みかどの寵幸が厚うなればなるほど、准后の廉子の監視がたえず身にそそがれているのに気づいた。廉子ときけば、后町の局々、あまたな寵姫も、みなお姑のようにおそれ憚つていたのである。それに内侍はいつか帝のおたねをやどしていた。

身をいとしんで、珠の御子を産めと、彼女は実家へさげられた。すると或る日、兄の行

房が来て、ひそかに妹へ「おろしたがよい」とすすめた。「……兄がこの目で見た小宰相こさいしのような例もあるからのう」と、恐ろしいことを囁ささやいて聞かせた。

かつて、みかどが隠岐脱出のさいには、なおまだ三人の妃がおそばに仕えていた。廉子、大納言ノ局、小宰相の三名である。ところがそのうちで身ごもっていた小宰相ノ君だけが、伯耆ほうぎノ地に上陸後には、いつのまにか見えなくなっていた。

……ふびんや、過ツて船着きの折、海へ落ちて。

と、廉子は後日、傷いたましげに奏そうしていたが、じつは追手にせまられた混乱中、その廉子が船上から波間へ突きおとしたものであつた一瞬を、運悪く行房だけがふと見ていたのだつた。——いらい行房はどうかしてこの悪夢を記憶から打消そう打消したい——と念じて今日にいたつて来たが、妹のそちがおなじ立場になつてみては黙つておれぬ。——語るのは、いま初めてだが、ゆめ、准后のおねたみを受けてはならぬという兄の注意なのだった。世にそんな恐ろしいことがと、疑われもし悲しまれて、内侍はそれをしおに病といつて後宮へはもどらずにいた。しかし、みかどからは「……いかにせし？」と、そのごも再三さんなお召めしである。で、ついにまた入内じゆだいをやむなくしたが、前にもまして廉子が恐こわく、また廉子の目もなんとなくほかの寵妃ちようひを見るのとちがい、自分へのみはすさまじく思われて

仕方がない。そして、ひとの秘密を知ったことの恐ろしさがついにはわが身の悪いとまでなっていた。

これにはまた、みかども常々お悩みらしくあつて、近ごろはとみに自分への寵幸も衰えぎみとなっていた折……はしなくも「義貞へ嫁け」との御諛であつたという。——内侍はそう語り終つて、しんそこ、ほつと息をした。

世間は暗かつた。洛中、一種の鬼氣が深夜になるとただよつてくる。

義貞には体でわかる。

狻猊（戦いを好む猛獣）数万の者が、このところ刀鎗の血をぬぐつて、いささか休息のため人間社会の中へ返つてゐる。そして戦いなき夜を眠つていた。いやなかなか眠りもしていまい。乾き切つた意欲が女を漁り酒を追つて、百鬼夜行図さながらに、罪の香を嗅ぎあるいているに相違なからう。

なにしろ兵は野性だ。将も人間である。本能やりばなき、血のなかのものを、義貞もいま、三条高倉邸の離亭の一灯に照らして、みずからの身に見ていた。

おれも狻猊の一匹

と覺らざるをえまい。——目のまえの勾当の内侍は、ともすればただうつむきがちだつ

た。あれから義貞はそこへ酒をはこばせてしきりに酔いをいそぎ、そして内侍へも、

「飲まぬか」

と、すすめていたが、ふたりの仲はたやすく美酒のごとく醸されては来なかった。――天皇から賜うた女と、賜わった男とである。いわばまたその初夜だった。――人はやはり品ではない。溶けきれないもどかしさを徒らにふたりはいつまで心の外側にむかい合っていたままだった。

「……そなた、武者の家の生活はまだ知るまいがの」

義貞はふと、こんな緒をみつめて言った。ひとつの話がとぎれると、あとの話題も彼がもちだすほかないのであった。

「ええ……」と、内侍もやや頬の解れをみせて「武者のお家はおろか、世間のことも、何一つようぞんじてはおりませぬ」

「さいぜん、内裏は火宅じやとの嘆きだったが、武者には武者の業がある。ここもまた火宅とあとで悔いねばよいが……」

「いいえ、人誰もの苦患はわきまえております。ましていまのような世の中。それを憂い辛いとは申しませぬ。……ただせめて、人の真情がほしいのです」

「真情まこととは、男の」

「もとより女でございますから」

「内裏にはそれすらないか」

「みかどはおひとりですらいます。かしづく後宮の私たちは、廉子やすこさまはじめ二十人もの妃嬪ひひんで御寵おんちようを競きそっていました。どうして真実が生れ出ましょう」

「真実になれば燃えように」

「そのような炎ほむらと炎は、おたがいを喘あえぐ火宅とするほかのものではありません。それがあの怖ろしい後宮という所です」

「ここならば」

「でも、殿のお心はまだわかりませぬ。この私というものは、恩賞の品代りに、みかどから殿へ下されたもの。私は人形です。自分の気もちを余り言ってはいけないのでした」

「いやそなたは奴隸どれいではない。誇れ、義貞の想われ人おもだ。義貞がおせがみしていただいたそなたなのだ。人形のたましいはわしが入れてやる」

義貞は杯を横へ抛ほうった。――投げると見えたほど朱の杯は輪を描いてころがり、そしてとつさに一匹の猓ひきゆうは、その盲目的な勢いとたくましい体の下に勾当の内侍をねじふせ

ていた。裳^ものみだれ、黒髪^{くろかみ}のふるえ、彼女に与^もえられるたましいとは彼女を窒^{ちっ}息^{そく}させる
ほどなものであった。

今朝。

春^{シユン} 眠^{ミン}、暁^{アカツキ}ヲ覚エズ――

の春の朝でもあるが、義貞はすかつとした上機嫌で、近侍に
たいする語調まで快活だった。

「なに。義助（脇屋）や貞満（堀口）らが、はや表^{おもて}の間に詰めて待っているというのか。
待たせておけ、待たせておけ」

いちど、書院に姿をおいたが、こう言つてまた対^{たい}ノ屋^やの奥へ遠くかくれてしまった。き
のうまではなかった部屋の色彩^{いろどり}や物の香が、美しいあるじを持って、春の日影までを新
たにしていた。

「内侍、さびしかろ」

「どうしてですか」

「こわらしき男ばかりだ。内裏のさまとは、おそらく余りな違い方」

「それがかえつて、そぞろにうれしゅうございます。人の中に立ちまじつて、自分も世間

のひとりになったことかと」

「いまに街も見せてやる。輿こしにかくれて、仁和寺へも行ってみい。清水きよみずの春もよい」

「いえ、ただもうこうしているだけでも」

そのあかるい黛まゆが、ふと義貞に、ゆうべのある一ときに顰ひそめた黛を思い出させた。たましいは人形にうちこまれ、彼女は人間に返っている。彼女もまた今朝のひとりの男を自分の生涯のそとにおいては眺められなかった。

「内侍、したくは」

「お待ちしておりました」

「妻めと朝餉あさげをひとつにするなどは、義貞、ほとんど忘れていたことだったな」

中ノ坪を前にした一室へ移り、給仕人もしりぞけて、ふたりだけで膳についた。内侍にしても、このような朝餉のためしは宮中ではなかったであろう。ひそと女の幸福感はしを箸はしに持った彼女の姿には、もう何らのくらい翳かげもなく、館やかたのあるじの想われ人おもになりきつていた。

「それにしても……」と、内侍はさつそく今朝の噂にしていった。「……おかしな千種さま。どうして昨夜は黙って、帰ってしまわれたのでございましょうか」

「いや、忠顕どのの腹、准后のお胸、いぶかりはみな解けた。そなたは何も知らぬまがよい。義貞もまた、彼に会うても一切知らぬ顔で通すつもりだ……。そして、道誉降参の一件なども」

「道誉と仰せられますのは」

「佐々木道誉だ。いや、わずらわしい。そなたがきいてもせんないこと」

次の部屋へ近侍が来ていた。

ふたりの声かとぎれると。

「殿。……江田行義、篠塚伊賀守などが、明日先発のうちあわせとかで、さいぜんよりお表の間でお待ち申しあげておりますが」

「いま参る。しばし休息しておれといえ」

義貞はつい起つのが惜しまれてはそう言っていた。久しい戦陣の飢渴が花野の露にでも逢ったようで飽かない心地なのである。するとまた、青侍の足音がして、思わぬ客の来訪を告げた。

「……誰だ。客とは」

「河内守正成どのでございまする」

「楠木が。……？」

いちど、黙考してから。

「また来てもらおう。今日は播磨へ発向の先発をえらび、かたがた、軍議に一日を要する。御用あらば、また明日にでも来給え、と申してやれ」

路頭ろとうの子こ

たそがれ、正成は、京での居宅、六条油小路の門で、駒を降リた。

ひる、義貞を三条高倉の邸におとずれたが、会えなかつたので、玄恵げんえ法印をたずね、また、二、三の知人を訪うてもどつたのだが、彼の行く先はみな時流の外にある僧や学究の家だった。好んで今を時めく権門を避けているような彼にもおもわれる。

「お帰りにさせませ」

帰れば、いつもまっ先にとび出してくるのは、赭しやが顔はん白はく髪はつの老臣恩智左近で、

「やれやれ、さぞやお疲れで」

と、正成の手から駒のたづなを取るとすぐ、正成の顔を読んで、その出先から胸のうち

までを、ちゃんと見てしまうのも、この左近であつた。

油小路の邸は、正成が和泉河内の守護をかねて、摂津昆陽野こやのの代官を管理する身となつてから賜わったいわゆる「在京公務所」だつた。だからどこにも私邸らしきはない。

ただ恩智をはじめとし、妹智の服部治郎左衛門元成、一族の松尾、南江、和田のともがらや、郷土の若殿ばらが、黒い板じきにずらと並んで、

「お帰り」

と一様な姿をみせ、それにたいして正成が、

「何事もなかったか」

と、一顧いつこをみせて通るのが、せめてここにある彼の家族的なくつろぎといえはいえる。

総じて、彼の位置は、官職にしても大きく昇進したはずだが、暮らし方はいぜんむかしの河内の一豪族とさして変つた風もなかった。あたかもこれを家憲としているかのようにである。

そこで公卿たちのあいだには、

河内のつくね芋殿

などという蔭口がまま聞かれた。どろくさいという意味だろう。正成自身もそのことは

知らなくはない。

しよせん自分は地中の鈍根どんこん

と、みずから自己の性をどうしようもないとして、世事の毀誉褒貶きよほうへんなどは一こう気にもとめないふうだった。

しかし昨今、上下とも、戦勝気分にわきかえっている洛中であつて、ここ一門だけが、何とも列外におかれた感で、正成はともかく、老臣若党ふんまんばらは、忿懣ふんまんやるかたないものを鬱々うつうつと抑えているにはちがいない。

過ぐる兵庫合戦の日においてである。——打出ヶ浜から御影みかげへかけての大事な一戦の日——理由なく後陣ごじんへさげられ、そのまま面目な帰洛を余儀なくされていたのだった。もちろん、総大将義貞にすれば、理由はあつたことであらう。それは尊氏の筆になる正成宛ての密書だといわれている。

しかし、嫌疑はすではれているはずだった。それが尊氏の偽計であつたことは、降参の将の談話で、そのご証拠だてられており、検断所の公卿裁きでも、

ほかからも同文の書があらわれたゆえ、あれはおかしい——

といわれているのだ。にもかかわらず、義貞だけは、その訂正も声明していず、さら

には、二次の発向にも、ここへは何らの沙汰さえまだ来ていない。

次の尊氏追討は、当然、山陽九州への出兵なので、すべて命は武門の大將一司令下にゆだねられる。楠木といえ義貞の命によらねばうごけないことなのだ。

「左中将どのへ、今日は親しくお会いなされましてございまするか」

やがて室に灯を見ると、左近は案じ顔の下から、正成へそっとたずねた。

「いや、会えなんだ」

と、正成は、これは正成のもちまえだが、口おもたげにぽつんと答えたのみだった。

——これはまずい、と爺の左近はすぐ覺さとると正成の氣色いろを見てたちまち話の穂をかせ。

「——そうそう。ひる、おるす中に、常陸ひたちからのお飛脚がまいっておりますが」

「久慈くじの正家からか」

「は。御状をたずさえて」

「見ようか」

「お夜食は」

「あとにする」

東国の常陸久慈郡くじへは、一族のひとり楠木正家が彼の代官として年暮くから下向していた。

そこからの一便^{びん}らしい。

長い書面だった。

見終ると。

「飛脚の武士を呼んでくれい」

「お会いなされますか」

「ム、東国の事情を訊こう」

「あちらの形勢など深い事情は余りわきまえぬかのような走り下部^{はししもべ}にすぎませぬが」

「それでもよい」

これの話がまた長かった。訥々^{とつとつ}、素朴きわまる飛脚武士なのである。正成はそれをつかまえて、物の値段^{ねだん}をきいたり、去年の作物の刈入れをたずね、また東国のことしの正月はどんな？——などとそれからそれへ雑談を求めて倦^うむこともない。

しかし彼にすれば、正家の書状の内容とあわせ観て、何かうるところがあるのだろう。やがておそく寢所へ入った。

枕は彼の憩^{いこし}いでなく、枕は近来彼の憂いをさらに研^とぐ一座の思念石となっている。枕につくと、彼には日本じゅうの物音がその石から聞えてくるのだ。坐^いながらでなく寝ながら

にして世の人心まで映つてくる。

「せんない憂いを」

と、彼は思う。

一個の力などではどうにもならない限界と、滔々たる世の趨勢が彼には観えた。

それは誰も見ていよう。そして人の目で見得る範囲と深度だけを人と同じように見ているほど気の安いものはない。けれど正成の患いは、人以上に世が愛しまれ世の行方や人心が観えるところにあつた。智恵学問から持っていたものでなく、天性の彼の感受性といつてよい。——たとえばである。

世間の目一般は、天皇軍对尊氏だけにとらわれ、はや北条遺臣軍の、信濃、越後、裏日本へわたる蠢動などは、消えたものと思つてゐる。

ところがそうでない。

奥州も、てんやわんやだ。北畠顕家が留守となつた東北の乱脈さなどわけて想像に難くない。さらに思いが筑紫に飛ばばなおゾツとした。——彼のさぐり知るところでは、尊氏は、持明院統の皇の院宣をにぎつてゐる。

さもあらば。

みかどとみかどの争いだ。

二つの日輪がせめぎ闘うて全土の上に燃え狂うときは地上も寸土をあまさぬ血に染まるだろう。

……正成は寝返りを打った。老人のように、その肩は温^{ぬく}もつていず、その背はまろい。
「……そうさせては」

ならじ！ と彼は寝つつも寝られず体を硬くするのだった。さきには大塔ノ宮のあえなき死を、人皆も見ているのに、と痛憤に似たものが涙をすらふとついてくる。

「が、正成ひとりでは」

と、無力の感がげつそりと彼の疲労を誘つてきてやがては自然眠りにおちた。その間だけ彼は救われた寝顔を持った。

「なんだ？」

祐^{ゆう}筆^{ひつ}の安間^{りようげん}了^り現^{げん}。

朝の役宅へ入って行つたばかりだが、また門へひつ返してきて、六条油小路の往来へ首を出していた。

門外では八尾ノ新介、富田正光らの若侍から組頭たちまでたちまじって、しきりに「道譽が」とか「佐々木が」とか言い騒めさわめているのだった。

訊けば。近くの佐女牛さめうしの一邸へ、佐々木道譽の手勢二、三百人が今暁から帰って来て、久しく空あけていたやかたが俄に賑わい立っているというのである。

「それやいぶかしいな」

了現は、さらにたずねた。

「這奴しゃつは、足利方の一将、この都へ、帰って来られるはずの者ではなからう」

「それが帰って来たのです」と富田五郎正光は、ゆゆしい椿事ちんじと、ふんがいして。「おそらくは、尊氏の敗戦で脱陣したものでございましょう。さきごろ来らい、大江山に立ち往生して、進みもせず、もどりもせぬ一陣の兵がいるとは聞いていました。ところがその佐々木道譽、ぬけぬけと、山を降りて、佐女牛へおちつき込んだではございませぬか」

「たしかなのか」

「見てきたのです」

「ふうん？ ……」

「わけがわからん、なんとも、このごろの世態や武門は」

「この了現も、なんの沙汰も聞いておらぬ。みかどへ降を乞うたものなら、すぐ左金吾（義貞）の沙汰なり窪所（武者所）の門触れが廻るはずだが」

「道誉の、またぞろな降参など、それこそ沙汰のかぎりでしょう。よもやいかに、しつ腰のない左金吾殿でも、また、みかどのおうちにしろ」

「ばかげたことだ」

たれかが呟いたしおに。

「やめろ、やめろ、こんな往来評議もこけのひまつぶしでしかないわ。はははは」

正成がこれを耳にしたのは、やかたの奥で爺の左近のかしずきを受けながら、外出の身支度をしていたときだった。

「……道誉がの」

と、彼は笑った。そして、

「いまさら不審がるにも当るまい。彼は彼の道があるいているのだ。もそつと、べつな所には表に見えぬ醜事や奇怪事が数しれずひそんでいよう。世はいぶかしいことだらけよ。」

……爺、爺はさように思わぬか」

ともいった。

この日も彼は左中将新田義貞の高倉の亭をおとずれに出たのである。が、きのうの約もむなしく会えなかった。「――弟、義助でよくば」との伝言だったが「また」と彼は辞して去った。

事実、門前には播磨へ先発する軍兵が屯^{たむろ}していて、正成が求めた二人だけの懇談などに応じられなかったのもムリはない。とは思われたもののまた、

「私^{わたくし}の訴え事と取られたのか」

と、それが少しばかりは残念だった。彼にはいま、これ以外に世を救うみちはない、と思いつめている一信念があつたのだ。ついてはまずたれよりも義貞とじっくりはなしあつてみたい。そう考えて二日通^{かよ}つたのだが、時めく左中将の威風を門に見ての帰りにはそれも絶望のほかなきものとあきらめたようだった。

この思い。

これしかないと思いきわめている考えは、義貞に会い、とくと義貞の大度量と理解とを求めるしかない問題だった。

秘^{かく}れてすれば陰謀になる。

およそ陰謀などは彼にない才覚だし、よしまた義貞に会いえても、得意の絶頂にある今

の左中將の耳には、正成が抱いている考えなどは、とうてい、善意にうけられそうもない。
「はて……」

歸路の馬は路頭に迷った。

義貞がだめならば――

千種忠顕ちぐさただあきに会って逐一胸のうちはなそうか。

いやいや、千種は義貞と親しい仲、すぐ義貞へ通じるだろう。直接でなく人を介かいした意見となれば、いよいよ義貞が素直に容ゆるれる可能性はすくなくなる。

「ならば……」

正成は心のうちで他をさがす。

洞院とういんノ実世卿さねよきようはどうか。

力がなさすぎる。やつと一方の公卿大將たるのが関のやまの人で、大局の動向を察したり勇断をもつ人ではない。

在京の鎮守府將軍北畠顯家の名もかれの胸にうかんでいた。

すがすがしいほど純で忠誠一筋な人とおもう。けれど多くの日をみちのくに送り当今の複雑怪奇な時局を知れといってもムリである。かたがた年も若く、それに父北畠親房卿

ときは、地位、学問、階級などに左右される意識が濃く、氣位がたかい。またついぞ、河内守正成などという者が朝臣あそんの端にいることすらお目のすみにもある風ではなく、禁中などでも目礼一つ返されたことはなかった。

「……語る相手はたれもない」

ひるの京洛は人間で息れていた。

辻々は黒山な庶民。隊伍をなして西へ行くのは、播磨の赤松攻めへさす諸家の兵である。う。ひがしの方へ行く軍隊もみえる。それは尊氏一族の本国三河を席卷せっけんして、尊氏が秘かくしている妻子や母を召捕る戦略だとか聞いている。また宮門へむかつて牛にムチ打つ車、もどる輿こし、じつに人は多い。しかも正成が心をかたるたれひとりこの都にはいなかった。

彼の心は路頭をさまよう子に似ていた。

こんなとき、むかしからの賢人けんじんなる者は、山林へ去って行く。世をすてて隠遁する。

だがそれのできる正成でもなかった。名利みょうりに恋々れんれんたるのではないが、彼も一族の族

長だ。乱世らんせの権化ごんげみたいな熱血そのものの輩やからも多くかかえている。弟正季まさすえがしかりであ

る。いやいや彼の自由をもっと狭い立場に追いつめていたのは彼にはどうしても軽く持てない自責じせきだった。長としての責任感だった。

もしこの重い業ごうをのがれたいたのであつたら、そもそもは、元弘げんこうの初め、笠置かさぎからの天皇のお招きをお断りすればよかつたのである。しかるにすすんで勅かしこを畏んだ。そのときすでに平和の民、南河内うづえんの一族有縁うづえんの女子供にいたるまでの運命はこの正成せいせいが業ごうの輪廻りんねに巻きこんでいたものだった。長としてのその原罪を、彼はみずからの性格のためにごまかさない。

しかし、拒こばんだら、のがれたか。平和の民があのまま平和でいられたらうか。むずかしい。考えられない。

でも正成の責任はそれで消えぬ、この正成の……と笠置の過去をかえりみたとき、彼ははつと、いまの衷ちゆうしん心を訴えうるただひとりの御一人を胸のうちに見つけていた。

正成はその日、六条へもどるとすぐ、祐筆の安間了現に願書をもたせて、宮廷の大納言ノつかさ（職局）へ使いにやった。

「——何とぞ不時ふじノ賜謁しえつの儀をおはからい願いたく」と朝ちようへ手続きをとらせたのだった。「戻りまいた。——折よく閑院ノ権大納言さまにお目通りを得、仰せには、はかるうてやる、お沙汰を待てとのこと。まずは御聴許ごちようきよあるものとぞんぜられます」

了現の返事であつた。

大納言のつかさは「天下喉舌ノ官」ともいわれる局である。聖旨を下達し、下の善言も納れる機関とあるのでそんな称もあつたとみえる。

「そうか」

正成は安堵のていで、

「閑院の侍従がお扱いくださるとあれば——」

と、やがての沙汰を待った。

この日いい、どこやらに腹のきまつたとも見える姿が彼の一两日を長閑けくしていた。

——河内守左衛門ノ少尉しょうじようという一朝臣あそんの身は五位ノ官位にすぎず、単独で主上へ拝はいえ

謁つをねがい出るなどは、おこがましく、おそれ多いとも万々わかつていたが、やむにや

まれぬ果てであつたらしい。が、そこまでのつきつめた憂いも、帰結を心に観てしまうと、

低雲ていうん一過か、あとは迷うことなく暢々のびのびとしているのも彼にきわだっている性情の一面だ

つた。

ちようど正成もそのいささかなおちつきにあつた間のことである。——一族の楠木弥四

郎や和田弥五郎など十騎ほどの従者にまもられて、正成の一子正行まさつらが、郷土南河内から、

「母ぎみのお使いで」

と、これへ父を訪ねてきた。

元服を去年すまして、幼名多聞丸たもんまるを正行まさつらとあらため、ことし十四をかぞえる正行だった。もとより重大な使いならこの正行をよこすはずもない。去年いらい、正月も帰郷していない正成であつたので、ここわずか戦陣も休止の都と窺うかがつて、おそらくは母から「……そつと父上にお会いして、御容子を見ておじやれ。そしてお国元の幼い者から皆も無事息災におりますと、そなたからよう申し上げてもどるがよい」といわれたか、あるいは、父の顔見たさに、正行自身「何でも行きたい」と、せがんで来たかの、どちらかにちがいはなかった。

——とは、正成も察している。そして正行が、

「これは、母ぎみからです」

と、父の前にかしこまってすぐさし出したのを披ひらいて見ても、まずは何事もない妻の久子の手紙だつた。その文中には、

……去年こぞの冬から初春はるへかけて、都の御陣は、やごとなきあたりからあなたさまやら郎党たちまで、矢たけびのなかに明け暮れのおすごしとあるのに、河内の奥は何事も
 のう、正月は正月の真似びもしたり、この頃の麦踏み唄にも、近年にない百姓衆の長の

閑かな^ど励みが見られるなど、みなお蔭によるものと、もったいのう存じて、ただ朝夕の蔭膳へのみ、一日も早くと、御世のしずもりを祈っているのが、私たちのせめてもな力でしかごいませぬ――

など見え、そのあたりの文字には正成もふと瞼を熱く持ったことだった。しかし彼の後顧の安心と家族への張合いもそれ以外なものではなかった。

正行は母に似て小づくりだった。おもぎしも父の自分よりは母^{ははごに}御似だとよく他人はいう。「……十四となつたか」

正成はこの正月もついに家郷を見ずにしまったので、いま、妻の手紙を巻きおさめながら、その妻の手塩の愛を――可憐な小冠^{こかじやすがた}者姿に限なく持つて――ちよこんと目の前に畏^{かしこ}まつた正行^{まさつら}にどこか急に大人^{おとな}びて来たものすら覚えて、

「……正行、大きくなつたな。しかしよう母がそちを手放してよこしたの」と、男親の幅のひろい目でゆつたり眺めた。

正行はかたくなっていた。

だが、恐^{こわ}いからではなく、ふくら雀のように、満足感にみちた姿であつたのだ。――それほど、この長い乱世下におかれた武門の家では、子と親とが、或る日を無事で一つにい

ることも稀れだったからではあった。

「はい。お願いしても、初めなかなか母上のおゆるしが出ませんでした」

「そうだろう」と苦笑して――「めったに、ゆるすはずはない。世上は殺伐^{さつぱつ}、子^こを遠くへは出すなど、この父がかたく申しつけておいたのだから」

「ですが父上。河内の奥にばかりいると、無性に正行は遠くが知りたくなって来ます。居ても立つてもいられなくなつて来て」

「どうしてだ」

「日本じゅうが戦争なのに、河内の奥で自分だけがこんなにしていていいのかしらと思うのです」

「悪いことを、母がさせておくはずはない。あいかわらず観心寺の御坊の許へ通つて、勉強はしているのであろうが」

「はい」

「それでいいのだ。そちも世を案じるなら、学問に精出して、今の世情などにはわき目をふるな。すぐそちたちが、いまの大人に代つて、その乱脈な世をになう時が来る」

「でも、叔父君^{ぎみ}は、そんな世間見ずではいけない。正行もはや十四、初陣^{ういじん}もすべき年ご

ろなの……と再三、母上へお手紙を下さいました」

「まさすえ
正季がか？」

「はい。四天王寺の御陣所からです。……それでじつは、叔父君を四天王寺にお訪ねして、京へ廻つて来たのです」

「ははは……。さては母がゆるさぬので、正季を頼んで出て来たわけだの。して正季はそこに、何を教え、何を見せたか」

「四天王寺を中心に、難波、住吉を二日ほど見て歩くうち、こう仰せられておりました。

……和泉、摂津の浜は、なべて楠木勢の持ち場だが、欲しい船がたくさんにはない。やがて足利尊氏との会戦には、どうしても、海上の力が要る。ところがお味方には用意がないのだ。——お父上にお会いしたら、ぜひこのことを、左中将どのへ御献策あるように——

正季が申しおりましたと」

「正季の言伝てか」

「ええ。それから……正行も来るべき次の戦には、ぜひ初陣したがよい。叔父からもお父上へようお願いしてやると仰つしやつても下さいました」

「ふム……」

と、正成はあいまいな顔してまた笑った。

「いけません？ 父上」

「従軍の望みか」

「叔父上のおことばでは、たとえ一時は筑紫へ逃げた尊氏でも、いまにきつと大軍で攻めのぼって来るぞ、と仰つしやつておいででした」

「それは必定だ、かくごしておかねばならん」

「ですから」

「ははは、単純だの。正季もその程度か。しかしな正行、覚悟はいるが、日はわからぬ。いつの日尊氏がそう出て来るか——」

「でも、それを待たず、左中将どの以下、みな播磨から西国へまで、攻めてくだるのでございましょう。そのいくさへ、正行もお供させてくださいませ」

「まあ待て」

と、正成は子の一途を、いささか持てあまして。

「男の子の初陣とは、元服以上大事な日だ。初めて烈しい世へ出て、世の大敵と渡りあうこと。——悔いのない相手と正義の戦場をえらばねばならん」

「今のいくさは正義ではないのですか」

「さてさて、そちもなかなか口^{くちさか}賢しゆうなつて来たな。人はたれも正しからんとし、正しいと号しているのだ。みずから邪惡の軍と思つてゐる者はいない。……だがそれがままだ邪軍となり魔行をほしいまみにし出してくる。大本は忘れやすく、人は大昔の獸に返りやすい。いくさとはそんなものなのだ」

「……………」

「いや、こんな話、まだそちには、ちと難しかる。とまれこの父はの、元來が今^{いまよう}様の武人でないのじゃ。それゆえ、ただ功名我慾の首狩りのような戦に、わが子のそちを初陣させる氣にはならぬ。……連れてゆくときがあれば、そのときは連れてゆく。……かまえて、それまではただ學問に精出しておれ」

「はい」

正行はききわけた。これ以上は、叱られることを知つてゐる。また叱言となればきびしいことも知りすぎていた。

正行がここにいたのは、わずか三日ほどだった。——滯京中には、服部治郎左衛門に連れられて、洛中を見てあるき、東西の市^{いち}ノ棚^{たな}では、弟たちへの土産に、独^{こま}樂を買つた。ま

た、母やら卯木^{うつき}への土産も買つて、やがていそいそ、従者十騎と共に河内へ歸つて行つた。

折ふしまた、正成へは、同日、大納言のつかさから、

予^{カネ}テノ願^{ヨリ}ヒニ依

特^{エツ}ニ謁^{タマ}ヲ賜ハセラル

明^{ミヤウ}、未刻^{ヒツジ}（午後二時）

参内アルベキ也^{ナリ}

との通達があつた。

待ちぬかれていたことである。そのため、正行の訪れも、国の便りも、じつは心の外だつたような容子がなくなかつた。事実、彼はこの参内と、そして、めつたにはめぐまれえない天子直々の拝謁を機に、或る一期^{いちご}の覚悟をしていたらしい。

早朝から正成は身^み浄^{ぎよ}めして自室にこもっていたが、やがて五位^{ごい}ノ尉^{じょう}の衣冠をただし、供にも南江正忠、矢尾ノ常正など、いつにない列伍をただして出て行つた。定刻、花山院の飯皇居へつくようにである。——それを爺の左近は、さすが何か、ただ事ならじと察したらしく、六条の門から不安そうな眼^{まな}ざしでいつまでも見送っていた。

豆と豆がら

やがて定刻が来ていた。

母屋の玉座ぎよくざには御簾みすがたれ、お胸のあたりが仰がれる程度にそのすそは巻かれてある。

一だん低く。

正成は「廂ひさしの床ゆか」にひれ伏していた。

もとよりここは花山院の今内裏いまだいり（仮の皇居）だが、天皇のおわすところ、どこでもそ

こを清涼殿せいりょうでんと呼ぶのが慣なわしなのである。で、左右の公卿列座もすべて清涼のかたち

どおりであるが、ただどこか狭くはあつた。そして玉座と謁者えつしやとの距離も、まったく間ま

近ぢかであつたから、正成の姿も、咫尺しせきの畏れを、いちばいその背に平たくしていた。

「廷尉」

「はっ」

「直々じきじき、奏聞そうもんにおよびたいとは、いかなる儀か、それにて申しのべたがよろしかろう」

一公卿の声だった。

侍座には坊門ノ清忠、洞院とういんの公賢、近衛、三条など、上卿たちの顔も見える。そして、

正成がそも、何を訴え出たのかと、彼ひとりへ視線をそそぎあっていた。

「時局、容易ならぬときにいたりましてござりまする。……そのうえに、えいりよ 叡慮をわずらわし奉るは、まことに、きょうく 恐懼にたえぬとはぞんじますなれど」

「む……」

と、後醍醐のおうなずきが洩れた。

後醍醐も、この功臣を、おわすれでは決してないが、なにぶん、群臣あまたな中である。とかく家柄の低い一廷尉正成をとくに日頃お召というわけにもゆかない。……折ふし正成からの願いだった。……何かは知らぬが、きいてやろうという優渥ゆうあくなお気もちは、充分、御簾ぎよれんのうちからもうかがわれた。

「正成」

「はっ」

「遠慮なく申せ、なんぞ軍いくさについての意見でもあるか」

「さようにござりまする。もし今をおいて、このまま推移いたしましては、悔いを百年におよぼし、また、せつかく建武の御新政を見て、ここ三年の聖業も、ついには、いかがなろうかと、昼夜、案じられます余りに……」

「要は？」

「正成の存念を、直言つかまつるなれば、なにとぞ、いまを以て、御軍をやめ、公武一体のすがたをお取りあらせられ、ひとまず、すべてを御政事に帰せられたしと希う次第にございまする」

「公武一体とな」

「は」

「解せんことを申す。尊氏をおいてか」

「いえ。勅を賜うて、足利尊氏をなだめ、親しくお召あらせられなば」

「では、尊氏へ、和を請うようなものになる」

「なんで天下の目に、さようなことに映りましょうか。御軍は兵庫に大捷を博しており、尊氏は遠く筑紫へ落ちのびている敗軍の人。……さればこそまた、いまが絶好なときでもございまする。一たんの勝利をば、ここでゆるがぬ御勝利といたさねばなりません」

「しつ」

と、そのとき、公卿列座の中の一つの顔が、正成の注意を衝いて、こう言った。

「廷尉。不吉な言はつつしまれい！」

「……………」正成は、そのためちよつと絶句したが、しかし姿勢は御簾ぎよれんを仰いだままで、それへ眸をそらしたわけでもない。根をふかく土にかくしている巖いわみたいいに、今日の彼は、いつもの正成ともみえず何かうごかぬものをその姿にもつていた。

「勝ち負けの始めとか。まことに不吉な兆きざしは、勝者の陣にすぐあらわれるものにござります。勝つことだけを知って、勝ちを収めることを思わねば」

「待て……」

後醍醐が仰せられた。

「そちが憂いとは、つまり後日となれば、軍はわが方の負けになる。それゆえ、いまのうちに尊氏と和して、公武合体とやらの工夫をしたがよい、というに尽きるな」

「御諍ごじょう、さようにござりまする。しかもその時機は今においてはありませぬ。……もし時移せば、筑紫つくしの尊氏は、須臾しゆゆのまに、西国の諸豪を手なづけ、四国、山陽山陰の与類よるいをあわせ、おそくも年内には、大挙、ふたたび闕下けつかへせまってくることは、火を見るよりも明らかとおもわれまする」

「正成。……それはそちの案じすぎぞ。筑紫にも誠忠の士は多い。四国、中国とても同様。そのうえに、義貞もくだってゆく。何条、尊氏の意のままになろうや」

「……あいや、申すも恐れ多くはありますが、建武の制として、新たにお示しあらせられた御政事の主旨は、かならずしも、武士どもの心から迎えているものでございませぬ」

「尊氏一類の徒にとつてはさもあるう。さればこそ、撃たではおけまい」

「しかるに、尊氏には同調しても、聖慮を畏まざる武士の方が、全土にはいかに多いか知れませぬ。……かつは左中将どのの不人望と、尊氏の衆望とは、これまた、くらべものになりませぬ」

「義貞はそれほど諸武士に気うけが悪いか」

「人の蔭口に似て、申すも憚りなれど、ここには公卿方も御列座あること。あえて明言つかまつります。……もし左中将どのに、よく人心収攬のご器量があるものなれば、さきに鎌倉を陥し、また勅宣の御軍をひきいて治平の帥にあたりながら、今日まで天下の諸族を、いまだにこんな支離滅裂にはしておきますまい。——ひるがえって尊氏をみれば、賊名をうけながらも、またいくたび窮地に立ち、いくたび破れながらも、なお彼の筑紫落ちには、あまたな武士が、付き従うなど——尊氏が赴くところ、何せい、衆和と士気の高さがうかがわれまする」

御簾のうちには、なんのお声もなくなつた。

おそらくは、おん眉をひそめておわすに相違ない。わけて公卿座くげざに居ならんでいる顔、顔、顔……のすべては、みな、にがりきつて正成を見すえていた。

直言ちよくげんにも程がある。

時の人、左中将義貞をさして、こんなにまで無遠慮に評価し切った者がほかにあるだろうか。公卿たちは、正成の正気をさえ疑つて、ただあきれるのみだった。

しかし後醍醐はさすが、帝王の寛い御分別ひろともいうべきか。正成を覷みるにも、彼らの冷蔑や気色ばみとは、はるかにお心の在り方がちがっている。——これは容易ならぬ正成の決意——と、みそなわせられたらしく、御簾をとおして、彼の姿へいちばいな凝視を垂れ、

「正成」

と、呼ばれていた。

「はっ」

「そちは、尊氏が何者なるかを、わきまえておるのか。あきらかに、彼は幕府を立て、おのれその幕府の上に臨まんとする者だぞ」

「御詮ごじょう。そのとおりとぞんじられます」

「しかるに、そちは言つたな。君臣一和、公武合体の制をとれとか」

「はい」

「ならば、王政一新の実はどこにおくか。幕府を廃め、政を古に回すなどは空名になる」
「さは相なるまいかと思ひまする」

「どうして」

「上おんみずから、親しく諸政をみそなわす儀は、うごかざる政の大本として、その下における武門の統御のみを、尊氏におゆだねあらせられるぶんには」

「それ自体、幕府をみとめることではないか」

「いや、頼朝いらい、幕府の害、また思いあがりは、朝政にくちばしをいれ、皇統のお世嗣ぎをさえ、意のままにうごかし奉るなどの僭上沙汰にありました。その牙をだに与えなければ。……そして武門は武門の分を守らすに止めおけば」

「さような制を、武家が守れるはずはない。わけて尊氏めは、おのれ第二の頼朝にならんと、望んでおるものを」

「まこと、御宸念のほど、ご無理はございませぬ、が、もし正成にみゆるしを給わるなら、正成自身、即刻、筑紫へ下向いたし、尊氏に会うて、きつと古今の弊を論じ、また、おろかなる戦乱の果なさを説き、かならず恭順を誓わせ、無用な戈は、これを収めさ

せまする」

「して、義貞はどういたすか。義貞の同意なくして」

「されば、左中将どのの許へも、自身二度もお訪ね申してはおりました。——しかし左中将どのが、やすやす、御同意あらうとはおもわれません。ぜひなくば、新田はこれを討つ、とするもまたやむをえぬかと考えられます」

「新田を討つ？」

「まこと、よんどころなくば」

「そうしてまでも、尊氏とは、たたかいを避けろというのか」

「皇統の長き御未来のため。大きくは、民ぐさのためにも。……聖慮におん曇りなきよう、正成、伏して、かようにおねがいつかまつりまする」

「ばかな」

ついに、逆鱗げきりんのみけしきが、御簾ぎよれんをゆすつた。

「ならん！ ……。さような進言なれば聞くにも足らん。正成、そちはどうかしたか」

「……ただただ憂いのみにござりまする。いまや尊氏の許には、持明じみょう院いん統とうの皇きみの院宣も密ひそかに降下されておること。——君と君との血みどろを、臣として、何で心なく見てお

られましょうか」

低すぎるくらいな声で、声の表に感情は出ていない。彼の悪い方の片目のまぶたとひとしく静かに抑えられている。それでいて正成のことばは、公卿列座のすべての者の肺腑をドキツとさせたようだった。

——申すことにも事を欠いて。

——せいりよ聖慮もはばからず。

と、みな色を失い、彼ら衣冠のつつしみぶかい眸も、せつな、こぞつて御簾のうちの御気色へ、思わずうごいたほどである。

しかし、そこも龍淵のごとく涙としていた。しばしは何の御詫もなかった。そしてただあの大きなおん目を凝らして、じつと正成を見ていらつしやるのみである。——まだかつて、これほどなことを直言したやつはない——、ふしぎな男かなと、後醍醐は、むしろ逆な御寛度に返って、もつと正成にいわせてみようとしておられるのかもしれない。た。

ややあつて。

「正成……」

と、御諛、おもたげに、

「いかにもそちの申すがごとく、持明院統の院宣が、尊氏の手に渡ったとは、ちかごろ四国中国の武士どもが、しきりと揚言するところとは聞いておる……。が、それはまことではない。風説にすぎん。朝廷での調べでは」

「あいや、おそれながら、正成が知るかぎりにおきましては、かなしいかな、虚伝きよでんともおもわれませぬ」

「なにをいう。たとえ尊氏が光厳こうごん（持明院統の先帝）をそそのかして、そのような物に手にとると、すでに廢帝たる院の院宣などは反古ほごにひとしい。天に二つの日輪があらうや」

「げによき御言葉みことばにこそ。——天に二日じつあらせてはなりません。さるがゆえに正成、微臣に過ぎぬ身にござりますが、ここ昼夜、肝囊かんのうを病むばかり世のすえ案じられてまいりする……。ひとえに、皇統の破滅のみならず、その下における、あわれ民ぐさ、千万の精し霊ようりようも、みな戦士あえに喘ぎ哭なかねばなりません」

このとき、ついにたまりかねたように、公卿座のうちから、参議坊門ノ清忠が、

「廷尉！ 廷尉」

と、制止して、

「なにさま、其許そこの奏そう上じょうを伺つておると、其許は時局を思い病む余り、ちと氣鬱きうつの症にかかつておられるようだ……。いたずらに、病者の進言などは、畏れ多いおそ おお。むしろお耳わずらわしかろうぞ」

と、言つた。いや叱つた。

「は。……重々じゅうじゅう」

と、正成は、ほんのころもち、その膝を、公卿たちのほうへ向けかえて。

「――不遜ふそんのつみ軽からずと恐懼きようくしてはおります。なれど、ことは国事です。上つ方うえかたのみならず下億衆しもおくしゅうの地獄か楽土かのわかれ、その今を坐視してはいられませぬ」

「では、あくまで其許そこは、朝廷と尊氏と和せというのか。そして、その御使みつかいには、自分が尊氏を説きに筑紫つくしへ行つてもよいとまで望むのか」

「一定じよう、それしか、世を救うみちはなしと信じます」

「さてこそ、先頃じゅうの噂も噂ではなかつたわい。……かねてより尊氏と正成とは、よほどよほど、ねんごろな仲であつたとみえる。……もはや、何をかいわんや。はははは」
侮辱だ。聞き捨てはなるまい。と公卿たちにさえ、清忠の言は、

「ちと、言い過ぎ」

と、おもわれた。

意見の相違はともかく。正成の誠意はたれにもわかつている。その必死な諫奏を「――尊氏と親しいからであろう」などとは、嘲弄ちようろうもまた、はなはだしい。さすが正成も、カツと逆上するのではないかと、みな、目をこらして、正成を見まもっていた。

けれど、正成は、清忠の嘲笑を浴びると、じぶんも共に、その面に、うつすらと苦笑を
持つて、

「おからかいを……」

と、かろく危険な一瞬を交わしていた。

そして、自分は尊氏を、世の敵としては憎むが、私の敵わたくしとは憎んでいない。むしろ当今武門のうちでは、第一の人物とおもっている、と率直に言った。

世の敵と、憎む理由は、これまでは尊氏が、朝家ちようかに弓をひき、逆賊の名を負つても、なおその野望をかえるふうもなかったからであるが、その彼が、朝家のおん一ト方の院宣を持つて、

われも廷臣

足利も皇軍

と名のるからには、手のくだしようもないではないか。

また、世上沙汰さるる如く、

「このいくさを、君と君とのお争いにせばや」

と彼が謀^{はか}っているものなら、なおさらのこと、彼の術中に陥ちるなどは、現朝廷の極力避くべきところではあるまいか。

正成は怯^{ひる}みもなく言った。——そしてなお、坊門ノ清忠の姿を中心に、公卿ばらの方へ、その膝をきつと向け直しながら、

「およそ何が浅ましい、何が忌^いましいといつて、おなじ血の同^は胞^{から}が、憎しみあい、墜^{おと}し合い、また殺し合うなどの惨^{さん}を見るほど、世に情けないものはありません。畜生道です。いや禽^{きん}獣^{じゆう}にすら見られないこと。なぜか人間^{にんげん}だけにかかっている人間業^{ごう}です。これを、凡^{ぼん}下^げが演じるならまだ知らず。——朝廷おんみずからやってどうなりましょうか」

と、一人一人の胸に訴え。

「持明院統もただし皇統。また現朝廷の大覚寺統もひとつ皇統。いずれが帝^て血^{けつ}に非ずというものでありません。——としたら同じ帝血のお争いです。そして、ひとたび骨肉相^そ

剋うごくのたたいとなれば、うらみも憎しみも、他人以上、解けがたいものとか。必然、百年はこの地上に修羅地獄の血を見なければ止みますまい」

と、痛嘆した。

さらに、その弁も訥々とつとつではあつたが、倦うまず、熱意をこめて、

「正成ごときが申しあげるまでもなく、ここには博識な方々のみ。つとに御存知と拝察しますが、このさい御一考として、かの異朝いちちゆうの詩人、魏ぎの曹植そうしよくが作ったと称される

『七歩の詩』を思いあわせていただければ倖せです。それは正成の百言よりも、はるか勝まさるかと思ひます」

と、御簾ぎよれんへむかつてするとおりに、公卿へも、平身低頭して言つた。

「なに。七歩の詩？」

人々のあいだに、小さい 思いをひそめ合うらしい容子だった。

七歩ノ詩とは。

——みな沈黙におちたが、訊きかえす公卿はない。

正成も説明はしなかった。なまじな説明はかえつて反感をかうだろう。異国の文藻ぶんそうや学問なら人後に落ちぬとする誇りは公卿の誰もが持っている。

魏ぎの文帝の時代だ。

文帝はかの三国志中の梟きよう将しょう、曹操そうそうの子であり、父曹操の帝位を受けたひとであるが、弟の曹植は、素質性行、兄とはまるでちがつていた。

つまり風流子というものか。諸般の芸事には通じ、詩藻しそうゆたかで、文学の才華はなみならぬものだが「——戦はごめんだ」と、つねに言つて、軍事は嫌い、政治にはそつぽを向き、兄の文帝とも事々うまく折合ふたりわず、その人生觀でも兄弟はまったく両極の人だった。だが、世は戦雲の下。呉ごは蜀しよくと同盟して、魏の洛陽らくようを衝つかんとし、曹操の建業も一いち朝ようの間まかとあやぶまれていたような秋ときである。いかに自分の弟だからといえ、詩ばかり作つて超然いつじんと逸きよう人の境を独りたのしんでいる曹植を、諸臣のてまえ、文帝もついにはこれを黙視してはいられなくなつた。

或るとき。一閣の内に弟を呼びつけて。

「植しよく。きさまは父帝の遺業をわすれたか。今をどんな時だと思ふ。今日かぎり詩作はやめろ、筆を捨てて劍をとれ」

と、いいわたした。

「やめられません！」と、曹植はひざまずいて、涙の目で兄を見あげた。「——私。ほか

に能もなく、ただ文学だけが生きがいなのです。詩を作るなど仰つしやられても、自然と詩が心にうかんでくるのでどうしようありません」

「ああ、きさまというやつは……。しかし群臣の目、軍紀のてまえ、そんな気ままはゆるしておけん。どうしても、詩を止めんなら、今日はきさまの首を斬って、父帝の靈に詫び、三軍にも示して、たとえ骨肉たりと、戦を厭う者はこうだぞという実証とするつもりだ。それでもやめんか」

「やめられません」

「よしつ。斬れッ」

と、文帝は後ろの兵へ手を上げた。がまた「いや待て」と、何かを思い返したらしく、

「植。まず立て！」

「はい」

「わしがここで、一イニウ三イ……と七ツまでかぞえるから、声に従って、七歩あるけ。そして七歩のあいだに一詩を作ってみせろ。出来なかつたら途端に首を落すぞ。もし佳い詩を作したらぜひもない。よくよくな生れ損いとあきらめて、ゆるしてくれる」

と、厳命した。

力者^{りきしゃ}は大剣のつかをつかんで傍ら^{かたわ}に立ち、文帝は指をあげて、一……二……三……とかぞえて行つた。——歩むこと、まさに七歩目、曹植は哀^{かな}しげに一詩をさけんだ。

豆ヲ煮ルニ

豆ノヲ燃ク
マメガラタ

豆ハ釜中ニ在リ泣ク
フチユウ

本コレ同根ヨリ生ズルモノヲ
モトドウコンシヤウ

相ヒ煎ルコトノ
アニ

何ンゾ太ダシク急ナル
ナハナハキフ

詩は、五言四絶、わずか二十字にすぎないが、同胞^{どうほう}相剋^{そうこく}の悲泣^{ひきゆう}とうらみを訴えて人の胸を打たずにおかない。

文帝も詩の真理にうごかされ、以後は弟の天性とその好む所にまかせたとのことである。
龍顔^{りゆうがん}はくもつて、はたと、ご苦悶のいろいろのように仰がれた。

七歩ノ詩は聖慮にとり決してご愉快な詩であるうはずがない。万民は赤子^{せきし}とか。

たとえ、どういう御理想にしろが、たたかいは帝王の最大な罪と御自身責められてい
るはずである。戦^{いくさ}とは——豆ヲ煮ルニ豆ノ豆ガラヲ燃ク^タ——ようなもの。また——本コレ^{モト}

根ハ同ツカラ生ジタモノ——。どんなたたかいにせよ、赤子の殺し合いは、それだけでも最大な御悲嘆でなければならぬ。

まさに、今の世を觀れば、万民は釜の中で煮られている豆のようなものだった。そして釜の下を焚きやまぬ焰も、ひとつ根の親とも兄弟ともいえる豆の豆ガラなのである。

豆は、何を怨めばいいのか。——沸々たる熱湯の中の悲泣は、たれが聞いてくれるのか。

正成は、豆に代つて、豆の怨みを御簾へ暗に訴えていたのだった。——たしかにそれはこの人々をして、暗鬱な反省の一瞬には立たせていた。——が、その一瞬がたとすぐ、「だまれ、無用な雑談」

と、公卿のひとりが、こう自己を晦ます逆作用にまかせて烈しく発言していた。

「知らぬか、廷尉。——大義親ヲ滅ス、とあるのを。異朝でもそれが新しい朱子の学として奉じられておる。遠い魏朝にあつた故事などは早やカビ臭いわ。……いや、坊門どの」

と、その公卿は、おなじ列にある清忠のほうを見て。

「さだめしお上におかれても苦々しゅうおわせられましよう。微賤な一廷尉の分際が、

かくも長々と、愚言を奏したてまつろうなどは、たれしも夢思わぬことではあつたが、賜謁しえつをお取次いたした奏者そうじゃのつみも軽くない。……ま、ともあれ、早や御立座ごりゆうざをねごうてはいかがでしようか」

「ウむ」

と、清忠が、玉座へむかつて、笏しやくを正しかけたときである。後醍醐のおひぎも、すつと同時にお立ちになった様子が、簾すの下からうかがわれた。

正成は、おもわず、

「……あ」

と、両手を下へつかえ直した。なろうものなら、その手は、帝のおん衣ぞのすそにすがりついて、なお一ト言ひとことの御誕ごじようをと、おせがみしたかつたに違いあるまい。指のさきも、ひれ伏した鬢びんの毛けも、ふるえていた。漕さんぜん然と、涙してないだけだった。

「廷尉。退さがんなさい」

「……は」

「疾とう。退さがらっしゃい」

「はい」

「なにを猶予」

「未練みれんにはございますが、いまを措いては、まったく時を逸いっします。あわれ、まいちど、御集議にかけ給わつて」

「それどころでない。逆鱗げきりんあらせられた御気色みけしきですらある。——きつと、今日のことは、やがて重いおとがめでもあらうぞ」

「正成の身、たとえばいかなうな罪に問われましようとも、その儀はいといません。ただ何とぞ以て、いま一度の御評議でも」

「何と、物の見えぬ鈍にぶい男よ。ばかな！」

と、公卿たちは一せいに立つた。

そして声のない笑いを正成の背へ向けながらみな去った。

青空文庫情報

底本：「私本太平記（六）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2010（平成22）年1月5日第26刷発行

「私本太平記（七）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年4月11日第1刷発行

2009（平成21）年12月1日第25刷発行

※副題は底本では、「風花帖《かざばなじょう》」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5,86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2012年11月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私本太平記

風花帖

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>